

Hayama

Site

早馬遺跡

-県営経営体育城基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2008年3月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は「県営経営体育成基盤整備事業横市地区」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した早馬遺跡の報告書であります。

都城市的横市地区では、県営手取成基盤整備事業（現在は県営経営体育成基盤整備事業に移行）に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成8年度より実施されており、これまでにも数々の成果が報告されております。

本書に収載いたしました早馬遺跡は、本事業に伴い発掘調査の実施された最後の遺跡であります。ここで中世の水田跡や掘立柱建物跡などの遺構や、青磁・白磁といった貿易陶磁器や土師器などの遺物が多数出土しており、都城盆地における中世集落の様相を知る上で重要な遺跡であるといえます。

本年度をもって、「横市地区県営は塙整備事業」に伴う発掘調査の報告書は全て刊行されることとなります。足掛け10年に亘り実施されてきた発掘調査、そして今年度まで継続して行われてきた報告書刊行のための整理作業がようやく終わりを迎えました。これまで調査された11遺跡から得られた先人の生活・文化に関する多くの情報は、これから現代を生きてゆく我々にとっても有益な知識となるものと信じております。

本書が一人でも多くの人によって活用され、地域の歴史に対する理解を深めるための一助となれば幸いであります。最後になりましたが、発掘調査に従事して頂いた市民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なるご協力・ご理解を頂きました。心より深謝申し上げます。

2008年3月

都城市教育委員会
教育長 玉利 謙

例　言

1. 本書は、「県営経営体育成基盤整備事業横市地区」に伴い都城市教育委員会が平成17年度に実施した早馬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は真北である。
3. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
4. 土壠と遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) 2001年度前期版を参考にした。
5. 現場における遺構の実測は、作業員の協力を得て山下大輔・加賀淳一・外山亞紀子・津曲千賀子が行った。
6. 遺構の写真撮影は山下・加賀・外山・津曲が行った。また、空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
7. プラント・オバール分析等の自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。
8. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、豎穴状遺構1/50、掘立柱建物跡1/100、溝状遺構・不明遺構1/80、土坑1/40、硬化面1/40・1/80・1/100とした。遺物実測図は、土器・土師器・陶磁器類が1/3、須恵器・東播系須恵器が1/4、石器を1/2・1/3・1/4とし、各図版に示している。
9. 本書に掲載した遺構のトレイスは株式会社CUBICの「トレイスクン」を用いて山下・加賀が行い、遺物の実測・トレイスは整理作業員の協力を得て山下・加賀が行った。また、火打ち石の観察・実測については藤木聰氏(宮崎県埋蔵文化財センター)に依頼した。
10. 本書に掲載した遺物の写真は山下が撮影した。
11. 本書の執筆は第1・2章、第3章第1節～3節、第5章を山下が、第3章第4節を加賀が行い、第4章の執筆は株式会社古環境研究所に依頼した。編集は山下・加賀が行った。
12. 発掘調査および報告書作成にあたり下記の方々よりご助言・ご協力を頂いた。
宍戸章(宍戸地質研究所)、柴田博子(宮崎商業経営大学)、矢部喜多夫・兼畠光博・栗山葉子・近沢恒典・下田代清海・中村友昭(都城市教育委員会)
13. 遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。
SA: 豊穴状遺構 SB: 掘立柱建物跡・ピット列 SD: 溝状遺構 SC: 土坑 SF: 硬化面
SX: 不明遺構
14. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録(図面・写真など)は都城市教育委員会で保管している。
15. 出土遺物の分類および時期比定に関しては以下の文献に依った。
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No2
兼畠光博 1997 「中世の土師器埋納遺構について」『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書 第38集
都城市教育委員会
兼畠光博 2004 「都城盆地における中世土器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号
宮崎考古学会
森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No2
森田 移 1995 「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』真釋社
山本信夫 2000 「太宰府跡跡XV－陶磁器分類編－」太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会

本文目次

第1章 序説	1	第4節 東区の調査成果	49
第1節 調査に至る経緯	1	(1) 中世の遺構	49
第2節 調査の組織	2	1 挖立柱建物跡 (SB)	49
第2章 遺跡の位置と環境	3	2 溝状遺構 (SD)	51
第1節 地理的環境	3	3 土坑 (SC)	60
第2節 歴史的環境	3	4 硬化面 (SF)	66
第3章 発掘調査の成果	7	5 不明遺構 (SX)	68
第1節 調査の概要	7	(2) 包含層出土の遺物	68
第2節 基本土層	10	1 繩文時代の遺物	68
第3節 西区の調査	13	2 弥生時代の遺物	68
(1) 中世の遺構	13	3 古墳時代の遺物	69
1 挖立柱建物跡 (SB)	13	4 中世の遺物	69
2 溝状遺構 (SD)	15	(3) 小結	77
3 土坑 (SC)	29	第4章 早馬遺跡の自然科学分析	93
4 硬化面 (SF)	36	第1節 プラント・オパール分析	93
5 不明遺構 (SX)	36	第5章 まとめ	99
(2) 包含層出土の遺物	37	第1節 中世の遺構・遺物について	99
1 繩文時代の遺物	37	第2節 横市遺跡群における	
2 弥生時代の遺物	37	早馬遺跡の位置づけ	101
3 中世の遺物	37		
(3) 時期不明の遺構・遺物	47		
1 積穴住居跡 (SA)	47		
(4) 小結	48		

挿図目次

第1図 遺跡位置図	4	第29図 西区包含層出土遺物⑦	45
第2図 周辺地形図	5	第30図 西区包含層出土遺物⑧	46
第3図 調査区域図	6	第31図 西区豊穴状遺構実測図	47
第4図 西区遺構分布図	8	第32図 東区掘立柱建物跡実測図	50
第5図 東区遺構分布図	9	第33図 東区溝状遺構実測図①	52
第6図 土層柱状模式図	10	第34図 東区溝状遺構実測図②	53
第7図 西区土層断面図	11	第35図 東区溝状遺構実測図③	54
第8図 東区土層断面図	12	第36図 東区遺構内出土遺物①	55
第9図 西区掘立柱建物跡実測図①	14	第37図 東区溝状遺構実測図④	57
第10図 西区掘立柱建物跡実測図②	15	第38図 東区遺構内出土遺物②	58
第11図 西区溝状遺構実測図①	16	第39図 東区遺構内出土遺物③	59
第12図 西区溝状遺構実測図②	17	第40図 東区土坑実測図①	61
第13図 西区溝状遺構実測図③	21	第41図 東区遺構内出土遺物④	62
第14図 西区遺構内出土遺物①	23	第42図 東区土坑実測図②	64
第15図 西区溝状遺構実測図④	25	第43図 東区遺構内出土遺物⑤	65
第16図 西区溝状遺構実測図⑤		第44図 東区硬化面実測図①	66
不明遺構実測図①	26	第45図 東区硬化面実測図②	67
第17図 西区溝状遺構実測図⑥		第46図 東区不明遺構実測図	68
不明遺構実測図②	27	第47図 東区包含層出土遺物①	70
第18図 西区遺構内出土遺物②	28	第48図 東区包含層出土遺物②	72
第19図 西区上坑実測図①	31	第49図 東区包含層出土遺物③	73
第20図 西区上坑実測図②、 SD21・SF05実測図	33	第50図 東区包含層出土遺物④	74
第21図 西区上坑実測図③	35	第51図 東区包含層出土遺物⑤	75
第22図 西区遺構内出土遺物③	36	第52図 東区包含層出土遺物⑥	76
第23図 西区包含層出土遺物①	38	第53図 H-13区におけるプラント・オパール 分析結果	96
第24図 西区包含層出土遺物②	39	第54図 J-24区におけるプラント・オパール 分析結果	97
第25図 西区包含層出土遺物③	40	第55図 J-35区におけるプラント・オパール 分析結果	97
第26図 西区包含層出土遺物④	41		
第27図 西区包含層出土遺物⑤	43		
第28図 西区包含層出土遺物⑥	44		

表 目 次

第1表 早馬遺跡出土遺物観察表①	79
第2表 早馬遺跡出土遺物観察表②	80
第3表 早馬遺跡出土遺物観察表③	81
第4表 早馬遺跡出土遺物観察表④	82
第5表 早馬遺跡出土遺物観察表⑤	83
第6表 早馬遺跡出土遺物観察表⑥	84
第7表 早馬遺跡出土遺物観察表⑦	85
第8表 早馬遺跡出土遺物観察表⑧	86
第9表 早馬遺跡出土遺物観察表⑨	87
第10表 早馬遺跡出土遺物観察表⑩	88
第11表 早馬遺跡出土遺物観察表⑪	89
第12表 早馬遺跡出土遺物観察表⑫	90
第13表 早馬遺跡出土遺物観察表⑬	91
第14表 早馬遺跡出土遺物観察表⑭	92
第15表 早馬遺跡におけるプラント・オパール 分析結果	96

写真図版目次

図版1 早馬遺跡スナップ	1
台風により水没した調査区	
調査区に横倒しになった木	
溝底にたまつた湧水	
ポンプを導入しての溝の掘り下げ作業	
図版2 早馬遺跡の植物珪穀体	
(プラント・オパール)顕微鏡写真	98
図版3 早馬遺跡空中写真	103
早馬遺跡遠景(南東上空より霧島を望む)	
早馬遺跡調査区全景	
図版4 西区の調査①	104
西区土層堆積状況(K-13杭付近)	
西区土層堆積状況(Ⅲ層攪拌状況)	
SB03・04・05完掘状況(東から)	
SB07完掘状況(北から)	
SB09・10・11・12完掘状況(東から)	
SB09・11完掘状況(南東から)	
SB10・12完掘状況(東から)	
SB13完掘状況(南東から)	
図版5 西区の調査②	105
SD01完掘状況(南東から)	
SD01・02・03遠景(南西から)	
SD04土層断面	
SD04・05・06完掘状況(南から)	
SD07土層断面	
SD07・08完掘状況(東から)	
SD12土層断面	
SD12(北側)完掘状況(東から)	
図版6 西区の調査③	106
SC01白磁碗(47)検出状況(南西から)	
SC01完掘状況(南西から)	
SC48土師器杯(51)出土状況(東から)	
SC58土師器小皿(57)出土状況(南から)	
J-13杭付近土坑群完掘状況(南東から)	
SX03・SD24・SC70・SC71完掘状況 (南西から)	
IVb層遺物出土状況	
青白磁合子身(119)出土状況	
図版7 東区の調査①	107
SB01完掘状況(西から)	
SB02完掘状況(西から)	
SB06・14完掘状況(西から)	
SB08完掘状況(南西から)	
SD15完掘状況(南から)	

SD15・16・17完掘状況（南から）	
SD19・20完掘状況（南から）	
SD20完掘状況（北から）	
図版8 東区の調査②	108
SD20で検出された砾・軽石	
SD25・26完掘状況	
SD25杯（323）検出状況	
SF06検出状況（南から）	
SC10完掘状況（南から）	
SC21完掘状況（南から）	
SC23遺物出土状況（東から）	
SC23完掘状況（東から）	
図版9 東区の調査③	109
SC38土師器出土状況（西から）	
SC38土層断面	
SC39・40・41・42完掘状況（東から）	
SC43・44・SB06完掘状況（南から）	
SC64完掘状況（東から）	
SC73完掘状況（南から）	
SC65完掘状況（南から）	
SX02完掘状況（西から）	
図版10 西区遺構内出土遺物①	110
SB09P1/SB10P2/SD01/SD04/SD07/	
SD12/SD14	
図版11 西区遺構内出土遺物②	111
SD27/SC01/SC17/SC18/SC20/SC48/	
SC50・52/SC55/SC59・61/SC62・67	
図版12 西区遺構内出土遺物③・	
包含層出土遺物①	112
SC56・58/SD07	
縄文土器/石歛/剥片石器/石包丁/台石	
図版13 西区包含層出土遺物②	113
白磁碗/白磁皿/青白磁合子/青磁碗	
図版14 西区包含層出土遺物③	114
青磁碗/青磁皿/中国陶器	
図版15 西区包含層出土遺物④	115
東播系須恵器壺/東播系須恵器鉢/	
土師器杯・小皿/石鍋・滑石製品	
鉄製品・鉄滓・銅	
図版16 東区遺構内出土遺物①	116
SB14/SD16/SD15/SD19/SD20/SD25	
図版17 東区遺構内出土遺物②	117
SD26	
図版18 東区遺構内出土遺物③・	
包含層出土遺物①	118
SC23/SC38/SC39	
縄文土器/弥生土器・古墳土師器	
打製石斧・剥片石器・磨石・砥石・台石	
図版19 東区包含層出土遺物②	119
白磁碗/白磁皿/青磁碗/青磁皿/中国陶器	
国産陶器	
図版20 東区包含層出土遺物③	120
国産陶器/瓦質上器・国産陶器/須恵器	
東播系須恵器/土師器杯/土師器小皿	
石鍋・滑石製品・鉄滓/鉄製品/軽石製品	

第1章 序説

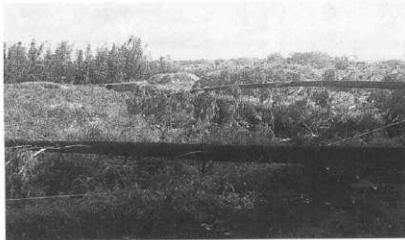
第1節 調査に至る経緯

宮崎県都城市横市地区では、平成5年度に県営ほ場整備事業（平成9年度から平成13年度まで県営扱い手育成基盤整備事業、平成15年度からは県営経営体育成基盤整備事業）の実施が採択された。平成6年度宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が事業区域一帯の分布調査を行ったところ、事業対象区域170ヘクタール内において、10遺跡、約44ヘクタールに及ぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が確認された。その後、都城市教育委員会は、宮崎県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、北諸県農林振興局と協議を行い、平成8年度からは記録保存のため、緊急の発掘調査を行っている。平成16年度までで10遺跡の発掘調査が実施されている。

早馬遺跡は上述の県営ほ場整備事業に伴い調査された最後の遺跡である。早馬遺跡については、平成13年2・3月に宮崎県文化課により試掘調査が実施された。さらに工事計画と照合した結果、計画範囲の中で宮崎県文化課による試掘が及んでいない範囲については、平成16年12月4・5日に都城市教育委員会文化財課が追加の試掘調査を行った。これらの試掘調査の結果を踏まえ、切土により遺構および遺物包含層に影響があると考えられる4,700m²について発掘調査を実施した。現場における発掘調査は平成17年5月2日から開始した。溝状遺構の掘り下げ作業では、絶え間なく湧き出る水をポンプで吐き出しながらの作業となった。また、平成17年9月5日には日本各地に大きな爪あとを残した台風14号が宮崎を直撃した。この台風によりなぎ倒された木が調査区に横倒しになったり、調査区内がプールのような状態になりその排水には1週間以上が必要であった。このようなアクシデントに見舞われたが、現場での作業は平成17年11月4日に無事終了することができた。現場での発掘調査と平行して、市教育委員会文化財課において水洗・注記・遺物台帳整理などの作業を行った。報告書執筆・編集作業に関しては平成19年度に行った。



台風により水没した調査区



調査区に横倒しになった木



溝底にたまつた湧水



ポンプを導入しての溝の掘り下げ作業

図版1 早馬遺跡スナップ

第2節 調査の組織

平成17年度（発掘調査時）の組織

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査責任者 教育長 玉利 讓（平成17年6月15日から）
- ・調査事務局 教育部長 今村 昇（平成17年10月1日から）
平成17年12月28日まで文化財課長兼務
- 文化財課長 有馬 千 池（平成17年9月30日まで）
高野 隆 志（平成18年1月1日から）
- 文化財課課長補佐 新宮 高 弘
- 文化財課副主幹 矢部喜多夫
- 文化財課事務嘱託 諸 友 香
- ・調査担当者 文化財課主事補 山下 大 輔
文化財課主事補 加覽 淳 一
文化財課嘱託 外山亜紀子
文化財課嘱託 津曲千賀子
- ・発掘調査従事者 猪ヶ倉重光、猪ヶ倉正子、今村まさ子、今村ミツ子、内山次男、奥 利治、
小山田利丸、上官田ミチ、蒲生サダ、木村七郎、児玉春男、下玉利文代、
庄屋幸子、武石重利、高橋露子、立石カズ子、永田義晴、中須純子、
野上トシ子、野田ツミ子、橋口みどり、早瀬 航、平田美智子、福岡悦雄、
馬籠恵子、森山タツ子、山下美佐子、横山照良、吉村則子、来住サチ子

平成19年度（報告書刊行年度）の組織

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査責任者 教育長 玉利 讓
- ・調査事務局 教育部長 岩崎 透
- 文化財課課長 高野 隆 志
- 文化財課主幹 新宮 高 弘
- 文化財課副主幹 矢部喜多夫
- ・調査担当者 文化財課主事 山下 大 輔
文化財課主事 加覽 淳 一
- ・整理作業従事者 内村ゆかり、奥 登根子、児玉信子、水光弘子、福岡八重子、横尾恵美子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

都城市は九州東南部、宮崎県の南西部の都城盆地中央、鹿児島県との県境に位置する。盆地は北東を諸県丘陵、東から南にかけて鰐塚山地に、北西を霧島火山群、西を瓶台山・白鹿山に囲まれており、地溝状の窪地となっている。東側の地形は起伏に富み、山地から流下する河川によってその流は開析し、扇状地を形成している。西側の山地は盆地底にかけて緩やかに傾斜する。また、盆地中央を多くの支流を集めながら大淀川が北流している。その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県曾於市（旧財部町）を経て蛇行しながら都城市中央部へと流下し、大淀川に合流する。この横市川両岸には、横市地区遺跡群と称される遺跡が多数存在し、本遺跡もこの遺跡群に含まれる。

また、横市川流域一帯の地形区分については、宍戸章氏が米軍撮影の空中写真の判読と現況地形・地質路頭の観測にもとづいて実施している（第2図にその一部を掲載）。宍戸氏は、成層シラス面より下位で、現河床の存在する沖積低地面を除く面を標高・テフラ等から区分し、桜島薩摩テフラ（P14）かそれより古いテフラに覆われるものを低位段丘、喜界アカホヤ火山灰やそれ以降の霧島御池軽石等に覆われるものを沖積段丘とし、さらに標高の違いから低位段丘を3つの面に、沖積段丘を2つの面に分けている。それによれば、早馬遺跡は西側に隣接する平田遺跡C地点と同一の沖積段丘（at1）上に位置しており、平田遺跡A・B地点はそれより上位の低位段丘（t2）に位置する。

第2節 歴史的環境

先に述べたように、横市川流域一帯では平成8年度から都城市教育委員会により継続的な発掘調査が実施されており、宮崎県埋蔵文化財センターの調査分を含めると20ヶ所以上の遺跡が確認・調査されている。市内でも最も遺跡の密度が高く、考古学的にも重要な成果が上げられている地域である。以下、時代ごとに周辺の遺跡を概観し、早馬遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。

横市地区では旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡はみつかっていない。最も古いものは縄文時代早期の所産である。縄文時代の遺跡は、成層シラス面（S）や低位段丘面で確認されている。早期の遺跡では、胡麻段遺跡、田谷・尻枝遺跡、加治屋B遺跡、平田遺跡B地点などが挙げられる。前～中期の遺跡は市内全体を見渡しても数えるほどであり、横市地区においても星原遺跡で当該時期の集石遺構や土器をはじめとする遺物が出土しているのみである。後～晩期になると遺跡が増加し、横市地区では列島規模でみても最古級の水田跡が検出された坂元A遺跡をはじめ、馬渡遺跡、中尾山・馬渡遺跡、坂元B遺跡、加治屋B遺跡、星原遺跡、正坂原遺跡、横市中原遺跡、肱穴遺跡、今房遺跡など多くの遺跡が存在する。

弥生時代前期から中期前半の遺跡の様相は不明だが、中期後半には加治屋B遺跡と平田遺跡A・B地点という低位段丘2面（t2）に立地する遺跡で集落跡が確認されている。弥生時代後期～終末になると低位段丘以外にも集落跡がみられるようになる。この時期の遺跡としては、馬渡遺跡、坂元B遺跡、加治屋A遺跡、加治屋B遺跡、今房遺跡、平田遺跡C地点などが挙げられよう。

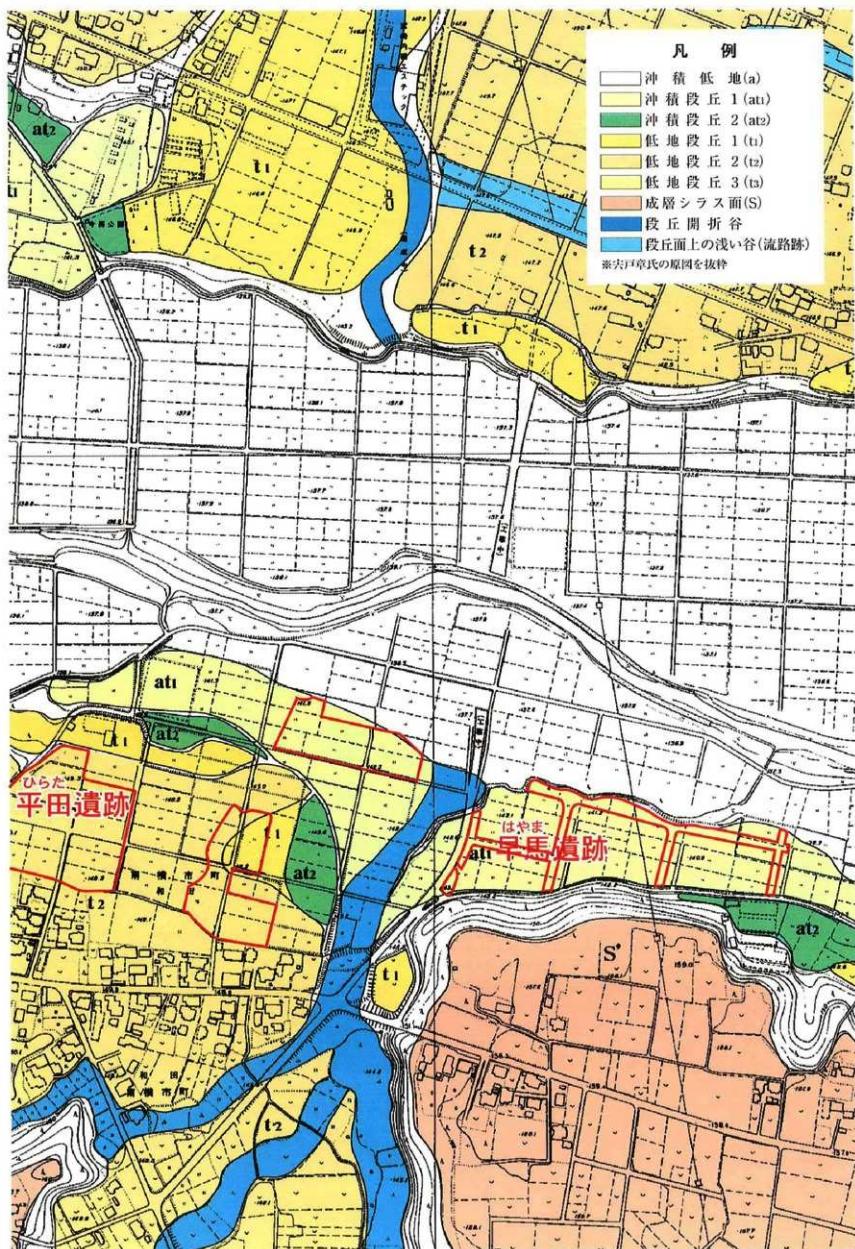
古墳時代の遺跡としては、蓑原遺跡、横市中原遺跡、中尾遺跡、牧の原第2遺跡、鶴喰遺跡、星原遺跡などが挙げられる。いずれも当該時期の竪穴住居跡が検出されており、集落跡であると考えられる。特に鶴喰遺跡では68基を数える多数の竪穴住居跡が検出され、その中には住居内にカマドをもつものや馬蹄が出土した住居跡も含まれている。

古代から中世にかけて多くの遺跡が調査されている。まず、8世紀後半の集落遺跡の肱穴遺跡がある。その後、9世紀から10世紀前半の遺跡を列挙すると、馬渡遺跡、中尾山・馬渡遺跡、江内谷遺跡、坂元B遺跡、鶴喰遺跡、加治屋B遺跡、星原遺跡、今房遺跡、平田遺跡A・B地点などが挙げられる。島津荘立莊期である11世紀前半の遺跡としては、当該時期の土器や貿易陶器がセットで出土した坂元B遺跡が唯一であるといつてよい。さらに時代が下って11世紀後半から15世紀後半までの遺跡は、大溝がめぐる居館跡と推定される遺構が確認された加治屋B遺跡、市内でも最大規模の掘立柱建物跡が検出された鶴喰遺跡をはじめ、蓑原遺跡、馬渡遺跡、坂元B遺跡、肱穴遺跡、今房遺跡、正坂原遺跡など多くの遺跡が存在する。鶴喰遺跡では文明軽石に覆われた中世の水田跡も検出されている。このような中世の水田跡は横市地区の調査で多くみつかっており、他には肱穴遺跡、畑田遺跡、母智丘谷遺跡、江内谷遺跡、坂元A遺跡、平田遺跡C地点でも確認されている。



- | | | | | |
|-------------|-----------|----------|------------|----------|
| 1：早馬遺跡 | 2：正坂原遺跡 | 3：平田遺跡 | 4：今房遺跡 | 5：肱穴遺跡 |
| 6：牧の原第2遺跡 | 7：鶴喰遺跡 | 8：上牧第2遺跡 | 9：横市中原遺跡 | 10：新宮城跡 |
| 11：畑田遺跡 | 12：母智丘谷遺跡 | 13：胡麻段遺跡 | 14：旧谷・尻枝遺跡 | 15：星原遺跡 |
| 16：加治屋A遺跡 | 17：加治屋B遺跡 | 18：坂元A遺跡 | 19：坂元B遺跡 | 20：江内谷遺跡 |
| 21：中尾山・馬渡遺跡 | 22：池原遺跡 | 23：中尾遺跡 | 24：馬渡遺跡 | 25：蓑原遺跡 |

第1図 遺跡位置図 (S=1/2500)



第2図 地形面区分図 (S=1/5000)

さらに近世の遺跡として、肱穴遺跡では17世紀から18世紀にかけての集落が、坂元B遺跡と加治屋B遺跡では18世紀後半以降の集落が営まれていたことが分かっている。

【参考文献】

- 都城市教育委員会 1993 『久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正板原遺跡』都城市文化財調査報告書 第25集
都城市教育委員会 1996 『加治屋遺跡2』都城市文化財調査報告書 第35集
都城市教育委員会 1997 『出谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書 第38集
都城市教育委員会 1998 『鷲崎遺跡』都城市文化財調査報告書 第44集
都城市教育委員会 1999 『肱穴遺跡』都城市文化財調査報告書 第47集
都城市教育委員会 2000 『横市地区遺跡群肱穴遺跡1・今房遺跡・馬渡遺跡(第1次)』都城市文化財調査報告書 第50集
都城市教育委員会 2001 『横市地区遺跡群馬渡遺跡(第2次)・坂元A遺跡』都城市文化財調査報告書 第55集
都城市教育委員会 2002 『横市地区遺跡群江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡(第1次調査)』
都城市文化財調査報告書 第58集
都城市教育委員会 2003 『江内谷遺跡』都城市文化財調査報告書 第59集
都城市教育委員会 2004 『鶴崎遺跡(古墳時代編)』都城市文化財調査報告書 第61集
都城市教育委員会 2004 『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書 第62集
都城市教育委員会 2004 『今房遺跡(第2次調査)』都城市文化財調査報告書 第64集
都城市教育委員会 2005 『横市地区遺跡群平出遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書 第68集
都城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書 第71集
都城市教育委員会 2006 『星原遺跡』都城市文化財調査報告書 第72集
都城市教育委員会 2007 『鶴崎遺跡(中世編)』都城市文化財調査報告書 第79集
都城市教育委員会 2007 『今房遺跡』都城市文化財調査報告書 第80集
都城市教育委員会 2007 『加治屋B遺跡(绳文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書 第81集
宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『牧の原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第19集
宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・裴原遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・妹坂遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『宇都第3遺跡・横市中原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第85集



第3図 周辺地形および調査区域図 (S=1/4000)

第3章 発掘調査の成果

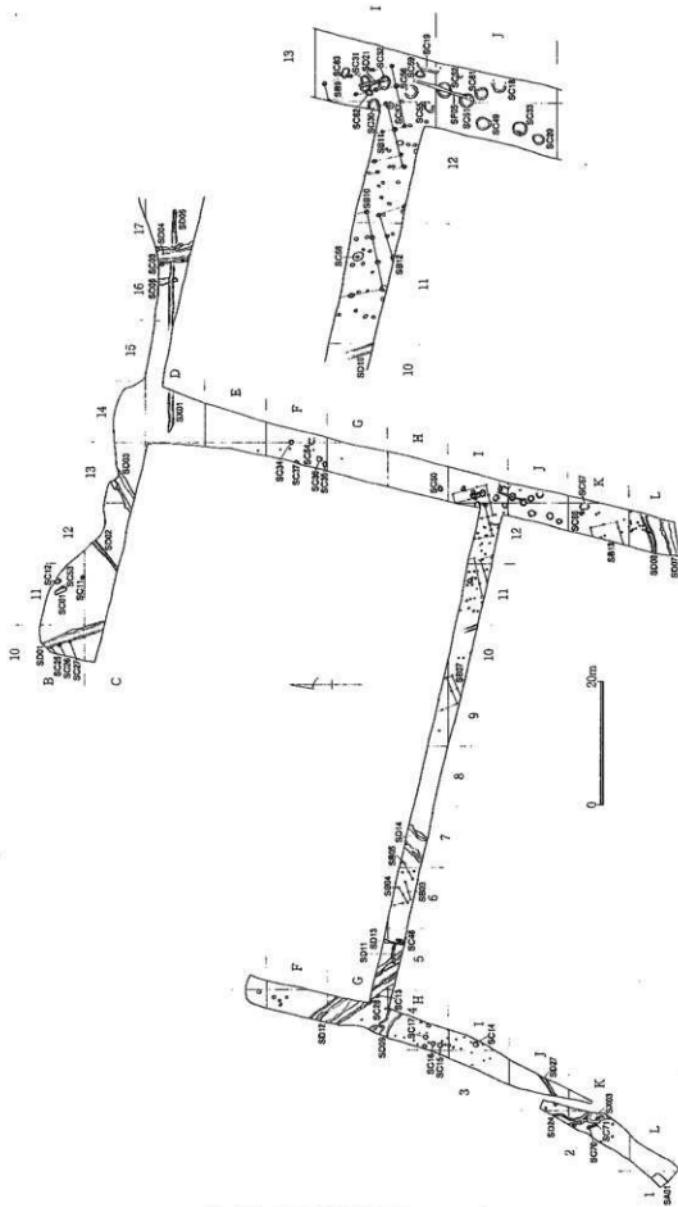
第1節 調査の概要

調査対象地は前年度（平成16年度）に調査を実施した平田遺跡C地点の東側に隣接しており、調査前は水田であった。標高は調査区南西が最も高く、142.0m前後である。そこから調査区東側に向かい緩やかに傾斜してゆき、最も低い調査区東端の標高は139.8m前後で、その標高差は約2m程である。調査区北端は一段下位の沖積低地との境にあたり、緩く起伏のある地形を呈す。

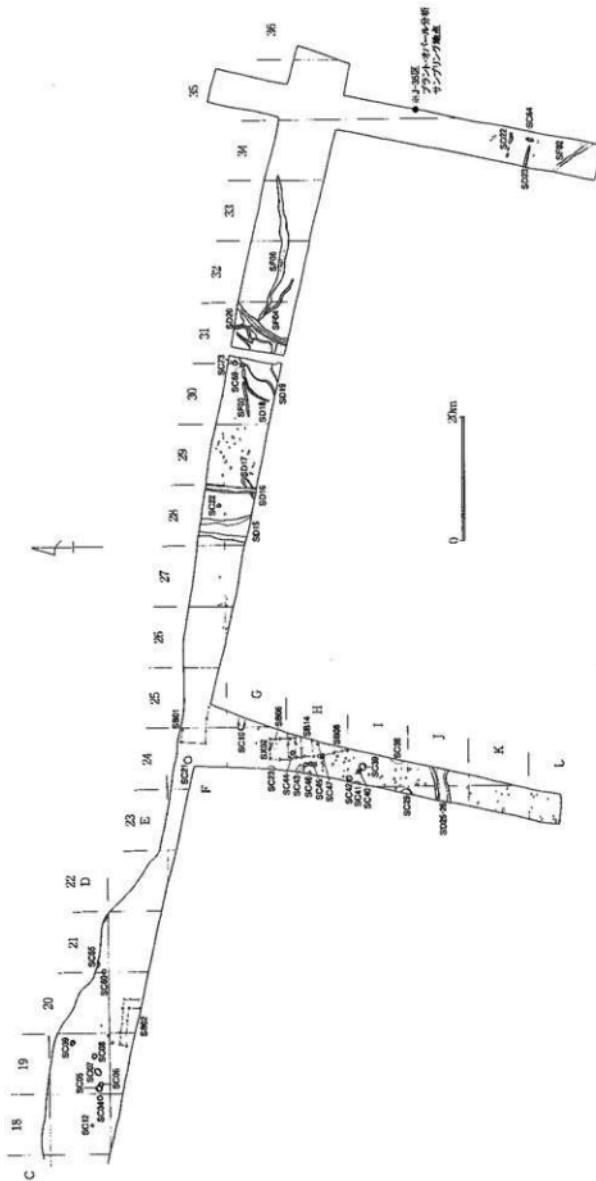
調査区は、南北約110m、東西約350mにおよぶ細長いトレンチ状を呈している。調査区の設定にあたっては、公共座標軸系のSN座標線に一致した10m×10mを1区画とし、東西方向を西から1、2、3…の順に算用数字で、南北方向を北からA、B、Cの順にアルファベットで標記した。この組み合わせで区名を付けた。また、調査区が東西約350mにもおよぶため、便宜的に調査区中央付近のD-18杭を境に西側を西区、東側を東区とし、調査を進めた。

現場での調査はまず、試掘結果に基づき重機により表土層であるI・II層および一部堆積していたIII層文明軽石層の剥ぎ取りから始めた。試掘結果によれば、調査区において部分的に文明軽石層が遺存しており、水田跡が遺存している可能性も考えられていた。しかし表土剥ぎ取りの際に確認すると、文明軽石が遺存するには調査区内の一部であり、しかも遺存状態も良好なものではなく極めて薄く残っている範囲が広かつた。さらに、トレンチ状に細長い調査区においては、面的に把握することは困難であると判断し、調査区断面による記録と、プラント・オパール分析によるものに止めた。その後調査区の縁に沿って幅80cm程の土層観察用トレンチを設定した。このトレンチの土層により基本土層の設定を行い、続けて人力によるIVa・IVb層（中世遺物包含層）の掘り下げに入った。ここで調査区の一部で遺物（陶磁器片・土師器）がまとまって出土した。そのため、隨時トータルステーションによる遺物の取り上げを行い、それと併行して、IV層中での遺構検出を試みた結果、東区で一部IVb層中において遺構を検出しているが、西区では遺構と考えられるものは検出されなかった。検出遺構の調査およびIV層の掘り下げ作業を終えた後、継続してVIa層の掘り下げを行った。VIa層は調査区により遺存状況が異なり、調査区の東区および西区の一部は既に後世の改変や削平を受けているためか、ほとんど残存していないか極めて薄く残っているのみの範囲が存在する。VIa層が良好に遺存しているところでは遺物が集中して出土する範囲があり、これらの遺物の出土位置・レベルを記録しながら取り上げ作業を行った。VIa層中の遺物はそのほとんどが上部からの出土である。VIa層の掘り下げ時も遺構の検出を試みた結果、西区ではVIa層の上部で土坑をいくつか検出した。しかし、掘立柱建物跡や土坑など、多くの遺構が検出されたのはVIa層の下部およびVib層上面においてである。また、VIa層がほとんど遺存していない東区でもVib層上面が遺構検出面となった。なお、西区の西側半分では表土直下が埴輪御池軽石層であったため、表土剥ぎが終了した時点で遺構の存在が確認されていた。

上述のような調査の結果、東西両調査区を合わせて掘立柱建物跡・ピット列14棟、溝状遺構27条、土坑69基が検出されている。遺構内からは貿易陶磁器、国産陶器、土師器など中世の遺物が出土している。IVbおよびVIa層上部からも同様の遺物が出土している。時期的にはほぼ11世紀後半から14世紀前半の間に収まる。またVibおよびVI層からは繩文時代から古墳時代にかけての遺物がわずかに出土しているが、当該時期の遺構が全く検出されていないことや、表面が磨耗している資料が多いことから、隣地からの流れ込みの可能性が高いと考えられる。



第4図 西区構造分布図 ($S=1/800$)

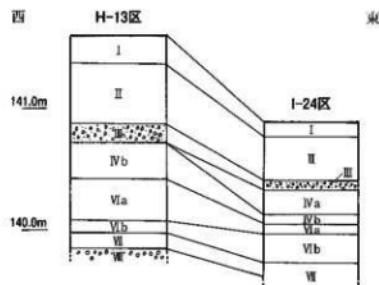


第5図 東区遺構分布図 ($S=1/800$)

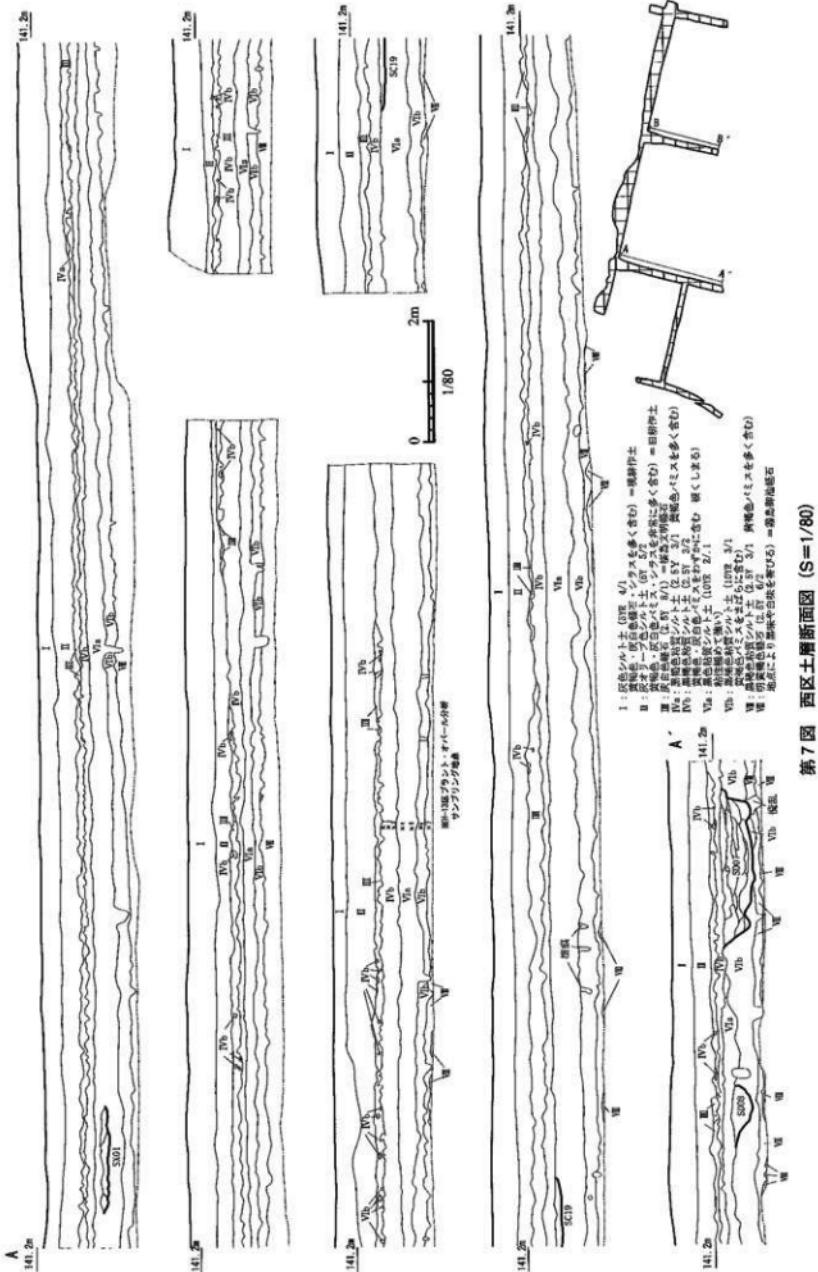
第2節 基本土層

- I層 ……黒褐色シルト土（現耕作土）
 II層 ……黒褐色砂質シルト土（旧耕作土）
 III層 ……灰白色軽石（桜島文明軽石層）
 IVa層 ……黒褐色粘質シルト土（黄褐色バミスを多く含む。中世遺物包含層）
 IVb層 ……黒褐色粘質シルト土（黄褐色バミスをわずかに含む。IVa層よりも硬く締まる。中世遺物包含層）
 V層 ……隣接する平田遺跡C地点のみで遺存しており、早馬遺跡では確認されず。
 VIa層 ……黒色粘質シルト土（バミスはほとんど含まない。粘性強い。中世遺物包含層）
 VIb層 ……黒褐色粘質シルト土（バミスを若干含む。縄文時代後期～古墳時代遺物包含層）
 VII層 ……黒褐色粘質シルト土（大粒のバミスを多く含むV層の漸移層。縄文時代後・晚期遺物包含層）
 VIII層 ……明黄橙色軽石層（霧島御池軽石）

早馬遺跡の土層堆積状況については、西側に隣接する平田遺跡C地点とはほぼ同じであるため、便宜的に平田遺跡C地点の基本土層に準拠する。I・II層は表土層である。III層は文明軽石層である。平田遺跡C地点と同様に直下のIV層が浮き上がり、ブロック状に入り込んでいる箇所が確認できた。このIV層は調査区全体に堆積しているものではなく、調査区の中央部のみに存在していた。IVa層も調査区全体に堆積するものではなく、東区の中央部を中心に堆積しており、西区では一部のみに確認された。この層からは陶器など若干の遺物が出土しているが全体的な出土量は極めて少ない。IVb層はIVa層に類似するが、バミスの量が若干少なく、土質もIVa層よりも硬くしまり、やや黒味が強い。出土遺物からはIVa層との時期差は看取できない。なお、IVa・IVb層からは多量のイネのプランツ・オパールが検出され、当該地においてはこの時期に水田稲作が行われていたものと考えられる。詳細については4章を参照されたい。平田遺跡C地点で存在していたV層は早馬遺跡においては確認されなかった。平田遺跡C地点との整合性を考えて、便宜的にV層は作らず、IVb層の下位はVI層とした。VI層はバミスの含有量によってVIa・VIbの二層に分層が可能であった。VIa層は中世の遺物包含層である。ほとんどバミスは含まず、黒色で粘性が極めて強い。遺物はVIa層の中でも上位から出土する傾向にある。プランツ・オパール分析によれば、VIa層からも比較的多くのイネのプランツ・オパールが検出されている。VIb層からは縄文時代後期～古墳時代の遺物が出土している。黄褐色バミスを若干含み、粘性もVIa層ほど強くない。VII層はその直下の御池軽石の漸移層であり、VIb層よりも粒の大きい黄褐色バミスを多く含有する。粘性もそれほど強くない。縄文時代後・晚期の遺物が出土している。平田遺跡C地点の基本土層はX層が御池軽石層であり、地点によってVII・IX層が存在した。しかし、早馬遺跡においては、VII層の下層は調査区全体で御池軽石が堆積していたため、これを基本土層のⅧ層とした。



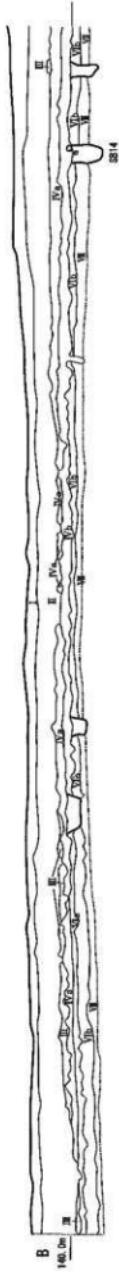
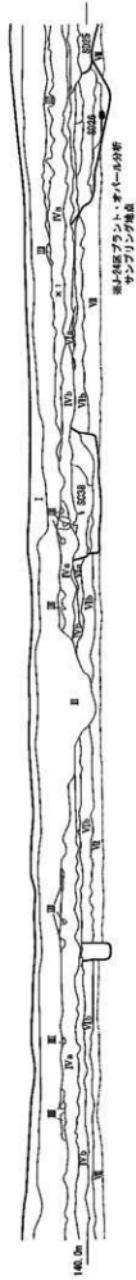
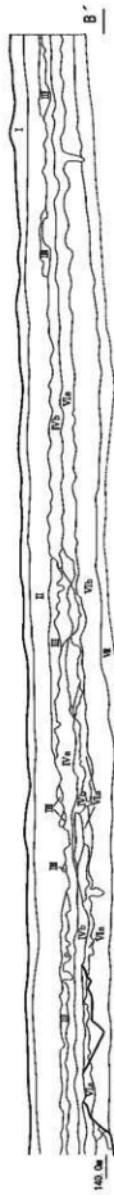
第6図 土層柱状模式図



第7図 西区土層断面図 (S=1/80)

第8図 東区土層断面図 (S=1/80)

2m
1/80



第3節 西区の調査

(1) 中世の遺構

早馬遺跡において、その主体を成すのは中世の遺構・遺物である。ここでは、中世の所産であると考えられる遺構について、遺構の種類別に報告する。なお、遺構の番号は西区と東区を合わせて通し番号としており、西区・東区それぞれで通し番号になっているものではない。

1 挖立柱建物跡・ピット列 (SB)

SB03 (第9図)

H-6区で検出した掘立柱建物である。調査区外にも延びるため全体像は不明だが、検出した規模は2間(3.0m)×2間(2.65m)である。SB04と重複するが、前後関係は不明である。遺物は出土していない。

SB04 (第9図)

SB03と重複して検出されたピット列であるが、SB03との前後関係は不明である。一辺(2間)のみが検出されており、その規模などは不明である。遺物は出土していない。

SB05 (第9図)

SB03・04の東側に隣接して検出されたピット列である。SB04と同様に一辺(2間)のみが検出された。遺物は出土していない。

SB07 (第9図)

I-10杭付近で検出した掘立柱建物跡で、確認できたのは2間(4.7m)×1間(2.65m)および底部一面のみであるため全体像は把握できない。VII層上面で検出ましたが、実際にはさらに上部から掘り込まれていたものと考えられる。それでも柱穴の掘り込みはしっかりとしており、最も深いもので0.5mを測る。明らかな柱痕は確認できなかったが、柱穴の埋土の中には幾層かに分層の可能なものもあり、これらが柱痕であった可能性がある。埋土にはIVbおよびVIIa層が堆積している。遺物は出土していない。

SB09 (第9図)

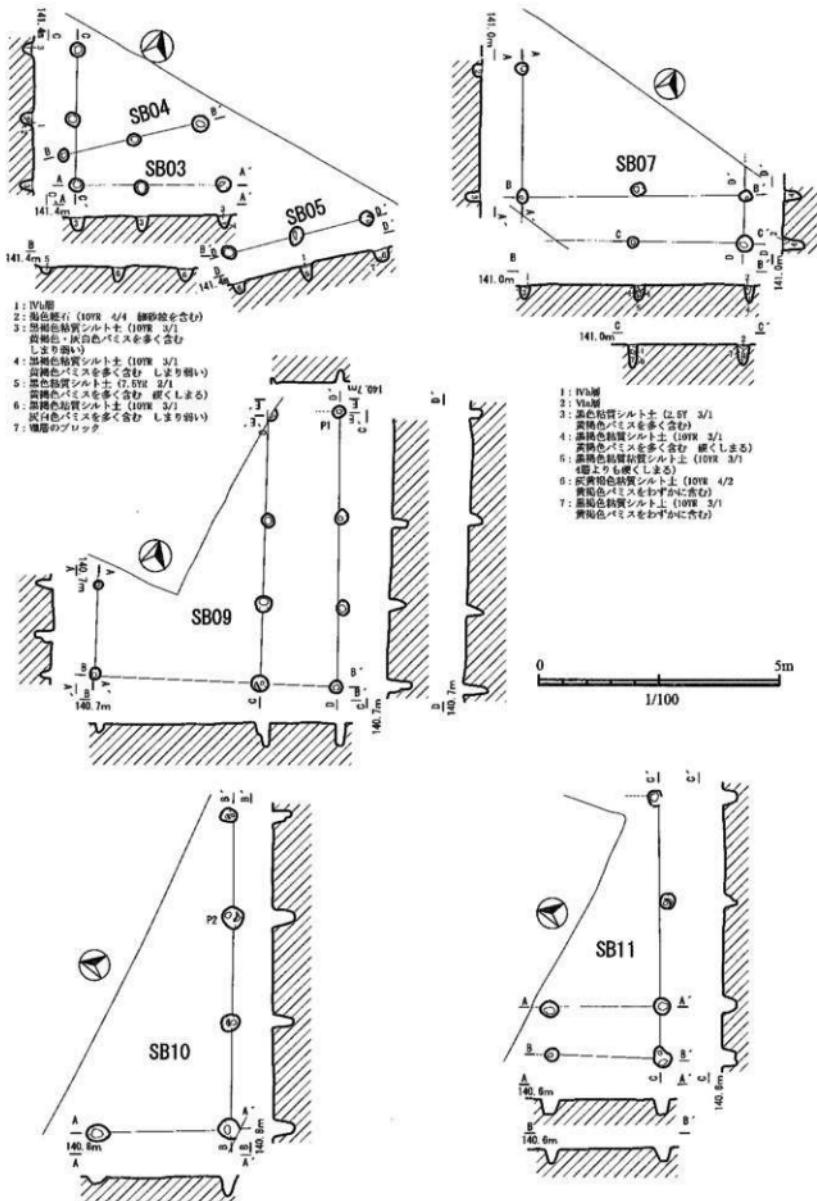
I-12・13区で検出した掘立柱建物跡である。VIIa層を掘り下げ、VIIb層に達したところで検出した。一部は調査区外に延びるが、3間(5.5m)×1間(3.5m)で東側に庇がつく。埋土は全てVIIa層の單一層であり、柱痕が残るものはなかった。ほとんどの柱穴の掘り込みはしっかりとしており、最も深いもので検出面から0.5m、最も浅いものでも0.2mを測る。一本の柱穴から青磁片(1)と粘土塊(2)が出土している。出土青磁の年代は12世紀中頃から後半に属するものである。一部SB11と重複関係にあるが、SB11からは遺物が出土しておらず、時期的な前後関係は不明である。

SB10 (第9図)

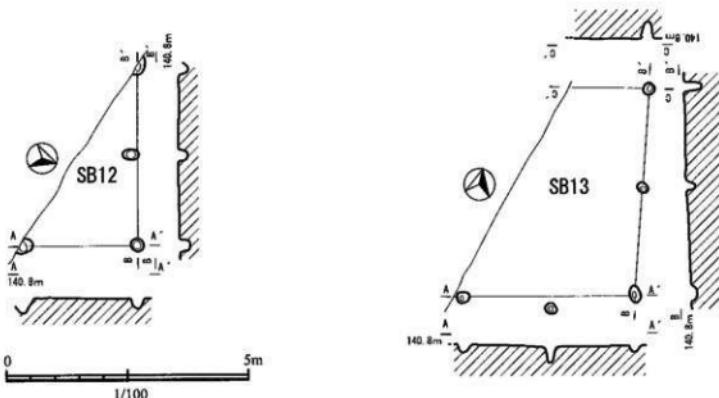
I-11区で検出した掘立柱建物跡である。VIIa層を掘り下げ、VIIb層を若干掘り下げたところで検出した。半分以上が調査区外に延びるものと思われるが、検出した部分で3間(6.5m)×1間(2.7m)を測る。柱穴は掘り込みの深いものとやや浅めのもの両者が認められるが、いずれも埋土はVIIa層の單一層である。柱痕なども認められない。遺物が出土している柱穴があり、白磁片(3)と石鍋片(4)が出土している。

SB11 (第9図)

I-12区で検出した掘立柱建物跡である。VIIb層の掘り下げ中に検出した。検出した範囲では、2間(4.35m)×1間(2.3m)で西側に庇がつくものと考えられる。埋土はVIIa層の单層であり、明確な柱痕が認められるものはなかった。遺物も出土していない。SB09とは重複関係にあり、時期的に前後するものと考えられる。



第9図 西区掘立柱建物跡実測図① (S=1/100)



第10図 西区掘立柱建物跡実測図② (S=1/100)

えられるが、新旧関係は不明である。

SB12 (第12図)

I-11・12区、SB10の南側で検出した掘立柱建物跡で、検出したのは2間(3.8m)×1間(2.35m)である。全体の半分以上が調査区外に延びるため全体像は判然としない。周辺で検出した掘立柱建物跡に比べ柱穴が浅いことから、本来の掘り込み面は検出面からかなり上部であった可能性が高い。周辺で検出したSB09、10、11という3棟の掘立柱建物跡の主軸がほぼ同一であるのに対し、SB12の主軸は若干西方向に傾く。柱穴からは遺物は出土しておらず、他の掘立柱建物跡との重複関係もみられない。そのため帰属時期および前後関係の比較は困難であるが、掘り込み面が他の掘立柱建物跡に比べ上部であったものと考えられることから、これらよりも時期的に新しい可能性がある。

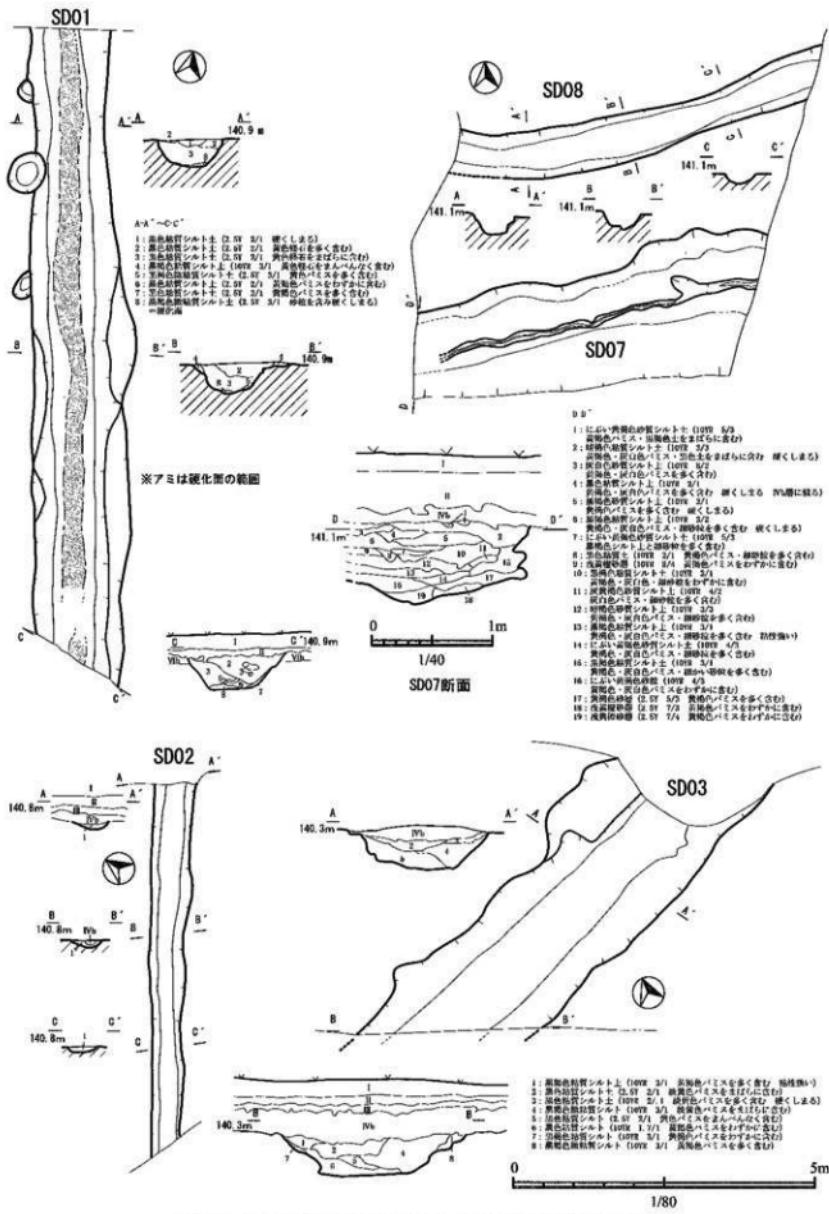
SB13 (第12図)

K-12区で検出した掘立柱建物跡である。検出したのは2間(4.3m)×2間(3.55m)であるが、約半分が調査区外にかかるため、全体像は不明である。Vla層を掘り下げVlb層に達したところで検出した。埋土は全てVla層となる。柱穴に柱痕の認められるものは存在しなかったが、掘り込みは比較的のしっかりとしており、検出面からの深さは一番深いもので0.4mを測る。

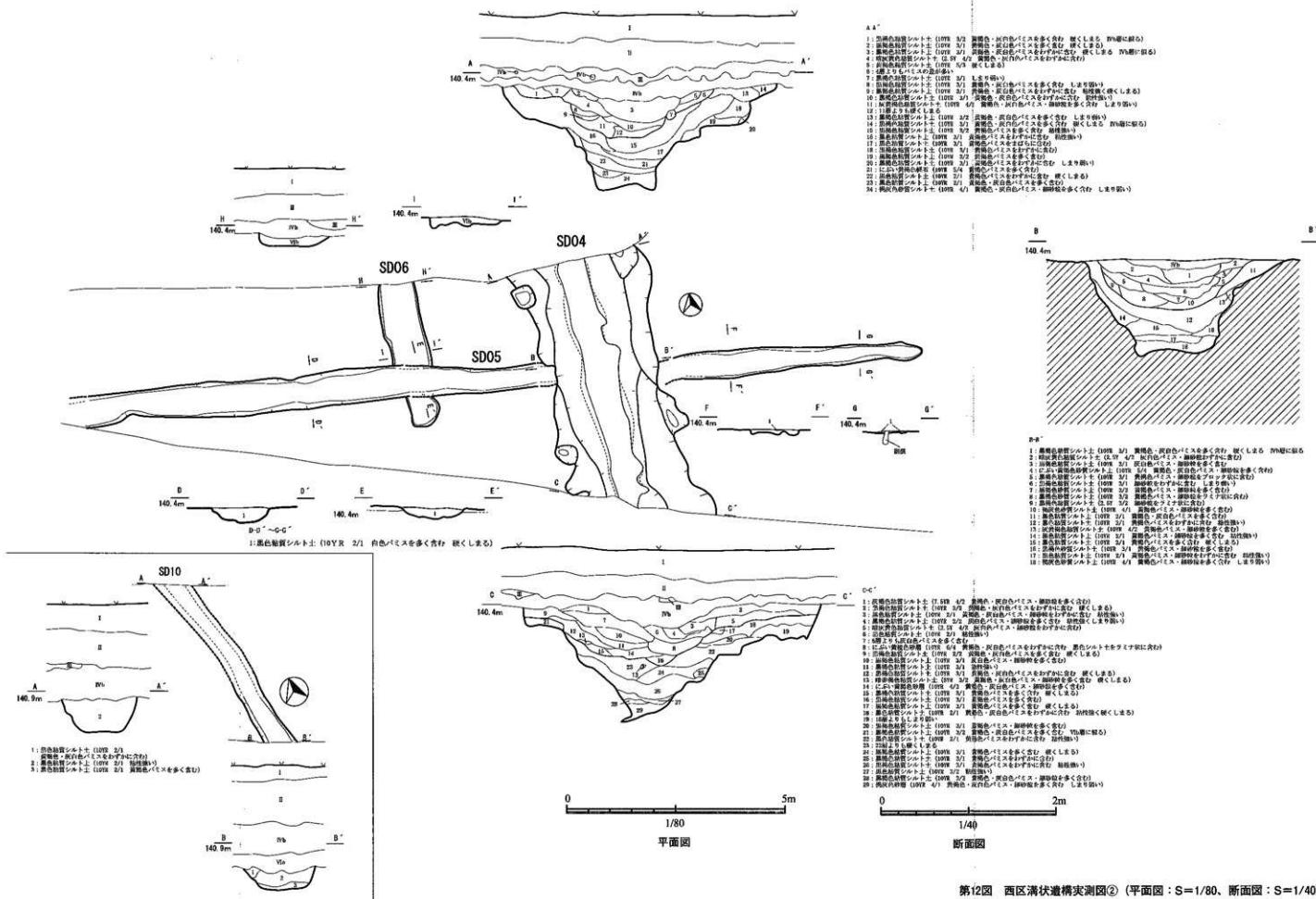
2 溝状遺構 (SD)

SD01 (第11図)

西区の北西端で検出した溝状遺構である。南北-北西方向に延び、全長は10.8mを測る。断面形態は横長の逆台形を呈す。断面で確認できる限りでは、Vlb層上部から掘り込まれているようである。埋土は黒色粘質土に若干バミスが含まれるもののが幾層か認められる。これらの埋土の中には基本土層のVla層と思われるものが含まれていることからも、やはり掘り込み面はVlb層上部であったと考えられる。底面には均一に硬化面が認められる。出土遺物は図化したもので7点を数える。5は土師器小皿、6は中国陶器の小盤でいずれも中世の所産である。これ以外に縄文時代後期(7~10)および晩期(11)の土器が出土しているが、



第11図 西区遺状遺構実測図① ($S=1/80$ SD07の断面のみ1/40)



第12図 西区溝状灌漑実測図②(平面図:S=1/80、断面図:S=1/40)

いずれも流れ込みである可能性が高い。

SD02 (第11図)

C-11・12区、SD01の東隣で検出した溝状遺構である。南西-北東方向に延びる。断面形態は浅いU字状を呈す。検出面のレベルが低かったこともあり、遺構の深さは最深部でも10cm程で、埋土は基本土層には該当しない黒褐色粘質シルト土が堆積する。土層断面を観察すると、VII層上面から掘り込まれているようである。しかし埋土の上層はIVb層となり、VIa・Vib層共に遺構周辺にはほとんど堆積していない上に、残存する遺構の深さが極めて浅いことからも本来の掘り込みはさらに上部であった可能性が高い。底面にも硬化面などは認められず、遺物も出土していない。

SD03 (第11図)

C-12・13区、SD01・02の東隣で検出された溝状遺構である。SD02にはほぼ平行する形で南西から北東に向かって延びる。断面形態はU字状を呈す。埋土は最上部にIVb層が堆積している。当溝がほぼ埋没して擂鉢状を呈していた状態に基本土層のVIIb層が堆積したものである。その下層には、黒色土が重層しており、比較的長い時間をかけて埋没したものと考えられる。遺物は出土しておらず、詳細な帰属時期は判然としない。

SD04 (第12図)

D-16・17区で検出した南北方向に延びる溝状遺構で、SD05を切る。断面形態はほぼ逆台形状を呈すが、一部底面付近がオーバーハングする。埋土はおおまかにみると下層から砂粒・黄褐色バミスを多く含む層、粘性の極めて強い黒色土、黄褐色バミスを含む黒褐色土が堆積する。埋土のほぼ中央から再度この順番での堆積がみられる事から、水量や水の流れの速さが一定でなく、時には洪水のような形で砂粒が運ばれてきたものと推測できる。掘り込みは御池軽石層まで達しているが、底面付近では御池軽石が水につかり白くふやけたような状態で堆積していた。さらに底面近くがオーバーハングしている事からも、溝が掘られた当時は比較的早い水の流れがあり、水量も多かったものと考えられる。そのため、当溝は用排水路のような導水施設としての機能を有していた可能性が考えられる。遺物は12・13の白磁碗、14の土師器小皿、15の東播系須恵器鉢などが出土した。

SD05 (第12図)

西区の北側で検出した東西方向に延びる全長約19mの溝状遺構で、SD04に切られSD06を切る。検出面のレベルが低かったためか全体的に深さも浅く、溝の一部は途中で途切れ、もう一方は土層観察用のトレーンチにかかる。埋土は残存している部分で確認できたものは一層のみであった。これは基本土層に対応するものはない上に調査区の断面にかかるものでもないため、本来はどこから掘り込まれたものかは確認できない。しかし、残存する掘り込みが浅いことから、本来はこれよりかなり上部から掘り込まれていたものと考えられる。SD06との切り合いは平面的には判断が難しく、トレーンチを設定してその断面により確認した。遺物は出土していない。

SD06 (第12図)

西区の北側で検出した南北方向に延びる溝状遺構で、SD05に切られる。上述のSD04およびSD05との前後関係を相互の切り合いから考えると、古い方から順にSD06、SD05、SD04となる。一部は調査区外に延びるが、検出した分で全長約3.2m、掘り込みの深さは最深部で約14cmを測る。断面形態はU字状を呈し、遺構埋土はVIIb層が堆積する。遺物は出土していないが、埋土にVIIb層が堆積していることから、他の遺構よりも古い時期に帰属する可能性がある。

SD07（第11図）

西区の南端、L-12区で検出した溝状遺構である。IVb層を掘り下げた段階で検出された。土層観察用の側溝トレーナーの断面から判断すると、Vlb層上面より掘り込まれており、溝底はVI層まで達する。断面はほぼU字状を呈す。埋土は大小様々な砂粒や軽石が幾重にも重なって堆積しており、硬化面なども認められないことから道路状の遺構とは考えにくく、居住域を区切る溝としての役割とともに水を引くためや排水のための水路のような機能を持ち、遺構が構築された当初から絶えず水の流れが存在していたものと考えられる。また、溝底の中央には水の流れにより形成されたと考えられる断面U字状を呈す細い溝状の窪みが存在しており、そこからは流れてきた角のおちた円礫や陶器類が挟まった状態で検出されている。これらの遺物は上述のように流れ込んできたもので、いずれも原位置を保つものではない。この溝状の窪みで検出された遺物には16のような弥生土器や、陶器（17～19、23・24）や磨石（21・22）などが見られる。このように、時期の異なる遺物が出土していることから、詳細な帰属時期は判然としない。しかし、Vlb層を掘り込んでいることや、出土遺物の大部分が中世に帰属する遺物であることから、遺構の帰属時期も概ねこの時期であると考えてよいであろう。また、底面から立ち上がりにかけては、無数の円形の窪みがみられ、そこには粒が大きめのバミスや細かい砂が入り込んでいた。掘り形も蛇行が激しく、水の流れにより削られている部分が隨所にみられた。

SD08（第11図）

西区の南端、L-12区でSD07に平行する形で検出した全長約6.0mの溝状遺構である。土層断面を観察するとVlb層上面から掘り込まれていることが分かる。断面形態はU字状を呈し、埋土はVia層が堆積している。遺物は出土していない。

SD09（第16図）

G・H-4区で検出した東西方向に延びる溝状遺構である。西側に向かうにつれ二股に分かれ、そのうち北側のものは土坑状に窪み非常に掘り込みが深い。二股に分かれるうちの南側のもう一方の底には硬化面が10cm程の厚さで見られる。土層断面からは明確な切りあい関係が認められなかったため同一遺構として認識したが、掘り込みの深さが異なること、一方のみ硬化面が認められることから2条の溝が重複していた可能性がある。埋土中には基本土層Via層が堆積する。

SD10（第12図）

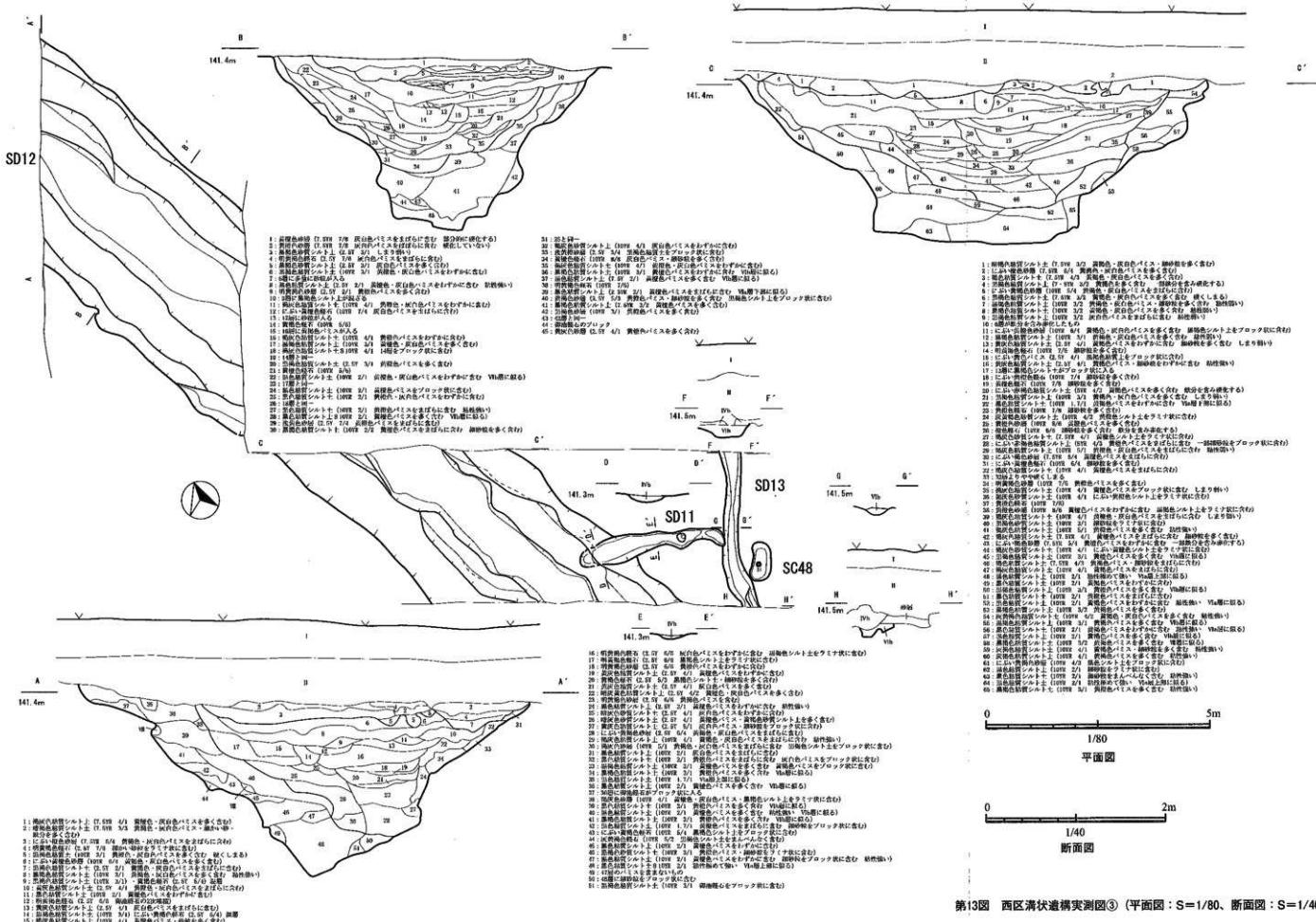
I-10区で検出した溝状遺構である。重機での表土剥ぎの際に一部掘り下げすぎたため、北端は断面で確認するのみとなった。Vlb層中に掘り込まれており、断面から判断すると本来の掘り込み面からの深さは40cm程を測る。遺物は出土していない。

SD11（第13図）

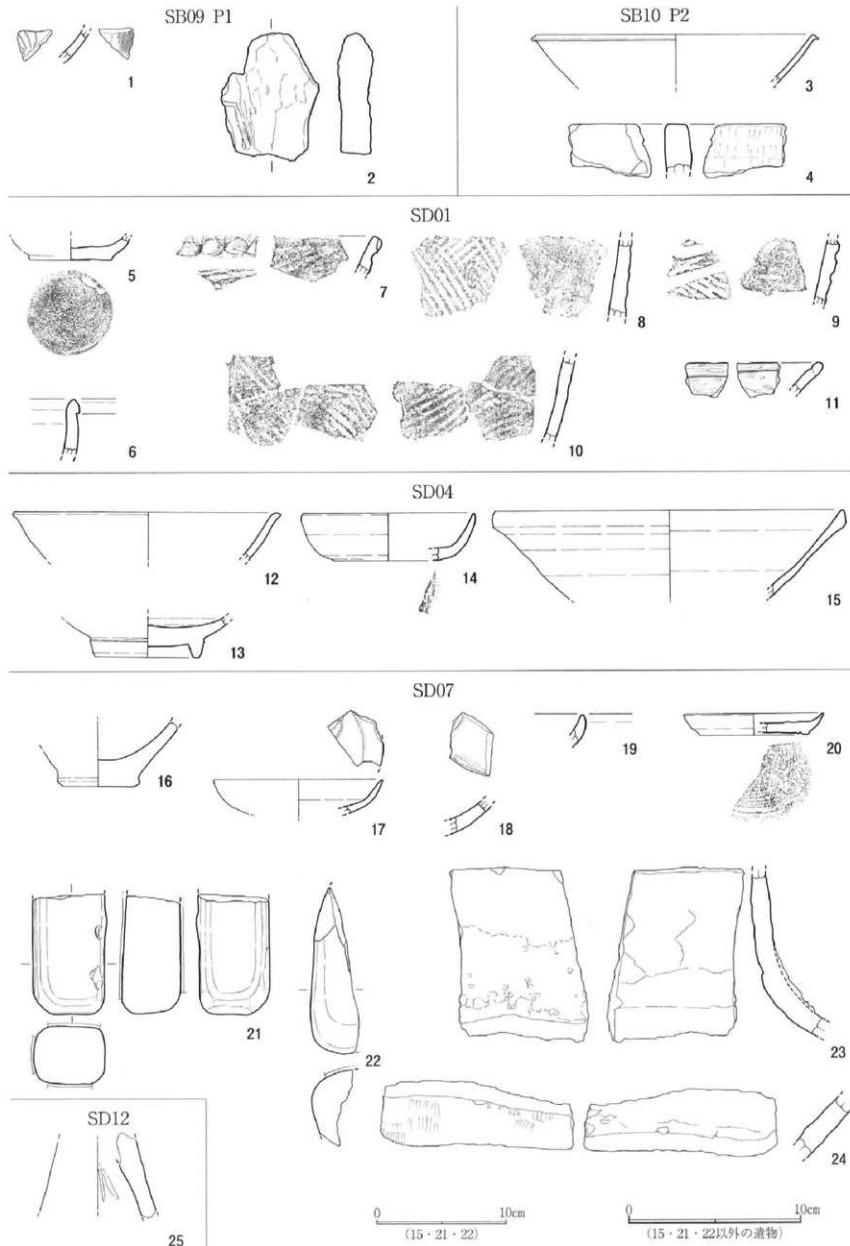
H-5区で検出した溝状遺構で、SD12を切る。全長は約3.2mを測る。埋土はIVb層が堆積し、そこにIII層（文明軽石）がブロック状に入り込んでいた。深さは最深部で8cm程と浅いことからも、本来はさらに上部から掘り込まれていた可能性が高い。底面に硬化面などは認められず、遺物も出土していない。

SD12（第13図）

西区西端で検出した南東～北西方向には直線的に延びる溝状遺構で、両端ともに調査区外に延びる。SD11に切られる。調査区壁の断面から判断するとVlb層中に掘り込まれているが、調査区西側ではVia層がわずかあるいは全く堆積していないことから、既に実際の掘り込み面は削平されている可能性が想定できる。断面形態は場所によって異なり、U字状ないしはV字状を呈す。また、場所によっては、底面の幅が狭



第13図 西区溝状透構害測図③(平面図:S=1/80、断面図:S=1/40)



第14図 西区遺構内出土遺物① (東播系須恵器・石器: S=1/4、それ以外の遺物: S=1/3)

い所と比較的広い所が存在しており一定ではない。さらに、一部オーバーハング気味の箇所も見受けられるが、これは水の流れにより形成されたものと考えられる。埋土は最下層に粘性の強い黒色土が堆積している。さらに、掘り形の壁際に沿って黄褐色バミスを多く含む黒褐色粘質土が、底に流れ込むように堆積している状況が確認できる。これらの埋土を切るように、軽石層や砂層が埋土の中央部から上部にかけて堆積している。このような埋土の堆積状況から推察すると、基本土層のVlb層（あるいはVia層）が崩れて溝がある程度埋没した後に、洪水など水の流れにより御池軽石・細砂粒などが運ばれて堆積したものと考えられる。遺構の下部からは多量の湧水が認められる。さらに、表土直下が埋土の最上層となるが、この層は粒の細かい軽石を含む砂層であることから、溝がほぼ完全に埋没した状態でも洪水により土砂が運ばれてきたものと推測される。掘り込みは御池軽石層（Vlb層）ないしはそれよりも下位の粘土層まで達する。湧水の認められる底面付近の御池軽石は水を含み白くふやけたような状態であった。底面付近の埋土が砂層であったり、砂粒を多く含む粘質土であることからも、溝の掘削当初より水の流れがあったか頻繁に洪水の影響を受けていたものと考えられる。しかし、遺構の掘り込み面が明確ではない上に、原位置を保つと考えられる遺物も出土していないため帰属時期は判然としない。数点の出土遺物は全てローリングを受けて磨耗している。25は弥生土器の高杯脚部であると考えられるが、内外面共にかなり磨耗している。

SD13（第13図）

西区端、SD11・12に隣接して検出した南北方向に延びる溝状遺構であり、SD11にわずかに切られる。断面形態はほぼU字状を呈す。埋土にはVlb層が堆積している。この層中には鉄分が薄い層状に固まる部分が認められる。深さは最深部で8cm程と極めて浅い。遺物は出土していない。

SD14（第15図）

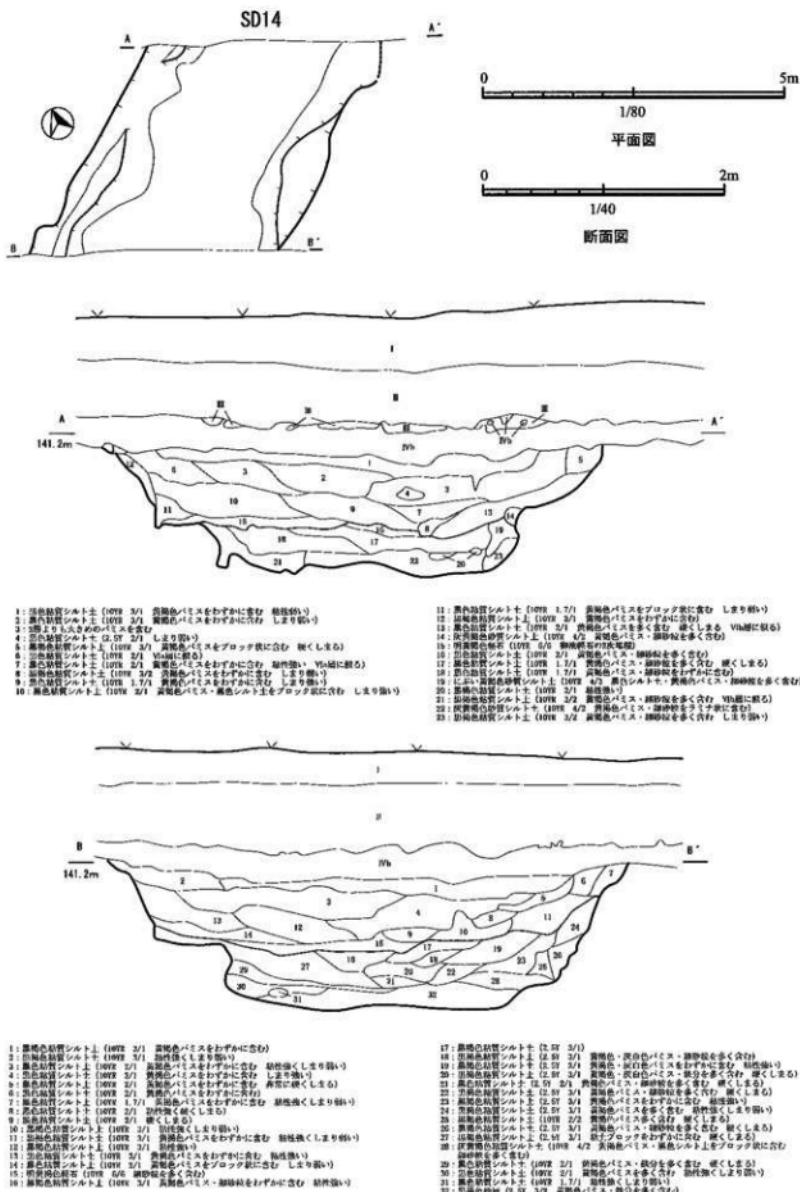
H-7区で検出した溝状遺構である。掘り込みは断面から判断する限りVlb層上部から掘り込まれているが、Vlb層の直上はIVb層でVia層は存在していない。埋土は粘性の強い黒色土や黒褐色土が重層し、ほぼ中央部には御池軽石の二次堆積層と考えられる黄褐色バミスが薄く堆積している。底面からは湧水が認められ、基盤層になる御池軽石層も底面付近では水であわやけた大粒になり、色調も灰白色を呈している。埋土の最下層に砂やバミスの粒を多く含んだ層が存在することからも、この溝が使われていた当時も現在のように湧水があったか、水の流れが存在していた可能性が高いと考えられる。西側は二段掘りになっており、ある程度溝が埋没した段階で再度掘削を行ったと考えられる。底面に硬化面も認められず、その機能を特定することは難しい。埋土からは比較的多くの遺物が出土している。その中には26のような弥生土器もあるが、大部分は27~31のような陶磁器類、32~37の土師器類、38~42の東播系須恵器であり、溝自体は中世の所産であると考えられる。

SD21（第20図）

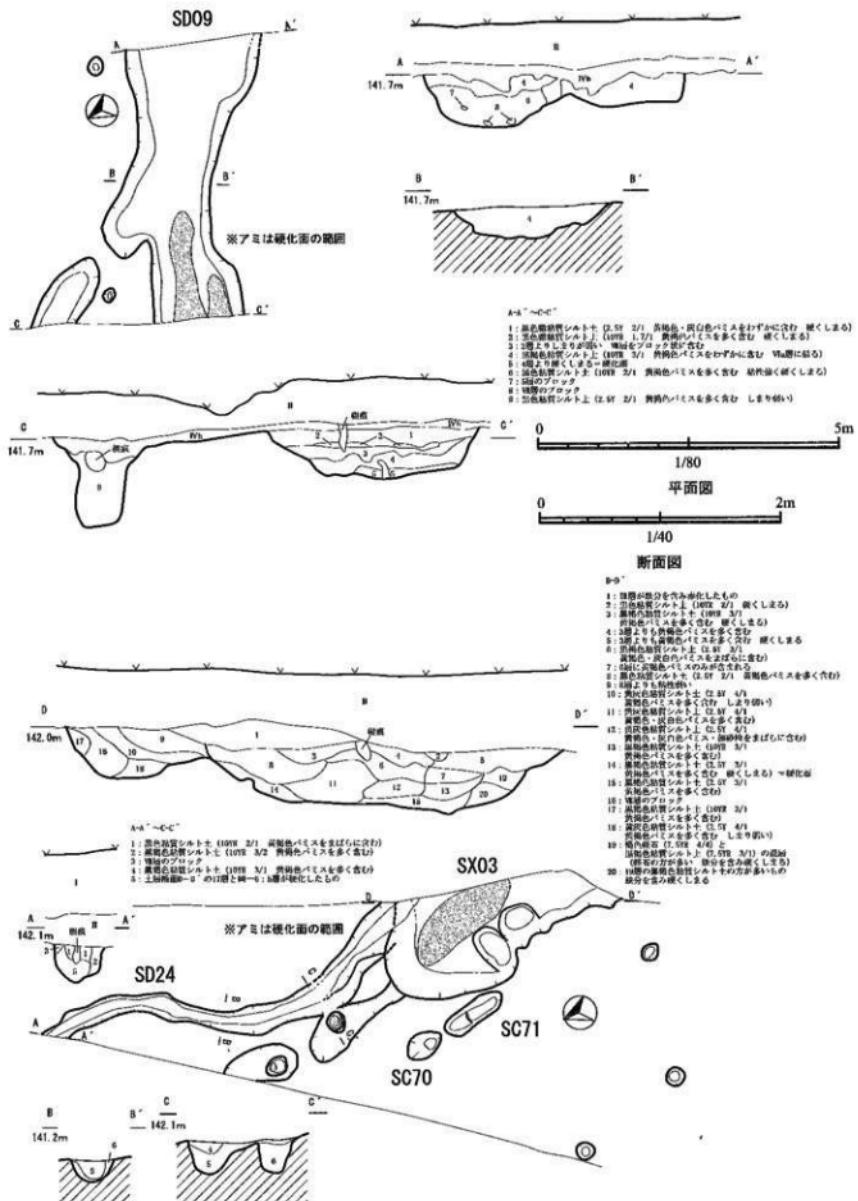
I-13区で検出した溝状遺構で、SC30、31を切る。Via層を基盤層とし、埋土にはIVb層が堆積する。最深部でも14cm程と極めて浅く、検出面が低かったこともあり溝の両端は既に削平されている。埋土からは東播系須恵器壺と考えられる小破片（43）が出土している。

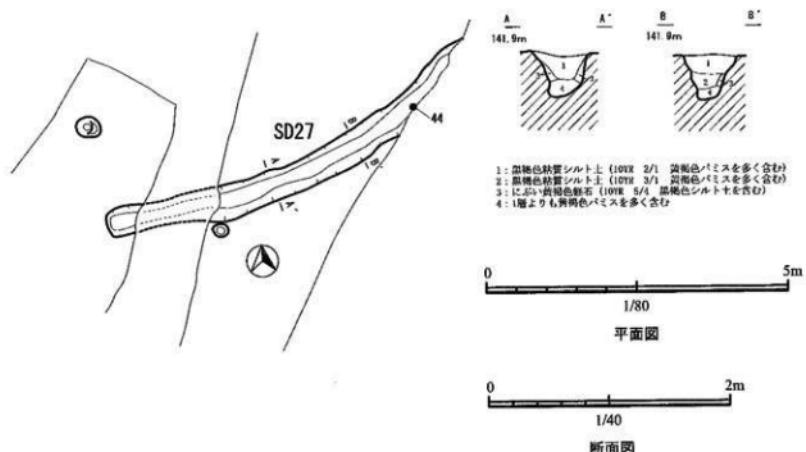
SD24（第16図）

J・K-2区で検出した溝状遺構である。平面形態はS字に蛇行しており、検出時には周溝状遺構が重複している可能性も考えたが、埋土の堆積状況から溝状遺構であると判断した。SX03に切られるものと考えられる。埋土は複数層存在しているが、いずれも基本土層に該当するものはない。検出面が表土直下で、すでに御池軽石が露呈していた。そのため、本来の掘り込み面は確認できない。遺物も出土していないことか



第15図 西区溝状遺構実測図④（平面図：S=1/80、断面図：S=1/40）



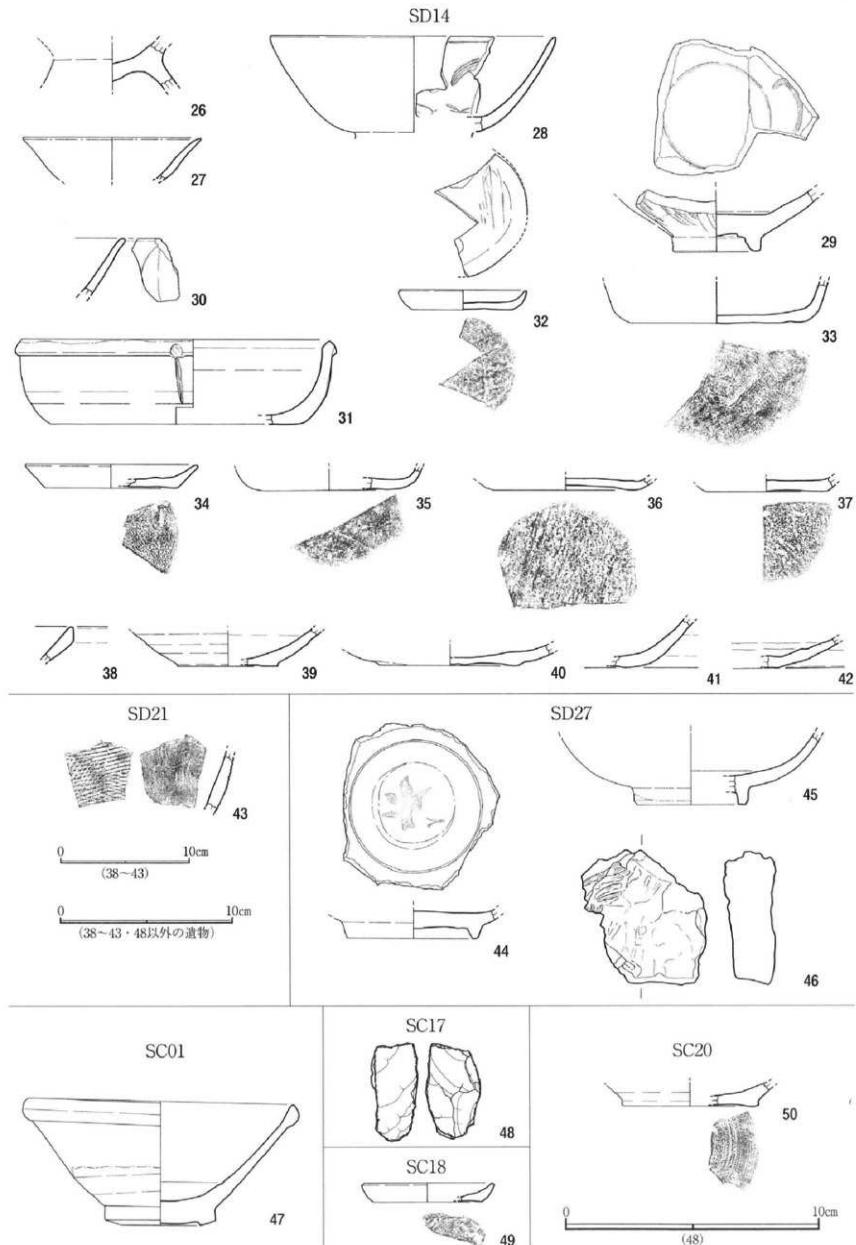


第17図 西区溝状造構実測図⑥・不明造構実測図② (平面図:S=1/80、断面図:S=1/40)

ら帰属時期の特定は難しい。しかし、切り合い関係にあるSX03からは中世の土器片が出土しており、堆積する埋土が類似していることからもそれはほど時期差はないものと考えられる。

SD27 (第17図)

J-3区で検出した溝状造構である。東西方向に延びており、東端は調査区外にかかる。調査区外の側溝を挟んで西端は急に立ち上がり、そこで終息する。断面形態はU字状を呈す。埋土は基本的に二層に分層できるが、一部御池軽石に黒褐色土が混じる層が壁際に堆積している。これは埋没時に壁が崩れたものが堆積したものと考えられる。埋土中からは合計3点の遺物が出土している。特筆すべきものとしては、青磁の底部内面見込み部分に朱書がなされている資料(44)が挙げられる。文字自体が薄くなっているため、判読は困難であるが、「水」の可能性が考えられる。その他、龍泉窯系青磁碗(45)や繊維の束を多く含む粘土塊(46)が出土している。



第18図 西区遺構内出土遺物② (東播系須恵器: S=1/4、石器: S=1/2、それ以外の遺物: S=1/3)

3 土坑 (SC)

SC01 (第19図)

B-11区で検出した土坑墓である。SC53に切られる。検出時に埋土中より副葬品と思われる完形の白磁碗が見つかったことと、その $2.12 \times 0.65\text{m}$ の長方形の平面プランから土坑墓と判断した。検出面からの掘り込みの深さは最深部で17cmと浅い。SC01が検出された西区北西端では表土直下が遺構検出面であったため、当土坑墓も実際の掘り込み面からはかなり削平を受けているものと思われる。埋土は含有するバミスの量から二層に分層でき、下層の方がより多くの黄褐色バミスを含む。埋土の下層と基盤層である基本土層のVib層はバミスの含有具合など見た目は酷似していたが、埋土の方が地山層よりもバミスの量が少ないと柔らかかったことから埋土と地山の判別は可能であった。上述の白磁碗は上層より出土している。木棺などの痕跡は検出されなかった。出土した遺物(47)は大宰府分類白磁碗IV類で、11世紀後半から12世紀前半の所産とされる。それ以外の遺物は出土していない。

SC03 (第19図)

D-16区で検出された $0.52 \times 0.45\text{m}$ の円形を呈する土坑である。最深部で34cmを測る。SD04を切る。埋土はVia層であり、上部には御池軽石とVib層がブロック状に入る。

SC11 (第19図)

B-11区で検出した土坑である。 $0.75 \times 0.54\text{m}$ の不整形を呈する。検出面からの深さは5cmを測るのみである。埋土には黒色微粘質シルト土が堆積する。

SC12 (第19図)

B-11区で検出した土坑で、 $0.98 \times 0.85\text{m}$ の不整形を呈する。検出面からの深さは最深部で10cmを測る。埋土は黒色微粘質シルト土である。

SC13 (第19図)

G-4区で検出した土坑で、 $0.75 \times 0.55\text{m}$ の楕円形を呈する。深さは最深部で11cmを測る。SD12を切る。埋土は二層に分層でき、Via層に砂が混ざる層が基本となる。

SC14 (第19図)

I-4区で検出した土坑である。 $0.85 \times 0.75\text{m}$ の楕円形を呈する。深さは最深部でもわずかに7cmを測るのみである。埋土はVia層である。

SC15 (第19図)

H-4区、SC14のやや北側で検出した土坑である。径約0.8mの円形を呈する。検出面からの掘り込みはわずかに9cmを測るのみである。埋土はVia層に似る黒色粘質シルト土が堆積する。

SC16 (第19図)

H-4区、SC15の北隣で検出した土坑である。径0.64mの円形を呈する。検出面からの深さは最深部で11cmを測る。埋土はVia層に似る黒色粘質シルト土が堆積する。

SC17 (第19図)

H-4区、SC15・16の北隣で検出した土坑である。 $0.86 \times 0.73\text{m}$ の楕円形を呈する。検出面からの掘り込みは最深部で12cmを測る。埋土はVia層に似る黒色粘質シルト土が堆積する。埋土中より石英製の火打ち石(48)が出土している。

SC18 (第19図)

J-13区で検出した土坑である。約半分が側溝トレーンにかかるが、径1.1mのほぼ円形を呈すものと思わ

れる。検出面からの深さは最深部で20cmを測る。上層の堆積状況を確認すると、埋土はVla層に類似する黒色微粘質シルト土に灰がラミナ状に混入していた。この埋土中より遺物が数点出土しているが、図化できたのは49の土師器小皿のみである。

SC19（第19図）

I・J-13区で検出した土坑で、半分以上が側溝トレーニチにかかるため全体的な規模は不明である。深さは浅く、最深部でも10cmを測るのみである。SC18と同様に埋土は黒色微粘質シルト土中に灰が混ざる。一部上部には灰白色の灰がブロックで含まれる。

SC20（第19図）

J-12区で検出した土坑で、 $0.95 \times 0.7m$ の楕円形を呈する。最深部でも5cm程と極めて浅い。SC18・19と同様にVla層に似る黒色粘質シルト土中に灰が混入していた。土師器杯の底部（50）が出土している。

SC25（第19図）

B-10区で検出した楕円形を呈すと思われる土坑である。SD01に切られるため、約半分は遺存していない。深さも浅く、約6cmを測るのみである。埋土は黄褐色バミスを多く含んでおり、Vla層下部に似る。

SC26（第19図）

B-10区で検出した $0.7 \times 0.57m$ を測る不整円形を呈す土坑である。SD01を切る。検出面からの深さは、最深部で15cmを測る。埋土はVla層である。遺物は出土していない。

SC27（第19図）

B-10区で検出した径約0.3mの円形を呈すと思われる土坑であるが、半分はSD01に切られるため全体の規模は判然としない。深さは最深部で17cmを測る。埋土は一層のみであり、Vla層下部に似る層が堆積していた。遺物は出土していない。

SC28（第19図）

G-4区で検出された楕円形を呈すと思われる土坑である。約1/3は調査区外に延びるため全体像は判然としない。検出面からの深さは、最深部で9cmを測る。埋土の上層にはIVb層が、下層にはVla層が堆積する。SD12に切られる。

SC30（第19図）

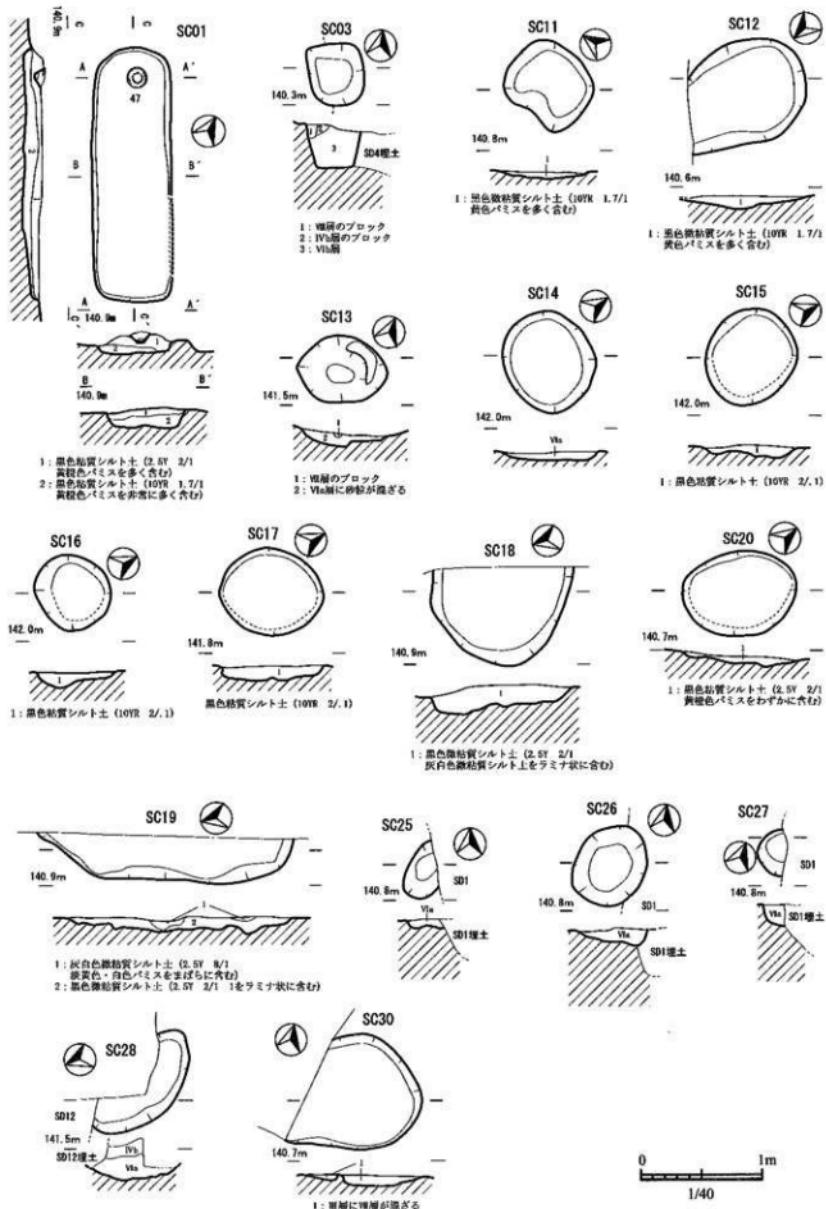
I-12・13区で検出した不整形を呈す土坑である。一部遺構の隅が調査区外にかかるため全体像は判然としない。埋土は黄褐色バミスと灰白色バミスが混在するもので、深さは最深部でも8cmと極めて浅い。黄褐色バミスはその色調からも御池軽石であると考えられる。この遺構の検出面はVla層中であり、御池軽石はそれよりも下位のⅧ層に相当する。そのためこの軽石層は二次的な堆積であるといえよう。しかも、楕円形を呈す土坑状の遺構として検出されていることから、なんらかの人の作業の結果であると考えられる。検出はできなかったものの、本来はさらに上面から掘り込まれていたものと考えられる。

SC31（第20図）

SC30の東隣で検出した土坑で、 $1.55 \times 0.73m$ を測り、不整形を呈する。SD21に切られる。検出面からの掘り込みは非常に浅く、8cmを測るのみである。SC30と同様に埋土には灰白色バミスと黄褐色バミスが混在したものが堆積している。遺物は出土していない。

SC32（第20図）

SC31の南隣で検出した土坑で、SD21に切られる。平面プランは不整円形を呈し、規模は $0.99 \times 0.84m$ を測る。検出面からの深さは浅く、最深部でも7cmを測るのみである。SC30・31と同様に埋土には黄褐色バミ



第19図 西区土坑実測図① (S=1/40)

スと灰白色バミスが混在して堆積する。

SC33（第20図）

J-12区で検出された $1.04 \times 0.98\text{m}$ を測る円形を呈する土坑である。検出面からの深さは最深部で18cmを測る。埋土は二層に分層でき、下層にはVla層に似る層が堆積する。遺物は出土していない。

SC34（第20図）

F-13・14区で検出された土坑である。径 0.71m の円形を呈する。検出面からの深さは最深部で11cmを測る。埋土にはVla層が堆積する。

SC35（第20図）

F-13区で検出された土坑である。 $0.67 \times 0.63\text{m}$ の不整形を呈す。検出面からの深さは6cmを測るのみである。埋土にはVla層が堆積する。

SC36（第20図）

F-13区で検出された土坑である。径 0.78m の円形を呈する。検出面からの深さはわずかに6cmを測るのみである。埋土にはVla層が堆積する。

SC37（第20図）

F-13区で検出された土坑である。約半分は調査区外に延びる。検出した範囲では径 0.74cm の円形を呈するものと考えられ、深さは最深部で18cmを測る。埋土にはVla層が堆積する。

SC48（第20図）

H-5区で検出した $0.84 \times 0.43\text{m}$ のいびつな隅丸長方形を呈する土坑である。埋土は二層に分層でき、上層には基本土層のIVb層が堆積する。掘り込みは最深部で20cmを測る。このIVb層は鉄分が多く含み硬化し、色調は部分的に茶褐色を呈する。底面からは山縁部を下にする形で完形の土師器杯（51）が出土している。

SC49（第20図）

J-12区で検出した径約 1.1m の椿円形を呈する土坑である。検出面からの深さは19cmを測り、埋土は一層のみで、Vla層上部に似る。

SC50（第20図）

H-13区で検出した $0.83 \times 0.75\text{m}$ の椿円形を呈する土坑である。検出面からの深さは最深部で12cmを測り、埋土はVla層上部に近似するものが一層堆積するのみである。この埋土はVla層上部、IVb層との境部分の土に近似しており、Vla層よりも硬くしまる。埋土中より青磁碗（52）が出土している。

SC51（第20図）

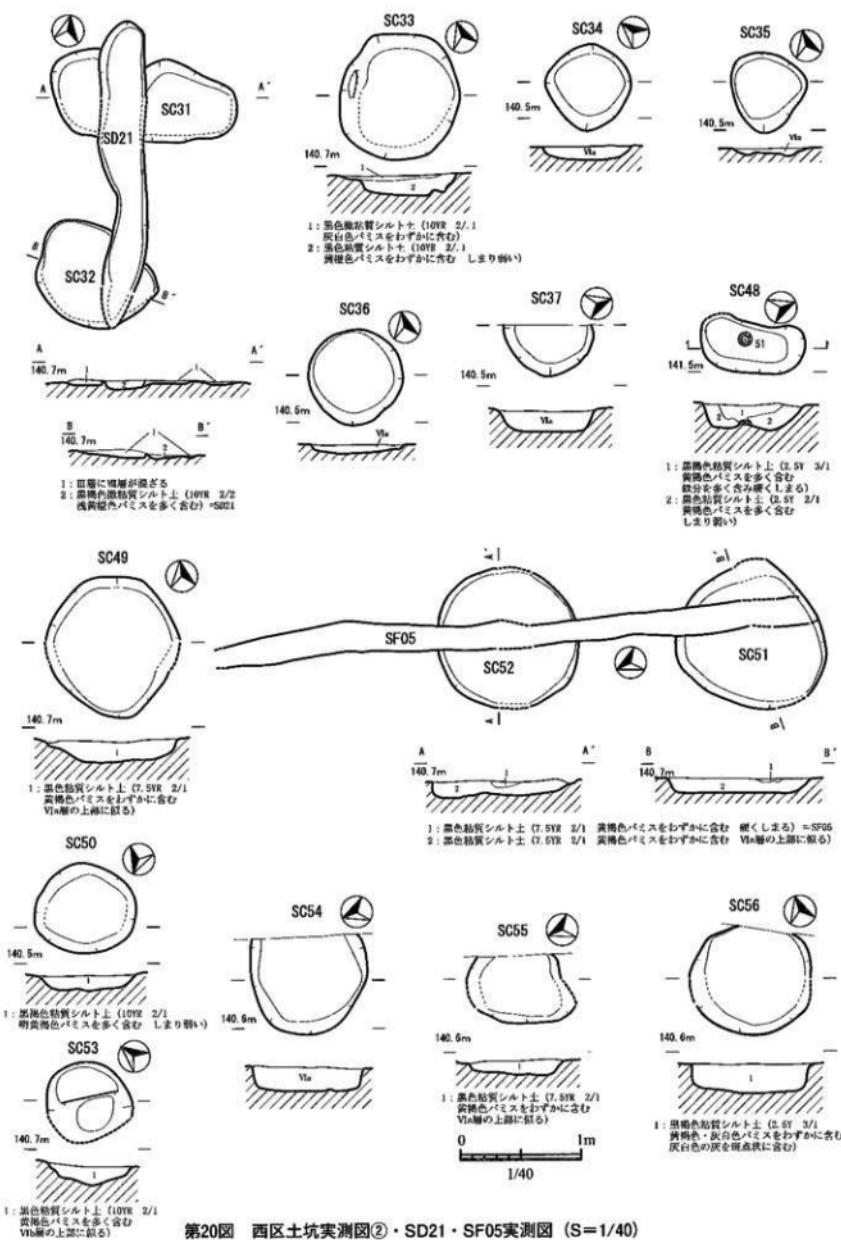
J-12・13区で検出された径約 1.2m の円形を呈す土坑である。埋土は一層で、ほぼ中央をSF05が通る。検出面からの深さは最深部で13cmを測る。

SC52（第20図）

J-13区で検出された径 1.15m の正円形を呈す土坑である。SC51の北側で隣接して検出されており、やはりSF05が中央を通る。埋土もSC51と同一で、Vla層上部の土質に近似する。検出面からの深さも14cmで、SC51とほぼ同じとなる。埋土中より青磁碗の小片（53）が出土している。

SC53（第20図）

B-11区でSC01と切り合う形で検出されている土坑である。SC01の検出の際にはプランが明確でなく、SC01を完掘しその周辺を若干掘り下げて精査した段階で平面プランを検出した。そのため明確な切り合い関係は確定できなかったが、埋土の堆積状況を見ると本来はSC53がSC01を切っていたものと考えられる。



第20図 西区土坑実測図②・SD21・SF05実測図 (S=1/40)

埋土はバミスをわずかに含む黒褐色土の一層のみで、基盤層であるV1b層よりも黒味が強く含有するバミスの量が少ないので特徴といえる。掘り込みは二段になり、南側が若干深くなる。検出面からの掘り込みの深さは最深部で15cmを測る。遺物は出土していない。

SC54（第20図）

J-13・14区で検出した土坑で、東側の一部が土層観察用トレーニングにかかるため全体の規模ははっきりとしない。検出面からの深さは、最深部で19cmを測る。埋土はV1a層で基盤層がV1b層である。遺物は出土していない。

SC55（第20図）

J-12区で検出された不整形を呈する土坑で、東側がJ-13区のグリッド杭にかかるため全体の規模は判然としない。検出面からの深さは最深部で13cmを測る。埋土は硬くしまっており、V1a層上部の土に似ている。埋土中からは土師器杯の底部片（54）と東播磨系須恵器の口縁部（55）が出土している。

SC56（第20図）

I-13区で検出された径約1.0mを測る円形の土坑である。検出面からの深さは最深部で24cmを測る。埋土には黒褐色土が堆積しているが、この埋土は基盤層となるV1a層よりも灰色が強く硬くしまっている。上の質感はV1a層の最上部の土に近似する。このことから、V1a層より掘り込まれ、埋土にはV1a層の上部の土が堆積したものと考えられる。埋土中より56の土師器小皿が出土している。

SC57（第21図）

I-12区で検出された径約0.7mの円形を呈する土坑である。土層断面の確認のため半裁したことから、遺構の半分のみを記録に留めた。埋土には大きめのバミスを含むしまりの弱い土が堆積していた。検出面からの深さは最深部で56cmと深く、底面はV1層に達していた。また検出時には認識できなかったが、東側の一部がSB11のピットに切られていた。

SC58（第21図）

西区で検出した0.93×0.7mの楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは最深部で14cmを測る。基盤層はV1b層で、埋土には基本土層のV1a層が堆積しており、ここから57・58の土師器小皿が出土している。57は完形の資料である。

SC59（第21図）

I-13区で検出した径0.81×0.68mの円形を呈する土坑である。検出面からの掘り込みは最深部で9cmを測る。埋土は一層で、V1a層上部の土が堆積している。この埋土中からは青磁碗（59）が出土している。

SC61（第21図）

J-13区で検出した1.09×0.94mの円形を呈する土坑である。SC51の南側に隣接する。検出面からの掘り込みは最深部で19cmとなる。埋土は一層で、V1a層上部の土が堆積している。埋土中からは同安窯系青磁碗（60）と土師器杯（61）が出土している。

SC62（第21図）

I-13区で検出した径0.6mの円形を呈する土坑である。検出面からの深さは最深部でも8cmと浅い。埋土には黒褐色粘質土に灰がラミナ状に混在する層が堆積していた。

SC63（第21図）

I-13区で検出した0.8×0.61mの方形を呈する土坑である。検出面からの掘り込みは最深部で11cmを測る。埋土には黒褐色粘質シルト土が堆積し、灰が斑点状に混在する部分も認められる。遺物は出土していない。

SC66 (第21図)

K-12区で検出された $0.8 \times 0.67\text{m}$ の不整円形を呈する土坑である。埋土には灰を斑点状に含む黒褐色粘質土が堆積していた。この埋土中からは東播系須恵器の口縁部片(62)が出土している。

SC67 (第21図)

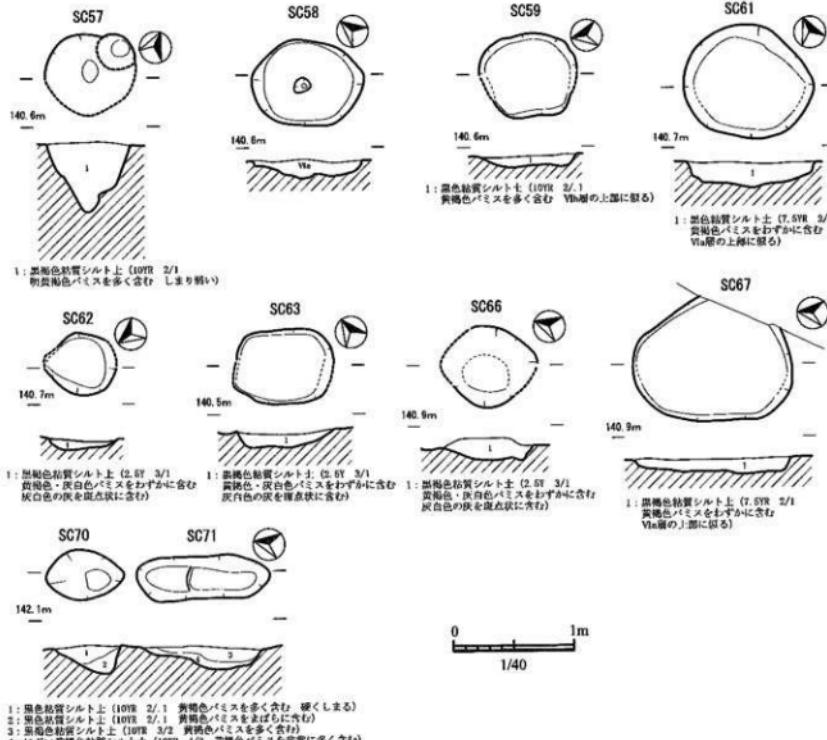
J-13区で検出された椭円形を呈すると考えられる土坑である。東側の一部は土層断面観察用のトレンチにかかるため、全般的な規模は判然としない。埋土にはVia層の上部に似た土が堆積しており、ここから東播系須恵器壺の肩部片(63)が1点出土している。

SC70 (第21図)

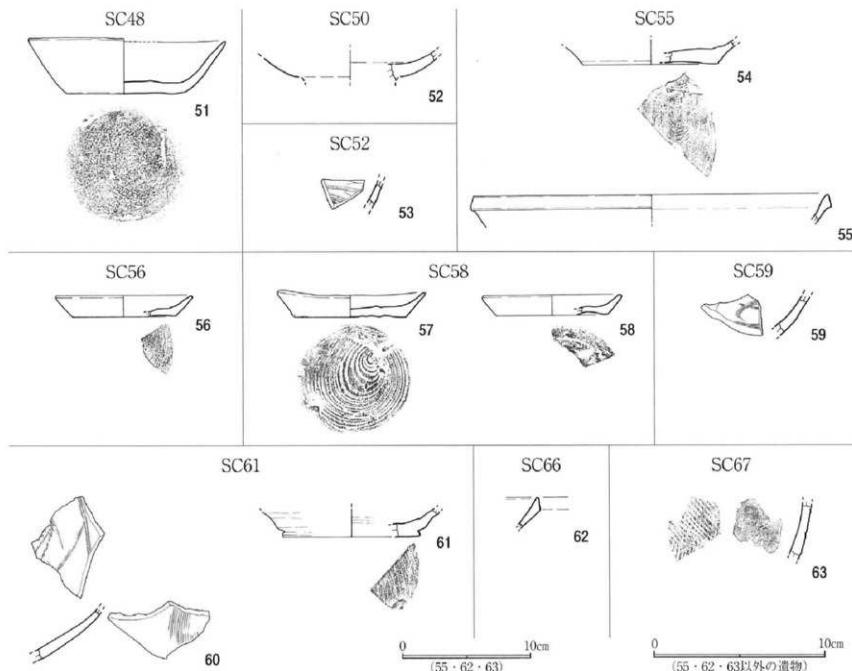
K-2区で検出した $0.65 \times 0.41\text{m}$ の長楕円形を呈する土坑で、東側には隣接してSC71が検出されている。埋土は二層に分層が可能で、上層の方が黄褐色バミスを多く含み硬くしまる。深さは検出面からの最深部で23cmを測る。遺物は出土していない。

SC71 (第21図)

K-2区で検出した $1.11 \times 0.31\text{m}$ の長楕円形を呈す土坑である。検出面からの深さは19cmを測る。西隣にはSC70が位置する。埋土はSC70同様に二層に分層が可能だが、質は異なる。上層は黒褐色粘質シルト層で、



第21図 西区土坑実測図③ (S=1/40)



第22図 西区遺構内出土遺物③（東播系須恵器：S=1/4、それ以外の遺物：S=1/3）

大粒の黄橙色バミスを多く含む。下層は御池軽石に上層の土が混ざるような様相を呈す。最下部はやや硬化し、細かい砂粒が混ざる。遺物は出土していない。

4 硬化面 (SF)

SF05 (第20図)

J-12・13区で検出された硬化面である。実際には硬化するよりも周りの土よりも硬くしまるような状態であったが、その範囲が帯状に検出されたため硬化面に準ずる遺構として認識した。検出できたものの全長は4.8mで、厚さは5cm程度である。SC51・52を通って延びている。土質はSC51・52の埋土と同一と考えられ、これらの土坑が埋没した後に踏み固められるなどして、この部分のみ周囲より土が固くしまった状態になったものと思われる。

5 不明遺構 (SX)

SX01 (第17図)

D-14区においてVIIa層を掘り下げ中に検出したもので、周りよりも大きめのバミスを多く含む。明確な掘り込みも認められないことから溝状遺構とも異なるようで、硬化する部分も認められない。そのため、性格や機能は特定できない。断面形態も地点により異なるが、概ね凸レンズ状を呈している。

SX03（第16図）

西区南西端で検出された遺構である。SD24を切る。表土直下の御池軽石層が検出面であったことから、遺構の上部は既に大きく削平を受けているものと思われる。平面プランのほとんどが調査区外に延びることから全体像は不明である。底面には硬化面を有しており、遺構の延長線上には部分的に硬化する範囲が確認できたことから、本来はSD24に平行してSX03が延びていた可能性が考えられる。また、埋土の堆積状況からSX03とSD24は別遺構としたが、本来は一つの遺構であった可能性も考えられる。埋土の最上層には文明軽石が堆積しているが、他に砂粒などが含まれることなく軽石のみで構成されることからプライマリーな堆積であると判断した。これは遺構の埋土が擂鉢状に徐々に堆積する過程で文明軽石も堆積したが、地形的に高い位置にあったため、遺構以外の範囲は既に削平されたものと考えられる。遺物は底面にある硬化面に張り付く形で土師器の小片が1点と共に隣接して軽石が1点出土しているが、小破片のため図化はできなかつた。このうち軽石については、不整形を呈しており、一部焼けていることから被熱したものと思われる。

（2）包含層出土の遺物

1 縄文時代の遺物（第23・24図）

縄文時代の遺物としては土器と石器が挙げられる。西区の縄文土器はB-10・11区、E-4区、H-4区という3地点から出土している。64～68はいずれもB-11区から出土しているもので、同一個体である可能性が高い資料である。口縁端部から外面にかけて粘土板を貼り付けて波状の突起を作出する。この波状突起には半裁竹管によりD字状の刺突文を加える。それ以下には条痕地に3条一単位の凹線を施す。底部には網代模が残る。縄文時代後期式に比定できよう。69は上述の土器とは顔つきが異なる。内外面共に繊維状のものでナデが加えられた晩期の粗製深鉢であろう。70・71は晩期黒川式期の精製浅鉢である。内外面共にミガキが加えられる。70にはリボン状突起が貼付される。この他、上述の地点で小破片がまとめて出土しているが、いずれも図化した資料と同時期のものであると考えられる。

土器の他には石器が出土している。ここでは、出土層位および形態を基に、縄文時代の所産であると考えられる資料について説明を加えることとする。

73は輝石安山岩製、74は砂岩製の石鉢である。両者共にVIIb層から出土している。75は輝石安山岩製の、76・77は砂岩製の剥片石器である。やはりVIIb層から出土している。79は黒曜石製の剥片である。出土層はVIIa層であるが、縄文時代の所産である可能性が高い。

2 弥生時代の遺物（第23・24図）

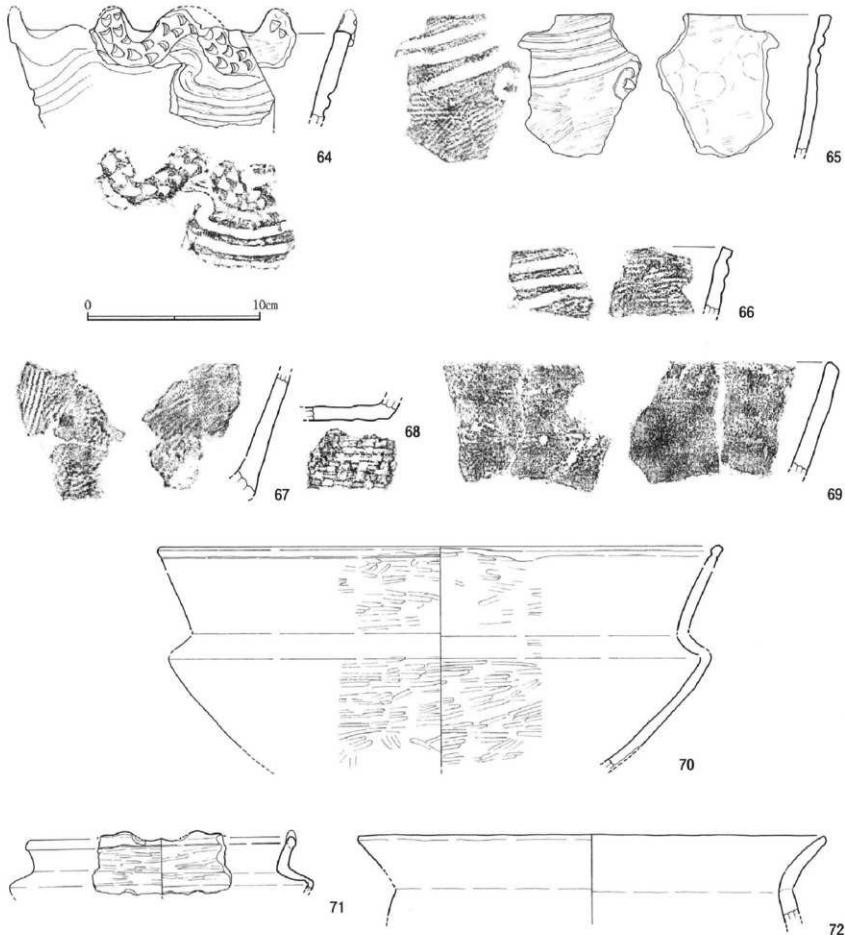
西区での弥生時代の遺物は極めて限定的である。72はD-14区で検出した甕の口縁部である。口縁部のみが環状に口を下にして出土した。土坑など遺構に伴う可能性もあるが検出時に遺構は検出されていない。

78は磨製石包丁である。中世の陶磁器類が集中して出土した地点で一緒に出土しているが、その形態から弥生時代の資料が混入したものと判断した。頁岩製で、一部欠損する。両端には抉りが入る。

3 中世の遺物

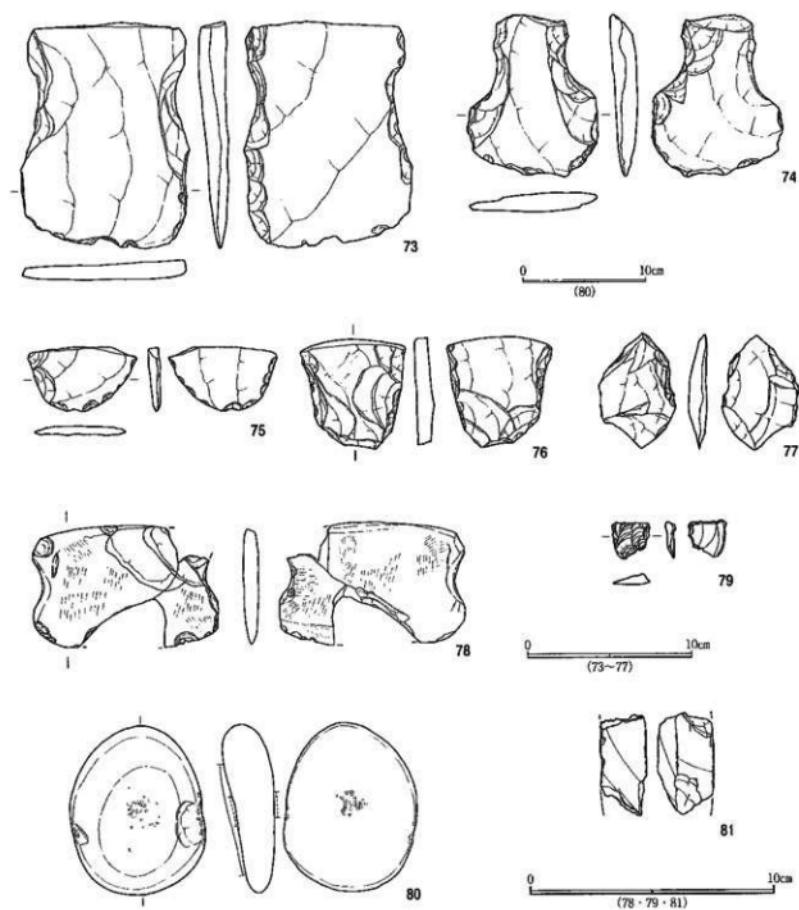
①陶磁器（第25～29図）

早馬遺跡の出土遺物では、中世の陶磁器および土師器が出土量の大部分を占める。以下、陶磁器について、青磁や白磁など種別ごとに観察所見を述べることとする。



第23図 西区包含層出土遺物① (縄文土器・弥生土器: S=1/3)

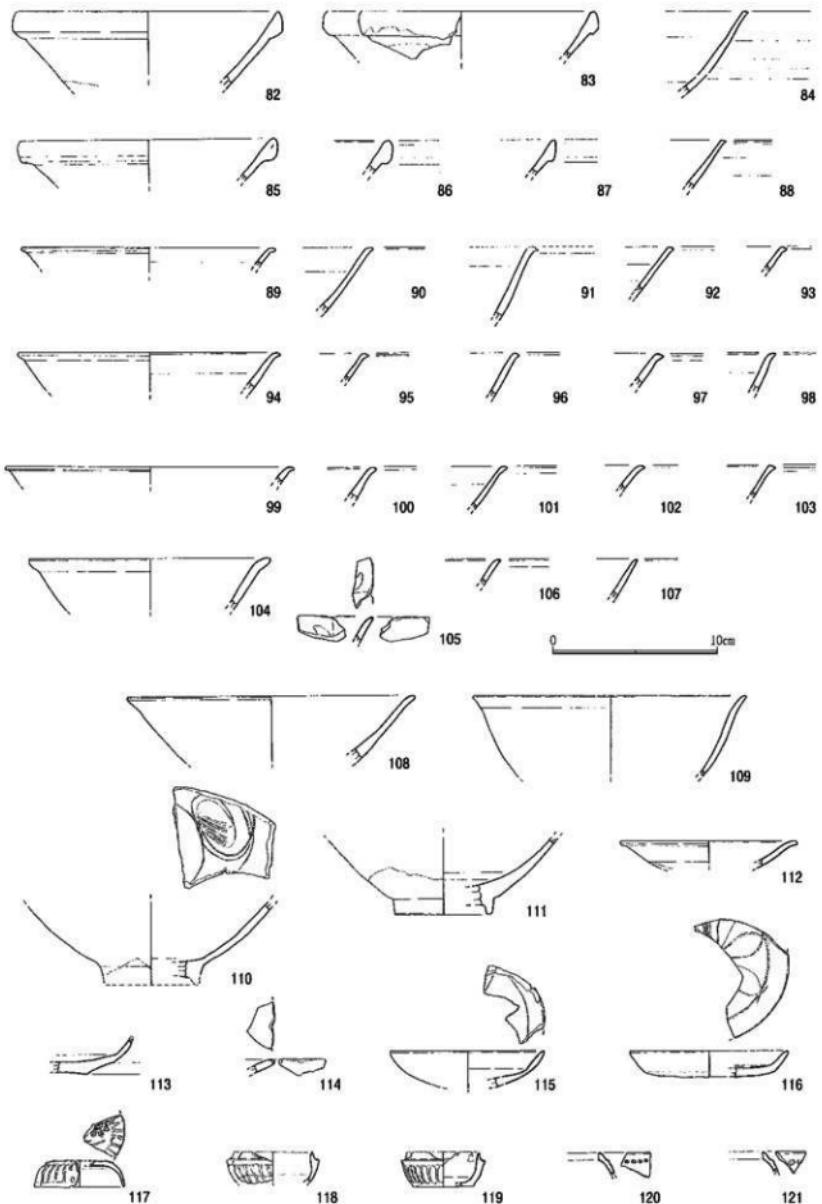
まず、白磁であるが、82・83・85～87は大宰府分類白磁椀IV類に比定できる。いずれも破片資料であり、器形全体を窺える資料はないため、細分は難しい。11世紀後半～12世紀前半に比定され、早馬遺跡の中世の遺物では最も古い時期のものといえるが、全体からすると出土量は少ない。84・88～103・106・108は口縁端部が外方に尖る資料で、白磁椀V類ないしはVII類と考えられるが、口縁部のみでは判断がつかない。いずれにせよ12世紀中頃から後半の資料といえる。出土量的にはこの類が最も多い。104は器壁が肉厚で口縁端部が外反する。105は口縁端部に輪花を有す。109は口禿げの白磁椀IV類で、13世紀後半～14世紀前半の資料である。110は白磁椀VII類の底部、111は椀V類の底部であろうか。112～116は皿である。113・116は施釉後に底部の釉が削り取られる。115も底部が遺存していないがこれら2点と同類と思われる。白磁皿VII類(12



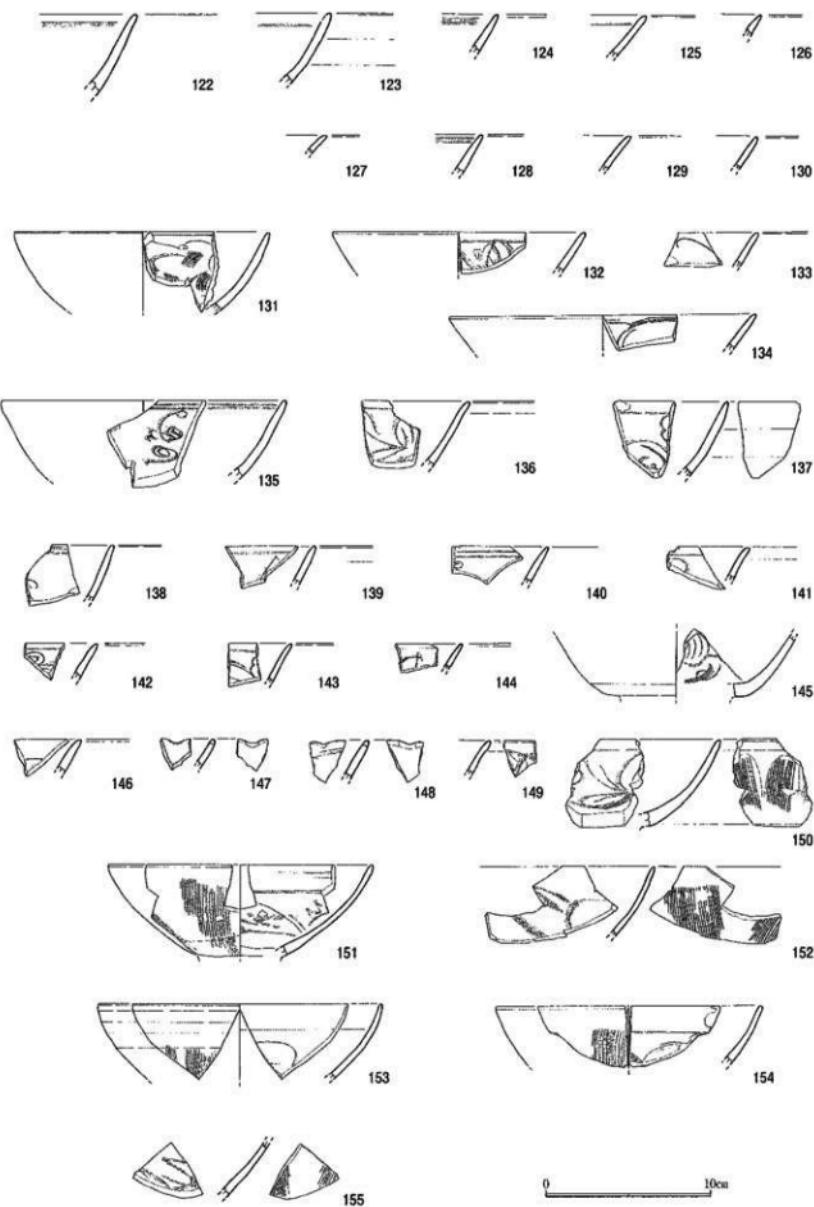
第24図 西区包含層出土遺物②（石器：S=1/2・1/3・1/4）

世紀中頃～12世紀後半）に属するものであろう。114は輪花を有し、皿としたが椀の可能性もある。117は合子の蓋、118・119は合子の身で、いずれも青白磁である。120・121は同一個体の可能性が高い資料で、合子の身であろう。釉は薄く、しかも剥離している部分が多い。

次に青磁をみてみよう。122～148は龍泉窯系椀I類（12世紀中頃～12世紀後半）に分類できる。122～130は内外面共に文様はみられないことからI-1類に分類できる可能性が高いが、小破片であるため全体像は不明で細分は難しい。131は片彫で草木状の文様を施し、隙間に櫛目を埋める。龍泉窯系椀I-3a類に細分できる。この他、132・136・137・139・144は内面に片彫の蓮花文を施すI-2類に、134・135・138・140は内面に飛雲文を施すI-4類に細分できよう。147・148もI類に分類でき、口縁端部には輪花を有す。150は



第25図 西区包含層出土遺物③ (白磁・青白磁: S=1/3)



第26図 西区包含層出土遺物④ (青磁: S=1/3)

内面に蓮花纹を、外面には綵の櫛目と通弁文を施すI-6a類である。青磁碗の中ではこれらの龍泉窯系碗I類が圧倒的に多い。149は龍泉窯系青磁碗II-b類で、13世紀前後～13世紀前半の所産であると考えられる。図化できたものは1点であり、全体的な出土量も西区では数点である。

151～155は同安窯系青磁碗I類である。やや黄色味かかった釉が施される。いずれも外面には細かい綵の櫛目文が施され、内面には略化した花文とジグザグ状の点描文が施文される。12世紀中頃～12世紀後半の所産である。156～165も同安窯系青磁碗であると考えられる。156～158をみると体部から底部にかけて強く湾曲するようで、碗にしては器高が低い印象がある。いずれも外面に幅の広い綵の櫛目文が入り、157・159・160・164には内面にも文様がみられることから同安窯系青磁碗III類に分類できよう。

166～175は青磁碗の底部である。166・167・169～172は龍泉窯系青磁碗I類の底部であると考えられる。168はI類ないしはII類であろう。173は内外面共に無文で、その形態から同安窯系青磁碗II類であると考えられる。174・175は同安窯系青磁碗I類の底部であろう。

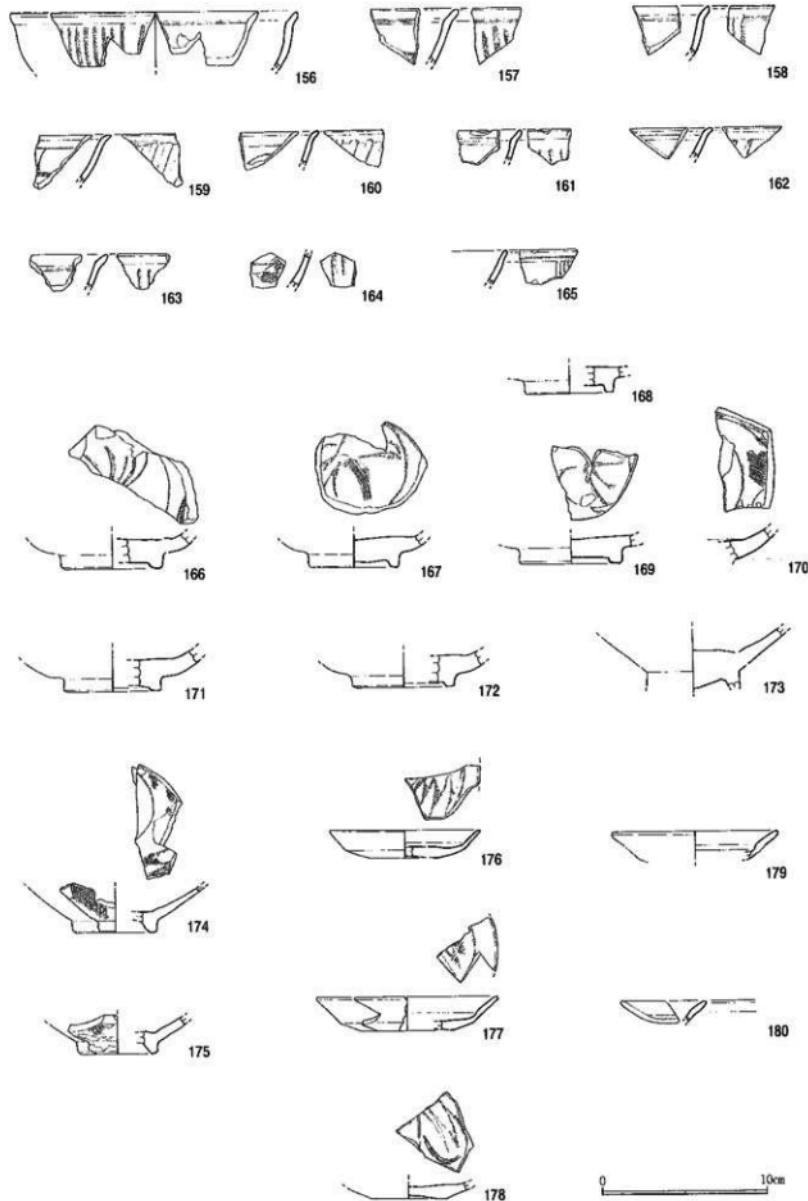
176～180は青磁の皿である。176～178はいずれも全体に施釉後に底部のみを搔き取る。内面にはジグザク状の櫛点描文を有す。同安窯系青磁皿I類に分類されよう。180も口縁端部が尖り気味であることから、同安窯系青磁皿のI類に属するものと考えられる。179は口縁部先端が丸味をもつことから龍泉窯系青磁皿I類の可能性が指摘できる。これらの皿資料はいずれも12世紀中頃～12世紀後半の資料であるといえる。

181～195は中国陶器であると考えられる資料である。181・182・185は長い頸部を有す壺ないしは、把手や注口部分は遺存していないが水注の可能性もある。186は把手が剥離したような痕跡が残るため、やはり水注の可能性が考えられる。183は壺の口縁部片で口縁部内面には目跡が残る。187は耳壺の把手部分であると思われるが、釉が灰色を呈しており、他の資料とはやや異なる。190は鉢の口縁部であると考えられ、内面には目跡が残る。184・189・191は体部片のみであり、器種の特定は難しい。192・193は小盤である。内面および口縁部外面に施釉されるが、全体的に残りが悪い。口縁部が玉縁状を呈し、それ以下に綵の沈線が入れられる。194・195は天目茶碗である。その他、197の瓦質の清鉢や196・198～202のような国产陶器と考えられる資料も出土している。

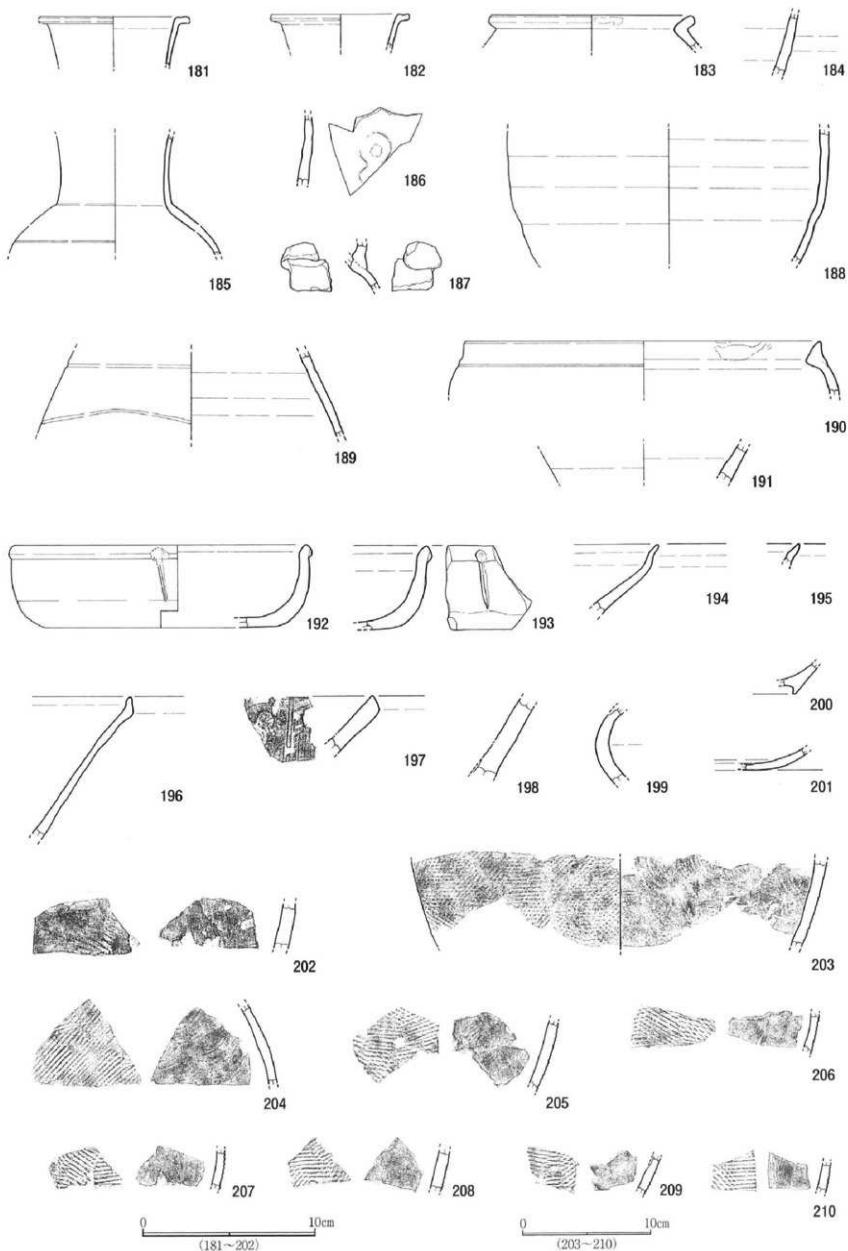
次に中世須恵器系陶器をみてみよう。203～210は外面には綾杉状のタタキないしは平行タタキが加えられる。203～205のように内面に同心円当具痕が残る資料もあるが、それ以外は丁寧なナデが加えられ、平滑になる。いずれも東播系須恵器の壺である可能性が高い。211～258は東播系須恵器の片口鉢ないしは鉢と考えられる資料である。211～246は口縁部片である。211・213のように口縁端部が上下に拡張される資料も見受けられるが、それ以外は口縁端部が上方に拡張され、断面形態が三角形を呈する資料が多い。前者は森田編年の第Ⅱ期第2段階（12世紀末葉～13世紀初頭）、後者は第Ⅲ期第1段階（13世紀代）に比定されるものである。また、後者の中でも玉縁状の口縁を呈する資料は少なく、口縁端部外面が平坦なものやわずかに窪むものが大部分を占めることから、13世紀の中でも前半に収まるものと思われる。

②土師器（第30回）

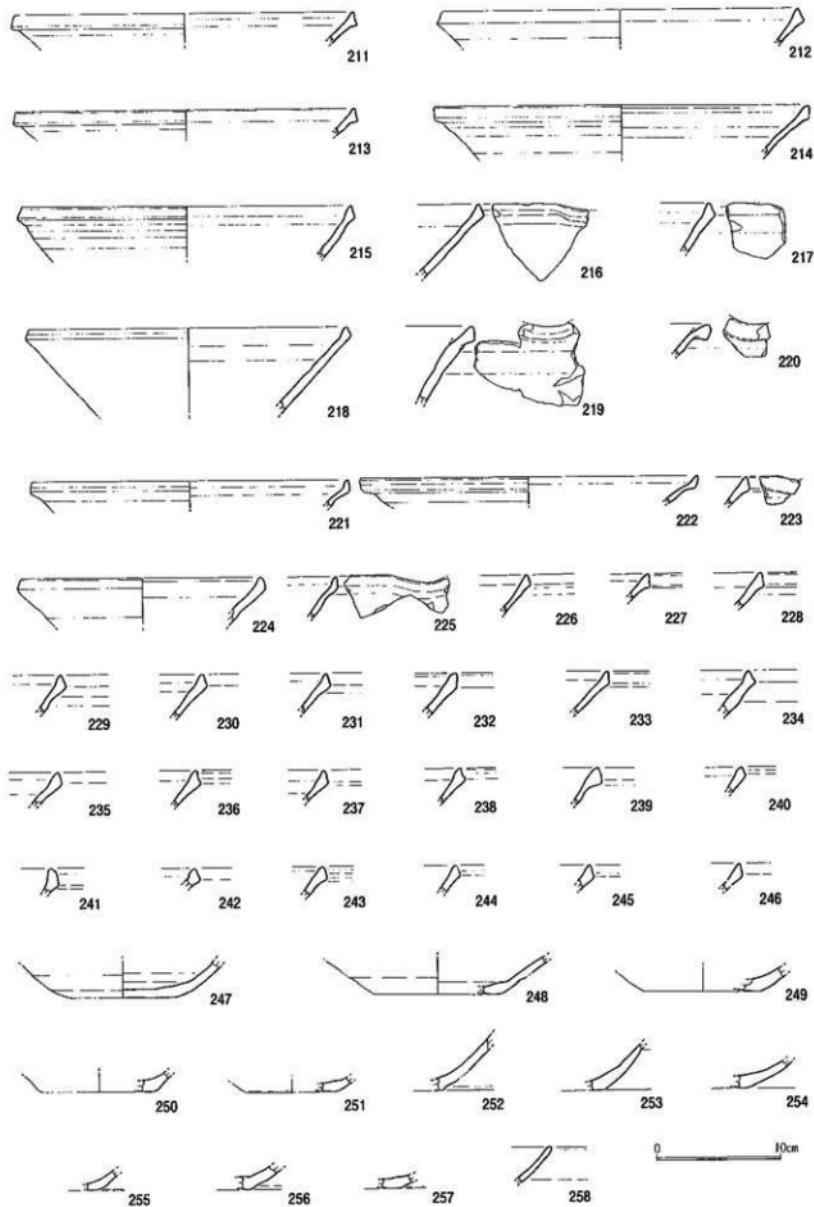
西区での土師器の出土量は東区に比べ多くない。259～261・274・275は杯である。口径を復元できるのは2点のみであるが、概ね14～15cmのものである。底部の切り離しは全て糸切りである。262～273・276・277は小皿である。口径の平均は9.2cm、底径の平均は7.1cm、器高の平均は1.27cmとなる。大枠では口径が9～10cmのものと7～8cmのものに分けられる。底部の切り離しは、磨耗しているため判別ができないもの以外は全て糸切りで、板状圧痕がみられる資料も多い。土師器は資料が少なく、破片資料のため反転復元をしたものが大部分である。そのため時期比定をするには資料的に不十分な感もあるが、敢えて柴畠氏による編年



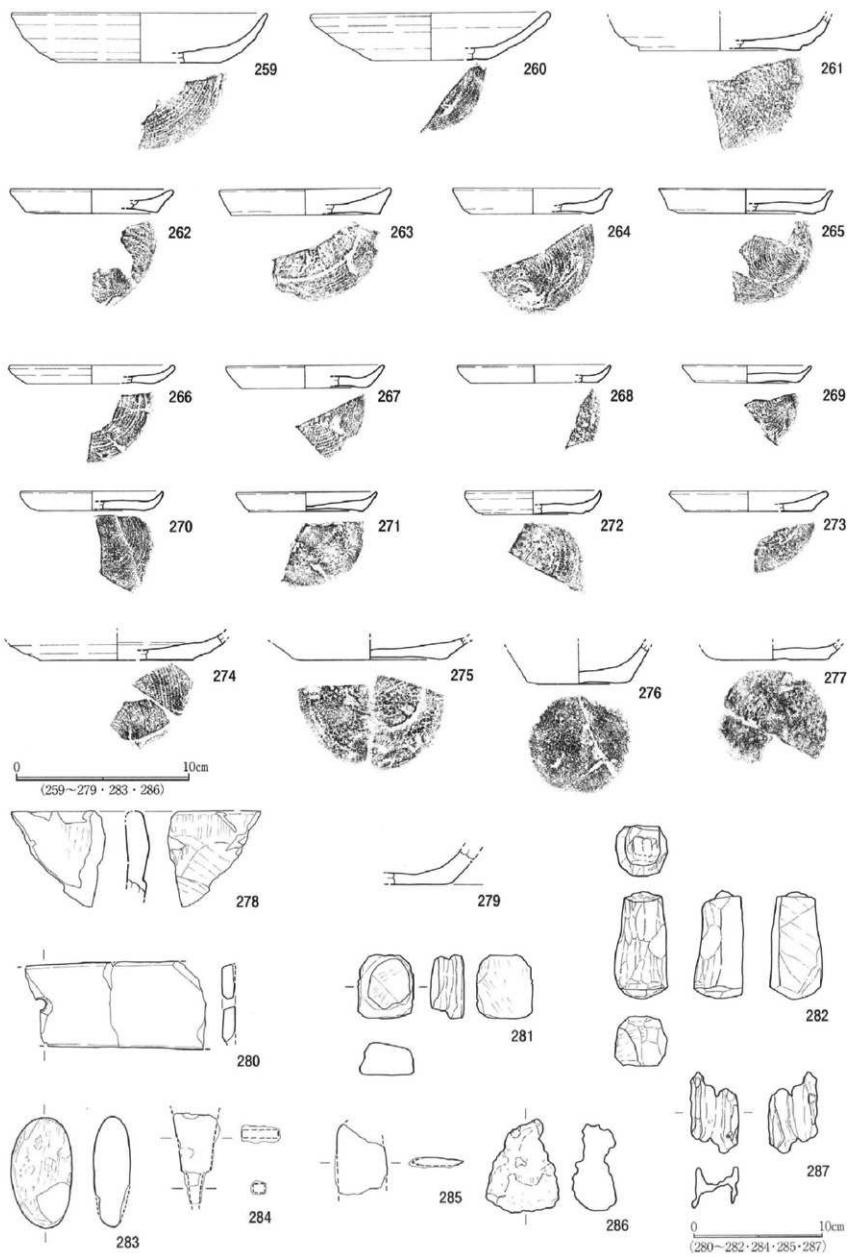
第27図 西区包含層出土遺物⑤ (青磁: S=1/3)



第28図 西区包含層出土遺物⑥ (陶磁器・瓦質土器: S=1/3、東播系須恵器: S=1/4)



第29図 西区包含層出土遺物⑦ (東播系須恵器: S=1/4)



第30図 西区包含層出土遺物⑧ (土師器・石鍋・軽石製品・鉄滓: S=1/3、滑石製品・鉄製品・銅: S=1/2)

に照らし合わせれば、小皿の口径が大きめで、杯の体部外面にロクロ目痕が顕著に残ることや底部が糸切りであることなどから12世紀末から13世紀中頃に比定できそうである。

③滑石製品（第30図）

278・279は滑石製の石鍋である。278は口縁部片で、外面には煤が付着する。279は底部片で、やはり外面には煤が付着する。280は板状を呈し、両端とも欠損するようである。表面はしっかり整形されているが、裏面は自然の擦り面をそのまま利用しているよう、凹凸が残る。一箇所に穿孔がみられることから、温石として使われた可能性がある。281・282は用途不明の滑石製品である。281は四角形の土台に円形の摘みが付くような形態を呈す。重量は12gを測る。282は断面蒲鉾形でいびつな円筒形を呈す。上端にはわずかに突起が作出される。29.6gを測る。

④その他の遺物（第30図）

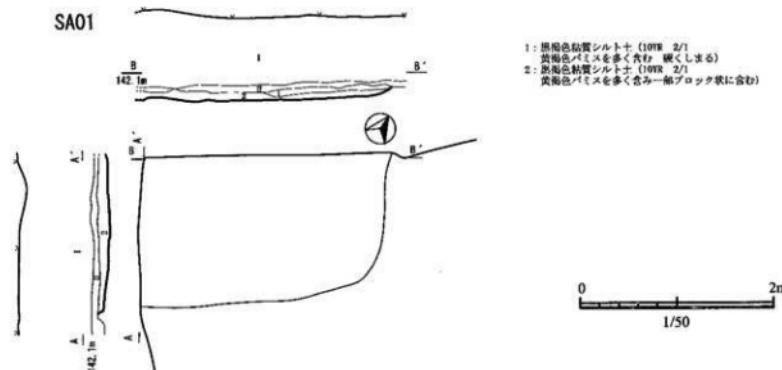
283は軽石製品、284・285は鉄製品、286は鉄滓、287は銅製品である。283は平面形態梢円形に整形されている。用途は不明である。284は鉄鎌であろう。大部分が欠損しており、全体像は不明だが雁股鎌の可能性がある。285も鉄製品であるが、用途不明である。286は鉄滓で、49.3gを測る。287は銅製品であると考えられる。形態はいびつで不整形を呈し、製品というより銅滓とした方が適切かもしれない。一箇所貫通する小穴が認められる。

（3）時期不明の遺構

1 竪穴状遺構（SA）

SA01（第31図）

西区南西端で検出した竪穴状遺構であるが、そのほとんどは既に削平を受けており、床面を辛うじて検出したのみであった。そのため本来の掘り込み面等は不明である。遺構の半分以上が調査区外に延びるために全体像は判然としないが、検出した範囲をみると方形を呈するものと思われる。断面を観察すると床面は10cm程の厚さで貼り床がなされている。遺物は出土しておらず、遺構の帰属時期は判然としない。



第31図 西区竪穴状遺構実測図 (S=1/50)

(4) 小結

ここで、再度西区の調査成果を概観し、まとめとしたい。まず、遺構は掘立柱建物跡・ピット列が9棟、溝状造構17条、土坑43基、硬化面1条、不明遺構2基が検出されている。溝状造構および土坑については、調査区全体に散在する傾向にあるが、掘立柱建物跡およびピット列は一定の範囲に集中するようである。I-11～13区付近で最も多くの遺構・遺物が検出された。調査区がトレンチ状を呈しているため、遺構分布の全体像を把握するのは難しい。溝状造構も、断片的に検出したのみで、本来同一の溝であったとしても検出地点が異なれば、別遺構として把握せざるを得なかった。そのため、それぞれの溝状造構がどのような関係性をもって構築されていたのかを把握することはできない。遺構の検出面および遺構内埋土の差異から、少なくとも検出した遺構にはいくらかの時期差があることは自明である。しかし、確実に遺構に伴うような遺物が出土したものは少なく、遺物が出土していても溝状造構などは原位置を保つ遺物はほとんどないといえよう。遺構同士の切り合いも少なく、遺構の帰属時期は中世という大枠で提示せざるを得ないものが多い。このように限られた情報であるが、以下検出遺構について若干の考察を加えたい。

まず、掘立柱建物跡およびピット列であるが、いずれも一部が調査区外にかかるものばかりで全体の規模を把握できるものは皆無である。SB03とSB04およびSB09とSB11は重複関係にあり、複数時期の所産であることは確かであるが、どちらが先行するものは判然としない。建物の主軸は大部分が南北方向であると考えられる。身舎や庇部分の一部のみが検出されたものもSB10以外は南北方向に主軸があると仮定し、その角度を割り出すと、N-12°～13°-Wのものが3棟 (SB09・SB11・SB13)、N-17°～17.5°-Wが2棟 (SB04・SB12)、N-21°-Wが1棟 (SB07) となる。SB09とSB11のように重複関係にある遺構が同じグループに入るを考えると、主軸によるグルーピングが即座に共時性を示すものとは断定できないが、比較的近い時期の所産である可能性が高い。

溝状造構については、集落域とそれ以外を区画する溝としての機能や道路としての役割の他、水の流れが存在していた可能性が高いものが多いことから、水田用の水を引くための導水施設の可能性が考えられる。プラント・オパール分析からも当遺跡において中世に水田稻作が行われていた可能性が高いという結論が得られている。部分的な調査で断定的なことは言えないが、溝の形状や埋土の堆積状況、硬化面の有無からは、様々な用途が想定できる。

土坑については、SC01が土坑墓である可能性が高い他は、その機能を断定することは難しい。埋土の違いから少なくとも複数時期の所産であるといえる。

次に出土遺物についてみてみたい。陶磁器類は、青磁・白磁を中心とし、東播系須恵器・土師器も多く出土している。既に述べたように、出土遺物には11世紀後半～14世紀前半までの時間幅がみられるが、最も多いのは12世紀中頃から13世紀前半の資料である。この頃人々の生活の痕跡として上述の遺構が構築されたものと考えられ、遺跡の盛行期といえる。プラント・オパール分析によれば、これらの遺構の埋土となっていたVIa層からもイネが検出されており、この頃既に遺跡内で水田が営まれていた可能性が高い。14世紀後半から15世紀前半頃の遺物はほとんど出土しておらず、この頃には本格的に生産活動の場に転換され、水田が営まれていたものと想定される。おそらく居住域は別の地点に移動したのであろう。

中世の遺物以外は、縄文時代後・晩期～古墳時代の遺物が出土しているが、全体からみた出土量は極めてわずかである。当該時期の遺構が検出されていないことからも、古い時代の遺物は隣地からの流れ込みの可能性が高い。

第4節 東区の調査

早馬遺跡東区の調査では、表土剥ぎの後、人力による掘り下げを行った。遺構検出はそのほとんどをVlb層上面で行なっているが、一部はそれに先行してIVb層中で検出しているものもある。その結果、掘立柱建物跡5軒、溝状遺構11条、土坑26基（土坑墓含む）、硬化面4面、その他小ピットが検出された。遺構群は主に調査区中央（F～L-24・25区）でやや密に検出され、調査区の東側（H～L-35区）では検出数が少なかった。

包含層であるIVa～Vlb層から縄文時代後期土器、弥生土器、古墳時代土器、中世土器、貿易陶磁器、鉄器、鉄製品等が検出されている。

（1）中世の遺構

1 堀立柱建物跡（SB）

SB01（第32図）

F-24、F-25区で検出された。主軸は東～西方向へとある。北側は擾乱を受けているため、正確なプランは不明ではあるが、検出部分を見る限り3間×1間である。桁行は6.2mで柱間は2.06mである。梁行は4.05mで柱間も4.05mである。検出柱数は6本である。各柱穴の径は15～37cm、深さは検出面から7～35cmを測る。いずれも本来の掘り込み面はさらに上位にあったものと推察される。検出部の床面積は25.11m²である。

遺構埋土は黒褐色シルトを基本とするもので、パミスを若干含んでいる。各柱穴とも遺物は検出されなかつた。

SB02（第32図）

E-19、E-20区で検出された。東～西方向へ主軸がある。遺構の南半分が調査区外へと延びるため正確なプランは不明である。検出した限りでは3間×1(+a)間で東面、北面の二面庇付のプランとなる。桁行は6.0m（庇含7.4m）、柱間は2.0mある。梁行は1.8m（庇含2.6m）で、柱間は1.8m（庇含2.6m）である。検出柱数は12本（身舎部分は5本）である。各柱穴の径は18～25cm、深さは15～37cmを測る。柱穴は東側のほうが残存度は悪い。検出部床面積は19.24m²（身舎=10.8m² 庇=8.44m²）である。

遺構埋土は黒褐色シルトを基本とするもので、パミスを若干含んでいる。各柱穴とも遺物は検出されなかつた。

SB06（第32図）

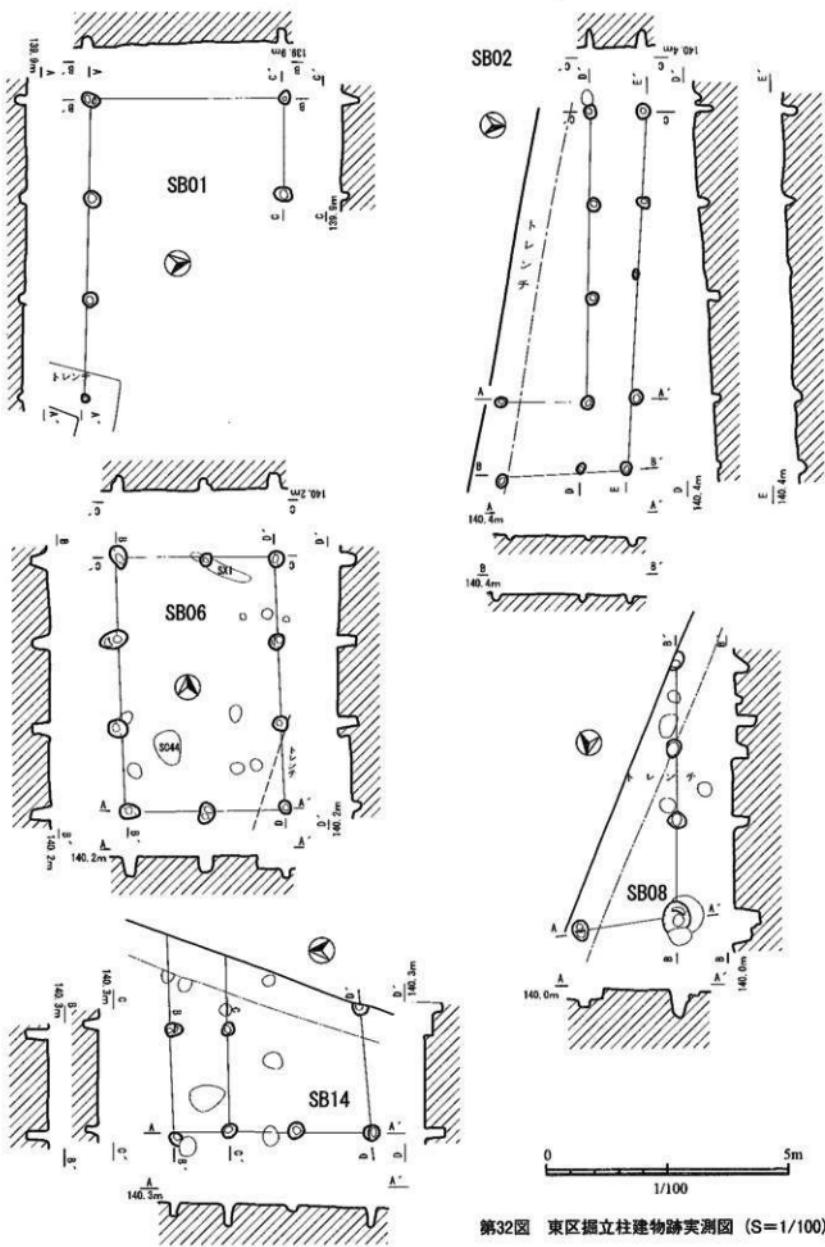
G-24、H-24区で検出された。北～南方向へ主軸がある。当調査区の中で唯一全体を知りうる堀立柱建物で、プランは3間×2間である。桁行は5.15mで柱間は1.7m。梁行は3.22mで柱間は1.6mである。検出柱数は10本である。各柱穴は径が25～40cm、深さは20～40cmを測る。いずれの柱穴も残存状況は良く、掘り方もしっかりとしていた。床面積は16.58m²である。

後述するSB14とは切り合い関係にある。SB06の柱穴がSB14の柱穴を切っており、新旧関係が判別できる。また、北側の柱穴は不明遺構SX02を切っている。

遺構埋土は黒褐色シルトで、IVb層に近いものである。遺物は検出されなかつた。

SB08（第32図）

H-24区で検出された。遺構の東半分は調査区東壁にかかっており、全体の半分程度は検出されていない。東～西方向へと主軸がある。プランは3間×1(+a)間である。桁行5.3mで柱間は1.76m、梁行は2.0m



第32図 東区掘立柱建物跡実測図 (S=1/100)

である。検出柱数は5本である。各柱穴は径が32~54cm、深さは検出面から30~51cmを測る。北側では土坑SC47を切っており、これよりも新しいことがわかる。検出部床面積は11.66m²である。

遺構埋土は黒褐色シルトで、これはIVb層に近いものである。遺物は検出されなかった。

SB14（第32図）

H-24区で検出された。東-西方向へ主軸があり、先述したSB06とはちょうど直交するような配置となっている。遺構東半分が調査区外へ延びているため、正確なプランは不明であるが、検出部だけで2間×2(+a)間となる。北面には庇が付く一面庇と考えられる。桁行は2.35(+a)mである。梁行は2.95m(含庇4.05m)で柱間は1.47mである。検出柱数は6(身舎部分)で、各柱穴は径が27~34cm、深さは検出面から13~45cmを測る。柱穴の掘り込みはいずれもしっかりとしている。SB06と切り合い関係にあり、これに切られている。そのため、SB06に先行して建てられたことがわかる。検出部床面積は13.0m²(身舎=8.85m²、庇=4.15m²)である。

遺構埋土は黒褐色シルトで、他の掘立柱建物と同様である。遺物は柱穴内より土師器小皿(288)が検出された。そのほかは小蝶が数点検出されたのみである。

288は、土師器小皿である。回転ナデによって仕上げ、口縁部はわずかに外方へ開く。底部の切り離しは糸切によるもので、底面には板状圧痕が認められる。

2 溝状遺構 (SD)

SD15（第33図）

F-28、G-28区で検出された。北-南方向へと延びている。断面形は逆台形を呈し、底面付近は外側に向けわずかにオーバーハングしている。溝幅は2.5~4.45(最小~最大:m)である。深さは検出面から最大で0.92mを測る。

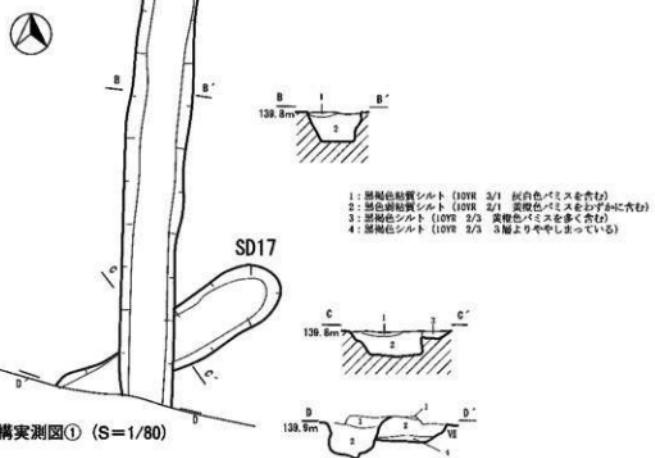
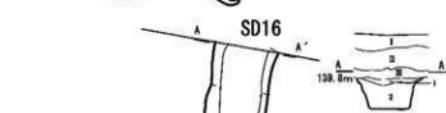
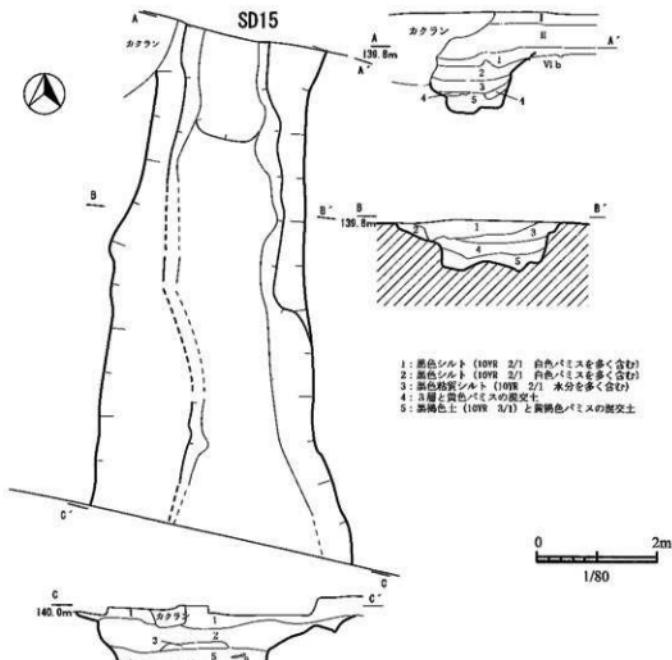
断面観察からはVib層上より掘り込まれている様子が確認できた。埋土は黒褐色土を基本とするもので、バミスの含有具合等からVib層に対応するものである。底面付近の埋土には黑色土と御池軽石が混合したような層が底面から放射状に延びている状況が見られた。これは植生もしくは水流の作用等により埋土が染み出したもので、遺構構築に伴う掘り込みではないと判断した。また、底面付近がオーバーハングするように抉られている状況から、ある程度強い水流があったことが推察される。さらに、溝底面のレベルが南→北へかけて低くなっていることから、この向きで水流が起こるよう構築されていた可能性が考えられる。

出土遺物は上層から青磁、下層から青磁、底面付近から土師器杯が検出された。290~294は、青磁碗である。290、292、293は龍泉窯II-b類に、291は龍泉窯I-4類に比定される。295は土師器小皿で底面付近から検出されたものである。底部の切り離しは糸切によるもので、底面には板状圧痕が確認できる。302は、東捕系須恵器鉢である。304のような用途不明の軽石製品も検出された。ローリングを受けた資料も多く見られ、周囲からの流れ込みと考えられる。

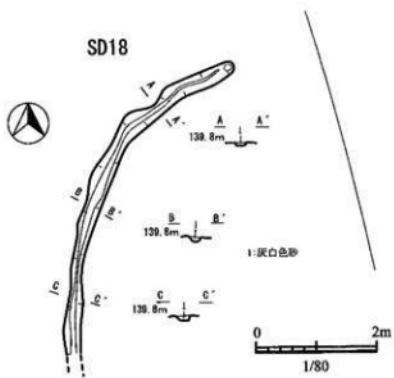
SD16（第33図）

F-28、F-29区、SD15の東6mで検出された。北-南方向に延びており、西側のSD15と併走するように検出された。後述のSD17とは切り合い関係にあり、同遺構を切っている。断面形は逆台形を呈する。深さは検出面から最大で0.7mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基本としており、黄橙色バミスをわずかに含んでいた。なお、この埋土の直上には、文明軽石(Ⅲ層)が堆積していた。

出土遺物は遺構底面から土師器杯(289)が1点検出されており、他は土師器の細片が検出されたのみで



第33図 東区溝状遺構実測図① (S=1/80)



第34図 東区溝状遺構実測図② (S=1/80)

SD18 (第34図)

G-30区で検出された。南-北東方向へ湾曲しながら伸びている。プランは細長い形状を呈し、遺構自体の残存状況も悪い。断面形は浅いU字形を呈する。溝幅0.15-0.35(m)で、深さは0.08mと極めて浅い。埋土には砂層が堆積していたのみである。このことから、溝としての機能のほかに、洪水や多雨時に形成された自然流路のように偶発的に形成された可能性も想定される。遺物は検出されていない。

SD19 (第35図)

G-30、G-31区で検出された。北東-南西方向へ伸びている。中央部分が溜め池状になっており、そこから南方向へは細長く溝状に伸びている。中央部では断面形が深い皿状を呈している。掘り込みの深さも検出面から最大で30cm程度である。埋土は黒色粘質土の単層であり、これはVla層に対応するものである。最下層には砂が堆積していた。全体的に不整で溜め池のような形をしているが、どのような機能があったかは不明である。遺構東側ではSD20と切り合い関係にあり、SD19はこれを切っている。埋土の堆積状況からSD20廃絶後にこれがほぼ埋没した段階に構築されたものと推定される。

SD19からは青磁(305)、土師器枕(306)、小皿(307)、東播系須恵器(311)の他、磚も検出された。

305は青磁枕である。ごく小さな肩部片のため判別に苦しむが、同安窯系Ⅱ類に該当する可能性がある。土師器杯(306)は完形の資料である。内外面ともに回転ナデ、底部の切り離しは糸切によるものである。

SD20 (第35図)

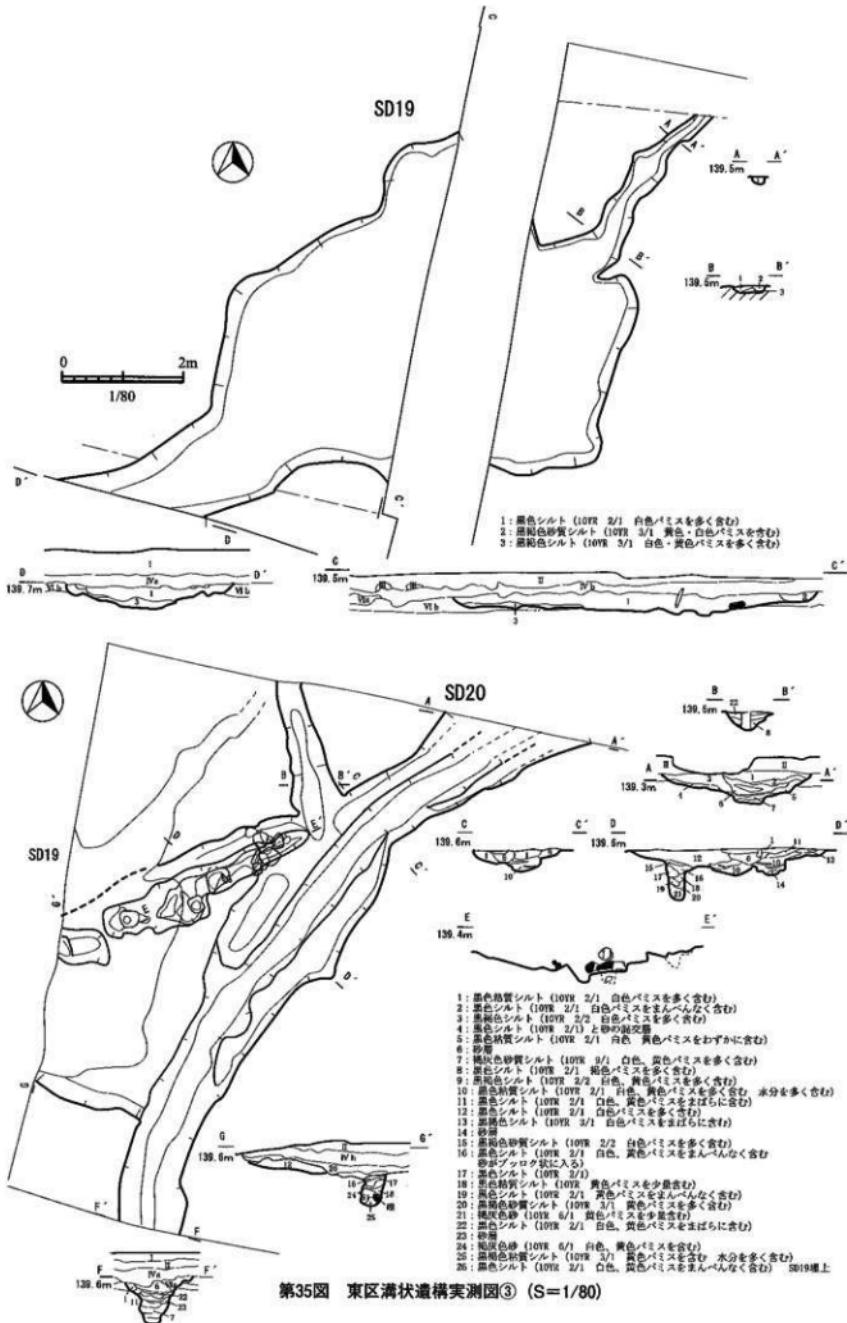
G-31区で調査区を横断する形で検出された。北東-南西方向へとやや湾曲しながら走行している。溝幅は1.05-3.5mを測る。遺構の深さは検出面から0.2-0.8mである。調査区の北東方向から伸びる溝と北西方向から伸びる溝が合流した部分から、南、南西方向へと伸びる溝がそれぞれ構築されている。特に、南西方向のものは細長く土坑状に掘り込まれており、深く掘り込まれている部分もある。底面からは礫、礫石が据え置かれたような状態で検出された。土坑状の掘込は段落ち状に点々と続いており、さらに南西方向へと伸びている。

断面観察からは、Vlb層を掘り込んでいる状況が見て取れ、南壁の土層断面には埋土上部にVla層が落ち

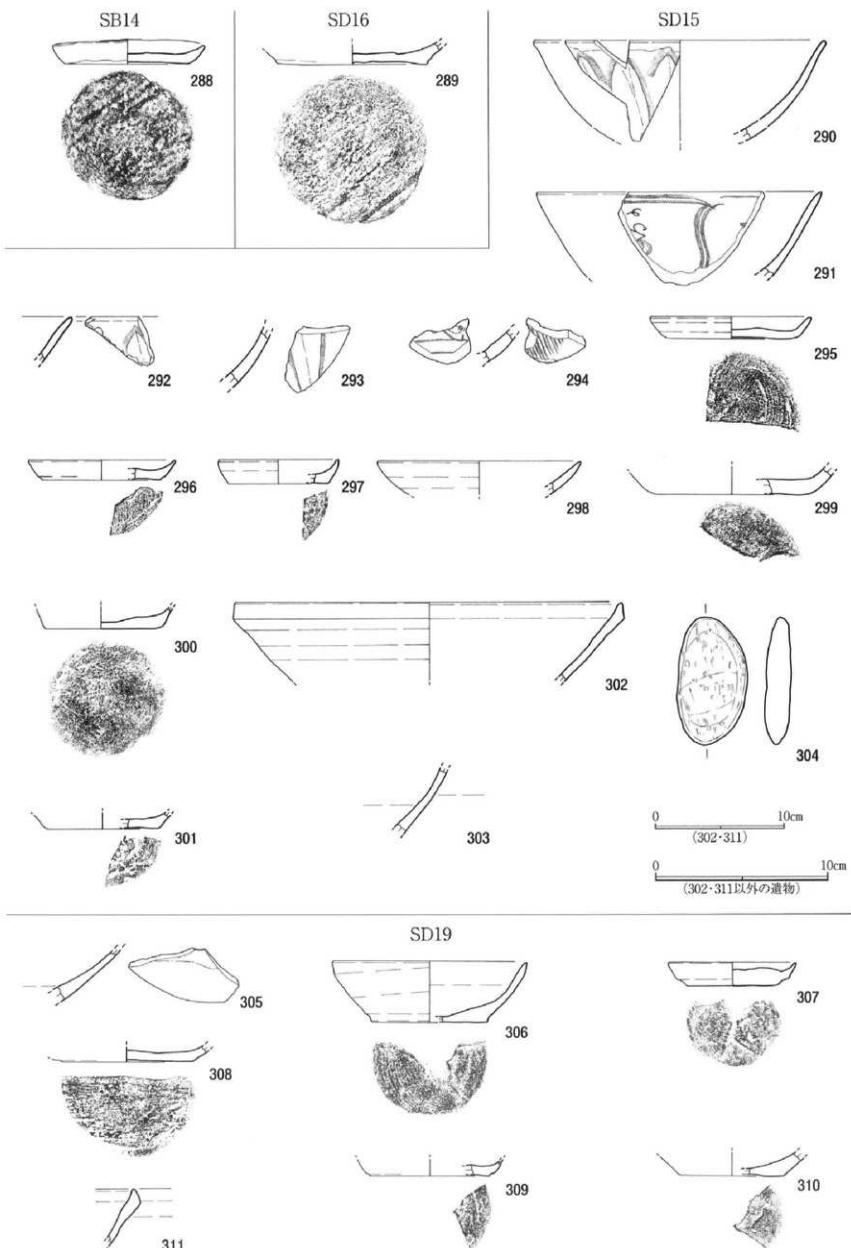
ある。289は口縁部が欠損しており、底部の切り離しは糸切によるものである。底面には板状压痕も確認できる。破片の為、詳細な時期は判然としない。

SD17 (第33図)

F-28区で検出された。北東-南西方向に伸びるが、北端部では収束している。南端付近では前述したSD16に切られている。断面形は逆台形を呈する。溝幅は0.96mで、深さは最大で0.39mである。検出面はVlb層であるが、上位は大きく削平されていた。このことから、本来の掘り込みはまだ上位にあったものと推定される。埋土は黒褐色土を基本とするもので、黄褐色バミスをやや多く含んでいた。また、底面付近ではややしまりのある黒褐色土が堆積していたが、「硬化」と言えるほどではない。遺物は検出されていない。



第35図 東区溝状造構実測図③ (S=1/80)



第36図 東区遺構内出土遺物① (東播系須恵器: S=1/4、それ以外の遺物: S=1/3)

込んでいる状況が観察できた。埋土は黒褐色土を基本としており、砂層、軽石との混合層が交互に堆積している。これは幾度かの水流によって形成されたものと考えられ、据え置かれた礫や軽石の状況を考慮しておくと水利施設として何らかの機能を持っていたことが推定できる。底面レベルをみると、北側から南側へと下がっており、水流はその方向へとあったようである。

出土遺物にはローリングを受けた細片が多数見られ、これらは周囲から水流とともに流れこんできたものと考えられる。の中でも固化したものは6点である。上層からは龍泉窯系II-b類の青磁碗(312)、底面付近からは土師器小皿(313)が検出された。その他、用途不明の軽石製品(314)、台石状の石器(315)も検出されている。

SD22(第37図)

調査区の南東隅、K-34区で検出された。東壁際から検出され東-西方向へと延びている。遺構自体が浅く、部分的な検出で終わっているところもある。断面形は浅い凹状になっている。溝幅は約0.35mである。深さは10cm未満で非常に浅い。東部分では深いところがあり、東壁では断面を検出している。遺構自体、「溝」としての機能を有していたかどうかは不明である。遺構埋土は黑色土をベースとしており、バミスをわずかに含んでいた。遺物は検出されていない。

SD23(第37図)

調査区の南東隅、L-34区で検出された。西壁際から検出され、西-東方向へほぼ一直線に延びている。遺構断面形は浅い逆台形を呈している。溝幅は約0.4mと狭小なものである。深さは最大で20cmである。南東に延びる途中で収束している。深さが全体的に浅いことからも本来の掘り込み面はさらに上位にあったのだろう。遺構埋土は黒色土の単層で、これはVIa層に近い。遺物は検出されていない。

SD25(第37図)

調査区の南東隅L-34区で検出された。東-西方向へ延びている。後述のSD26と走向方向がほぼ一致であり、当初同一の遺構として認識していたが、土層断面の確認から切り合があることを確認し、分別した。溝幅は1.67mで深さは0.47mを測る。遺構断面形は浅い逆台形を呈する。断面で確認するとVIa層中から掘り込まれているようであり、SD26がある程度埋没していた段階に再度掘り直したような状況で構築されたものと推察される。埋土には黒色粘質土と砂層の交互堆積(砂層は2層確認でき、間には黒色粘質土がパックされている)が認められ、幾度か水流を伴ながら埋土が堆積していった状況が推察される。

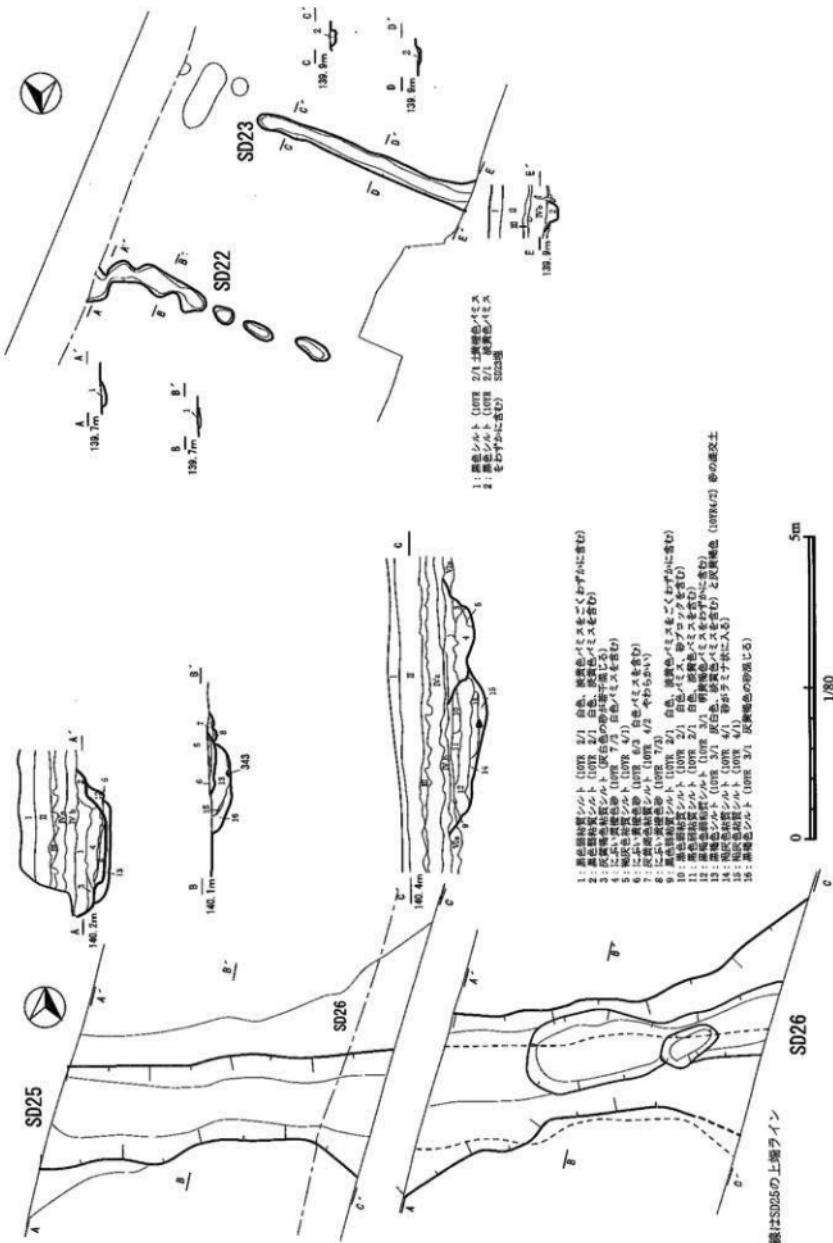
遺物は青磁碗(318~321)、土師器杯(322~324)、小皿(325~327)のほか、東播系須恵器片口鉢(330)も検出された。青磁碗のうち、320・321は龍泉窯系碗II-b類に該当する。

SD26(第37図)

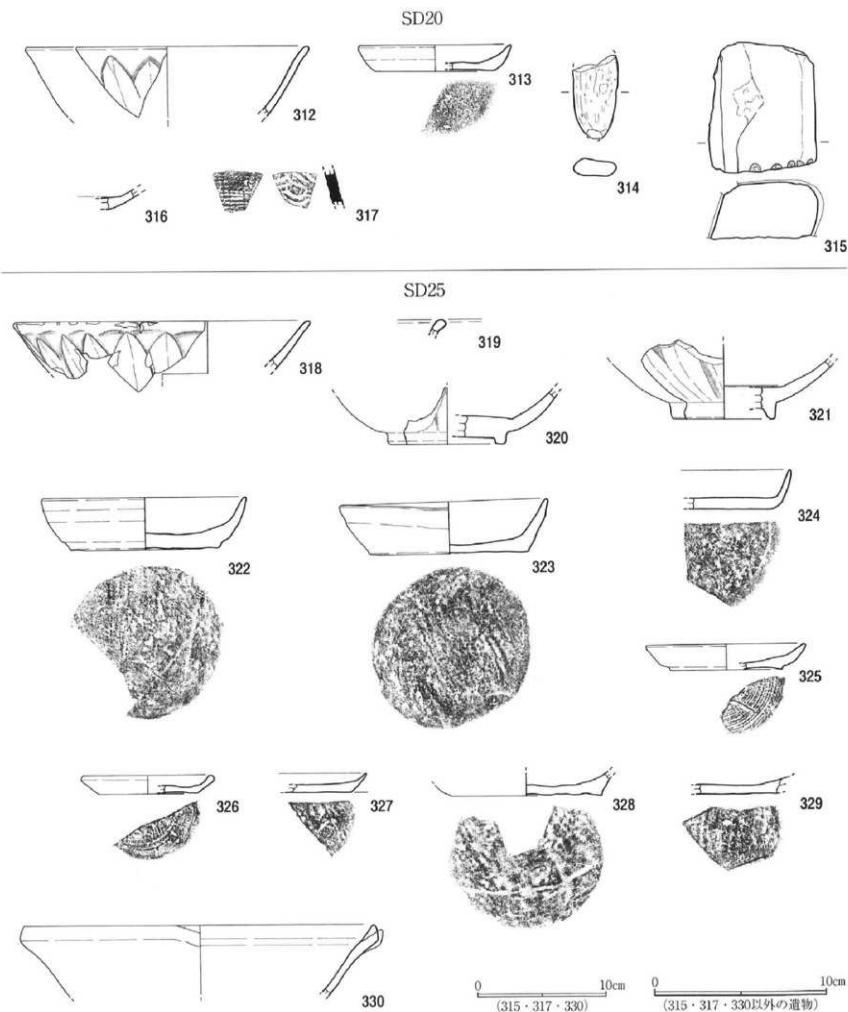
K-23区で検出された。東-西方向へと延びている。遺構断面形は浅いU字形である。溝幅は2.85mで深さは0.65mを測る。先述したSD25に切られており、時期はSD25より先行するものと考えられる。底面に段が形成されており、検出中央部では土坑状に深く掘り込まれている部分がある。埋土は黒色粘質土層(砂がブロック状に混入)をベースとしている。間に砂層がラミナ状に入っている。

遺物はローリングしたものが多く検出されており、付近からの流れ込みと推定される。遺構内における遺物出土量は東区内で一番多い。底面付近から集中的に検出されており、白磁(333~337)、青磁(338~345)、土師器杯・小皿(346~360)、東播系須恵器鉢(361~368)のほかに古墳時代の土器(高杯、兼)も検出されている。いずれも摩滅が著しいため、周囲から流れこんできたものであろう。

白磁碗は大宰府編年IV類(333)のほか、VもしくはVI類に該当するもの(335~337)が見られる。青磁



第37図 東区溝状造構実測図④ (S=1/80)

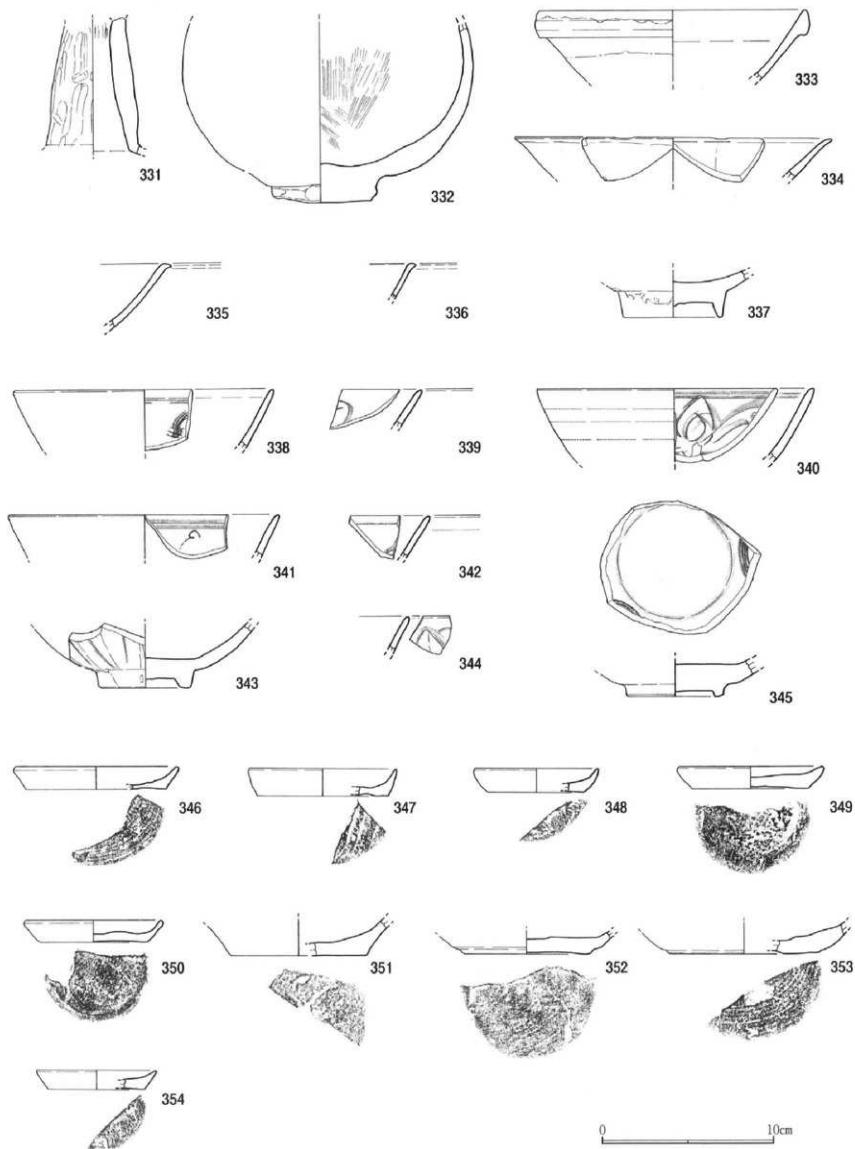


第38図 東区遺構内出土遺物② (須恵器・東播系須恵器・石器: S=1/4、それ以外の遺物: S=1/3)

についてみてみると、338～342・345は龍泉窯系椀I類に該当し、343・344は龍泉窯系椀II-b類に該当するものである。

土師器は杯(351～356)が底部片のみの出土で、全形を知りうるものはない。小皿(346～350・354)は口径が8～10cmの間に収まる。杯、小皿ともに底部の切り離しは糸切によるもので、その一部には底面に板状圧痕が確認できる。検出された貿易陶磁の年代観からは概ね12世紀代(特に後半台)に位置づけることができるがこれが即座に遺構の構築年代に繋がるものではない。

SD26 ①



0 10cm

第39図 東区遺構内出土遺物③ (S=1/3)

3 土坑 (SC)

早馬遺跡の東区では、土坑が合計27基検出された。特に、掘立柱建物跡が検出されているD-18・19区(SB02)付近、G～I-24区(SB06、SB14、SB08)付近に集中している様子が看取される。これらの中には、土師器、鉄器が副葬されたものもあり、土坑墓と考えられるが、ここでは同じ項中で報告する。

SC04 (第40図)

D-18区で検出された。プランは梢円形で規模は 0.82×0.73 (m) である。検出面からの深さは0.11mと浅い。埋土は黒褐色土をベースとしており、バミスの含み具合等からVla層に近い。遺物は検出されていない。

SC05 (第40図)

D-19区で検出された。プランは円形で規模は 0.94×0.85 (m) を測る。検出面からの深さは0.12mと浅い。後述するSC06に切られている。埋土は黒褐色土をベースとしており、Vla層に対応している。

SC06 (第40図)

D-19区で検出された。プランは円形で規模は 0.67×0.55 (m) である。検出面からの深さは0.07mで極めて浅い。先述したSC05を切っている。埋土は黒褐色土をベースとしており、Vla層に対応している。遺物は検出されていない。

SC07 (第40図)

D-19区で検出された。プランは梢円形で規模は 1.15×0.8 (m) である。検出面からの深さは0.12mと浅い。埋土は黒褐色土をベースとしており、Vla層に対応している。遺物は検出されていない。

SC08 (第40図)

D-19区で検出された。プランは正円に近い円形である。規模は 0.77×0.76 (m) である。検出面からの深さは0.2 (m) である。埋土は黒褐色土をベースとしており、Vla層に対応している。

SC09 (第40図)

D-19区で検出された。プランは正円に近い円形である。規模は 0.59×0.55 (m) である。検出面からの深さは0.06mと非常に浅い。埋土は黒褐色土をベースとしており、Vla層に対応している。

SC10 (第40図)

G-25区で検出された。プランは梢円形で全体の1/3程度は検出されていない。規模は $1.36 (+a) \times 0.97$ (m) を測る。検出面からの深さは0.1 (m) である。埋土は黒褐色土でバミスを含んでいる。遺物は検出されていない。

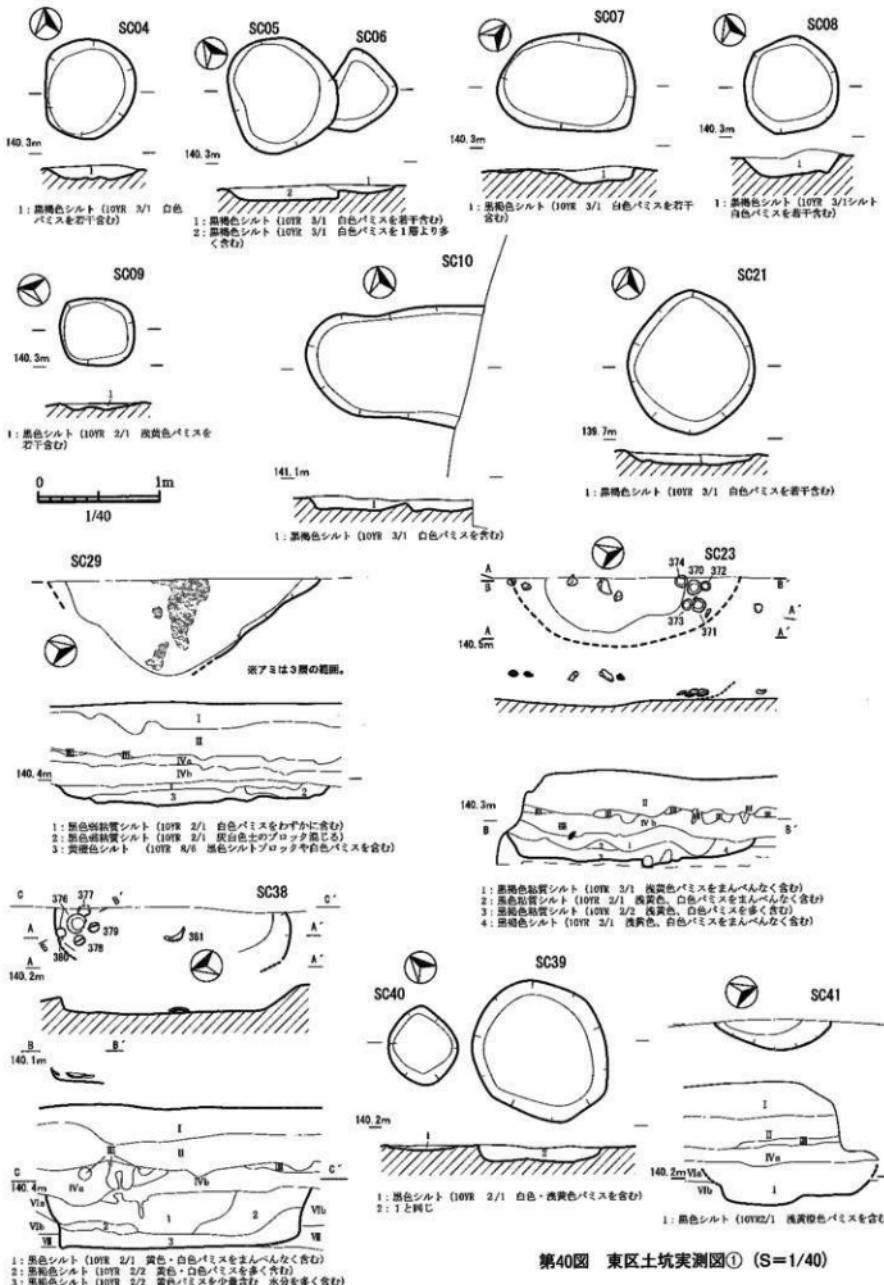
SC21 (第40図)

F-24区で検出された。プランは正円に近い円形である。規模は 1.05×1.05 (m) を測る。検出面からの深さは0.09 (m) である。埋土は黒褐色土でバミスを若干含んでいる。遺物は検出されていない。

SC23 (第40図)

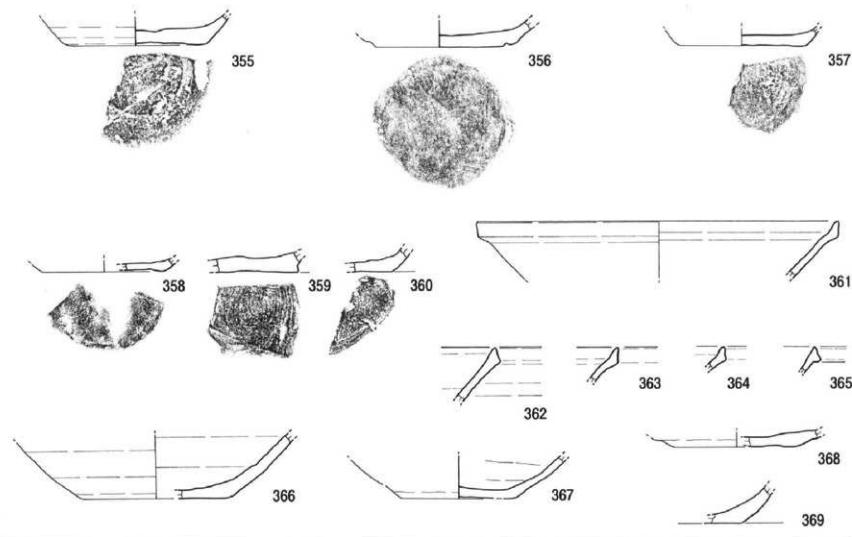
G-24区、調査区西壁際で検出された。遺構の半分は調査区外へと延びているがプランは梢円もしくは長方形を呈するものと思われる。主軸は南-北方向にあるものと思われる。調査時の不手際により、掘り方を全て検出することはできなかった。そのため規模・深さは不明である。遺物の出土状況から土坑墓と考えられる遺構であるが、底面における棺等の痕跡は確認されなかった。

土坑の上層(上位)では疊・軽石が北方向に向け散乱しているような状態で検出された。これが墓標的な役割を果たしていたかどうか不明であるが、掘り込みの上位レベルで検出されていることを考慮すると、遺

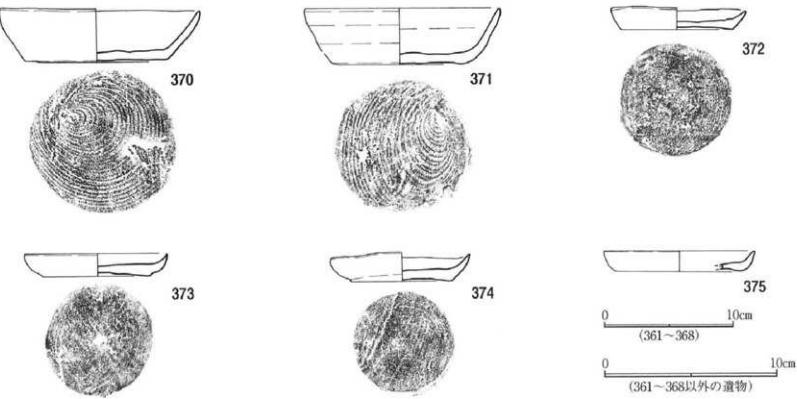


第40図 東区土坑実測図① (S=1/40)

SD26 ②



SC23



第41図 東区遺構内出土遺物④ (東播系須恵器: S=1/4、それ以外の遺物: S=1/3)

構に付隨する可能性が高い。散在して検出されたのは後世の攪乱等により動いたためと考えられる。遺構埋土は黒褐色シルトを基本とし、下層に行くほどパミスの含有量が多くなる。

北側では副葬品と思われる土師器杯(370・371)、小皿(373~375)が検出された。杯を中心にして四方に小皿が配されている。副葬品の検出位置から埋葬頭位は北と考えられる。

杯・小皿ともに底部の切り離しは糸切によるものである。375は半焼成の小皿で、器形に著しい歪みが見られる。

SC29（第40図）

I-23区、調査区西壁際で検出された。プランは半分程度が調査区外へ延びているため全容が不明である。検出した限り、規模は 1.75×1.2 (m)、検出面からの深さは0.18 (m) である。主軸は南-北方向にあるものと思われる。

埋土は黒色の粘質土をベースとしており、平行堆積が見られた。埋土全体は白色バミスをわずかに含んでおり、最下層には褐色シルトや灰状のものがまばらに堆積していた（3層）。この灰状のものが何に起因するのかは不明である。遺物は検出されていない。

SC38（第40図）

I-24区、調査区東壁際で検出された。遺物の出土状況から土坑墓と考えられる遺構である。プランは半分程度が調査区外へ延びているため全容が不明のものの、梢円形を呈するものと思われる。規模は 1.92×1 (m) で、深さは0.47m。主軸は南-北方向にある。埋土上面にはSC23と同様、礫が検出されており、遺構に伴うものと判断した。

東壁の土層断面観察用サブトレーンチ内で検出された為、掘削時に掘りすぎてしまっている。そのため、明確な掘り方を捉えていない。遺構埋土は黒褐色土をベースとしている。土色はVla層に似るもの、バミスをまんべんなく含んでいる点でこれと異なる。

床面に土師器杯（376）、小皿（377～380）、中央部分では鎌状鉄器（381）が検出された。土師器皿・杯は掘込面の北側に配置されており、四方に小爪が配されていた。鎌状鉄器は先切を北側に向けた状態で検出された。

376は杯で口径は15.3cmを測る。底部には糸切による切り離しが認められ、板状压痕も確認できる。小皿（377～380）は、いずれも底部の切り離しは糸切である。381の鎌状鉄器（曲刃鎌？）は、全体が鏽ぶくれてしまっており、残存状況は良くない。外面には部分的に木質状の有機質が残存しており、何らかの有機質容器に収納されて副葬された可能性がある。

SC39（第40図）

I-24区で検出された。すぐ隣にはSC40がある。プランは円形である。規模は 1.2×1.05 (m) で検出面からの深さは0.12 (m) である。埋土は黒色シルトでVla層に対応している。遺物は鎌蓮弁文を持つ青磁小片（382・383）が検出された。これは龍泉窯系碗II-b類に該当する。

SC40（第40図）

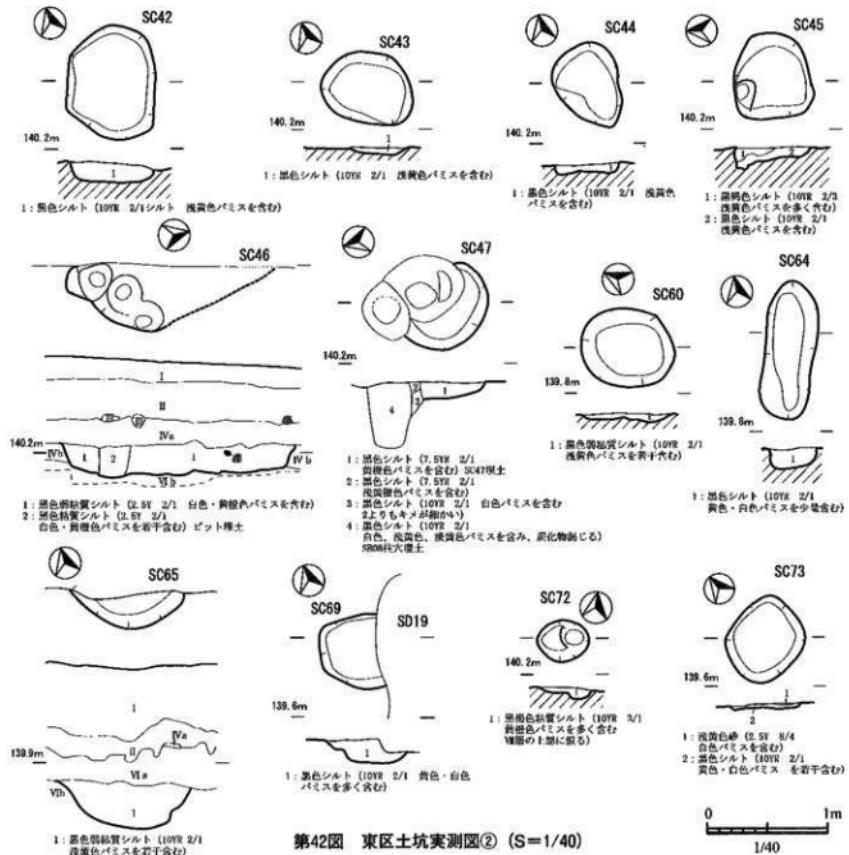
I-24区で検出された。プランは円形である。規模は 0.58×0.55 (m) で検出面からの深さは0.04 (m) と非常に浅い。埋土はSC39と同様、黒色シルトでVla層に対応している。遺物は検出されていない。

SC41（第40図）

I-24区で検出された。遺構の半分以上が調査区外にかかるため、プランが不明であるが梢円形を呈するものと思われる。規模は 1.25×1 (m) で検出面からの深さは0.2mである。土層断面の確認から、Vla層中から掘り込んでいる状況が確認された。埋土は黒色シルトでVla層に対応している。遺物は検出されていない。

SC42（第42図）

I-24区で検出された。プランはややいびつな円形を呈する。規模は 0.94×0.71 (m)、検出面からの深さは0.17 (m) である。埋土は黒色シルトの単層で、バミスをわずかに含んでいる。遺物は青磁碗小片（384）と土師器小皿片（385）が検出された。



第42図 東区土坑実測図(2) (S=1/40)

0 1m
1/40

SC43 (第42図)

H-24区で検出された。プランは円形を呈し、規模は 0.56×0.53 (m)、検出面からの深さは0.06 (m) と非常に浅い。埋土は黒色シルトの単層で、パミスを含んでいる。遺物は検出されていない。

SC44 (第42図)

H-24区で検出された。プランは不整な円形を呈し、規模は 0.7×0.55 (m)、検出面からの深さは0.08 (m) と浅い。埋土は黒色シルトの単層で、パミスを含んでいる。遺物は検出されていない。

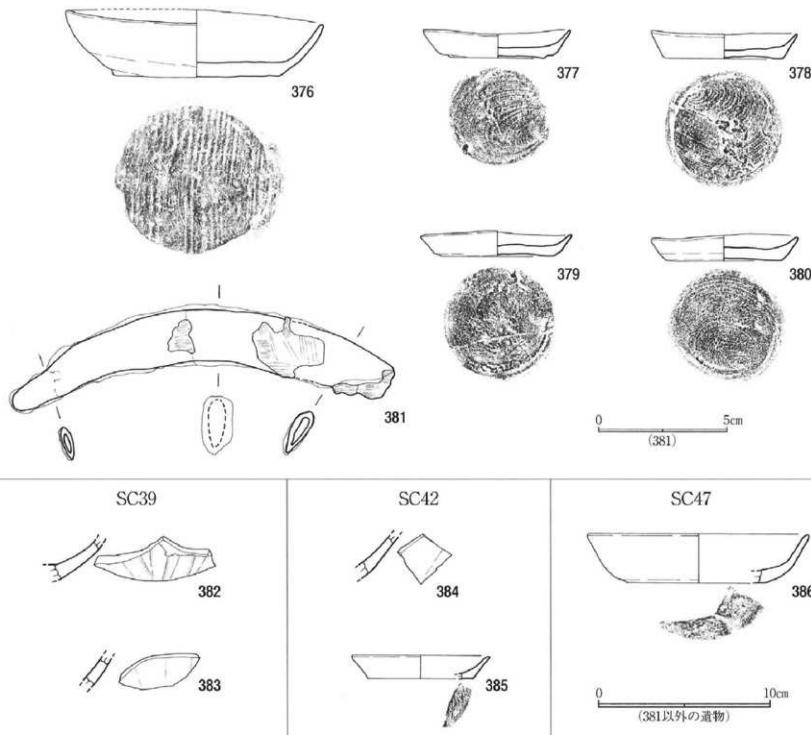
SC45 (第42図)

H-24区で検出された。プランは円形を呈する。規模は 0.71×0.62 (m)、検出面からの深さは0.17 (m) である。埋土は黒色シルトでパミスを含んでいる。遺物は検出されていない。

SC46 (第42図)

H-24区で検出された。プランは楕円形もしくは長方形を呈するものと思われる。プランの西半分は調査

SC38



第43図 東区遺構内出土遺物⑤（鉄製品：S=1/2、それ以外の遺物：S=1/3）

区外へとかかっている。土層断面の観察からIVb層を掘り込んでいる状況が確認された。深さは最大で0.2mを測る。南側はピット2基に切られている。埋土は黒色シルトで白色、黄燈色パミスを含んでいる。軸方向を考慮すると、土坑墓の可能性も考えられるが、SC23・SC38に見られたような碟は確認されなかった。

SC47（第42図）

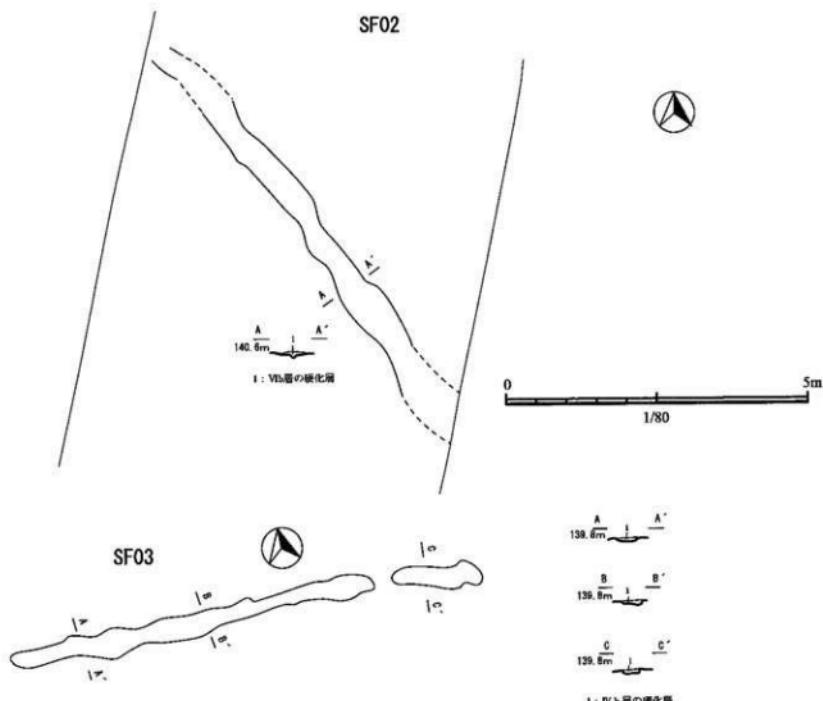
H-24区で検出された。プランは円形を呈するものと思われるが、SB08の柱穴に切られている為、判然とはしない。検出面からの深さは0.13（m）と浅い。埋土は黒色シルトで黄燈色パミスを含んでいる。埋土中から土師器杯（386）が検出された。

SC60（第42図）

D-21区で検出された。プランは円形を呈する。規模は0.72×0.65（m）である。検出面からの深さは0.06（m）と非常に浅い。埋土は黒色シルトで、これはVIa層に対応している。遺物は検出されていない。

SC64（第42図）

L-34区で検出された。プランは梢円形を呈する。規模は1.14×0.42（m）である。検出面からの深さは0.16（m）である。埋土は黒色シルトで、これはVIa層に対応している。遺物は検出されていない。



第44図 東区硬化面実測図① (S=1/80)

SC65 (第42図)

D-21区で検出された。遺構の大半が調査区外へと延びており、プランは不明である。検出面からの深さは0.36 (m) である。埋土は黒色シルトであり、これはVIIa層に対応している。遺物の検出はない。

SC69 (第42図)

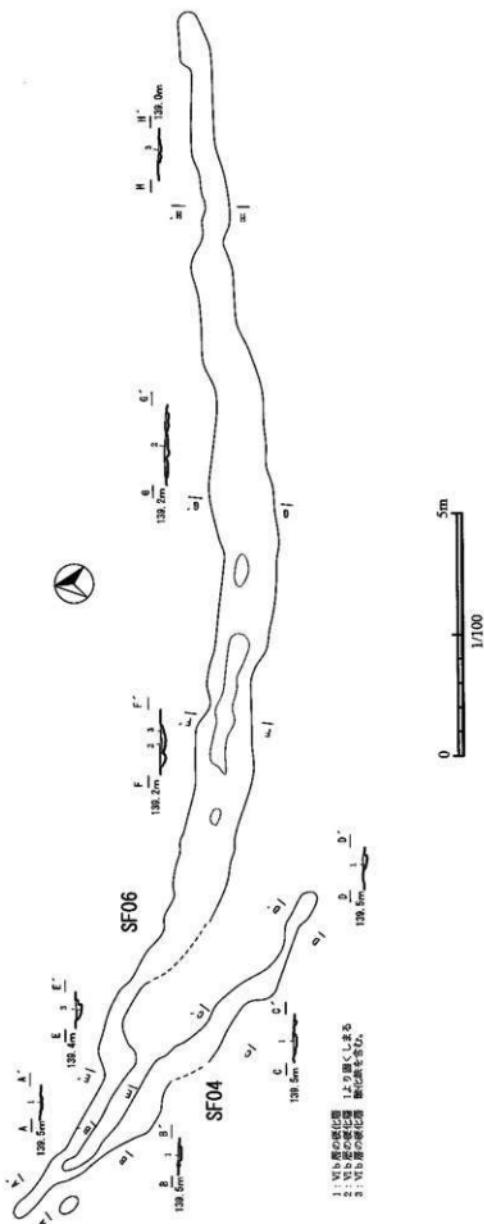
G-30区で検出された。プランは楕円形を呈し、東側はSD19によって切られる。規模は0.77×0.62 (m)、検出面からの深さは0.2 (m) を測る。埋土は黒色シルトで、バミスを多く含む。遺物の検出はない。

SC72 (第42図)

D-18区で検出された。プランは楕円形を呈し、規模は0.43×0.35 (m) を測る。検出面からの深さは0.09 (m) を測るのみである。埋土は黒褐色シルトで、バミスを多く含む。遺物は出土していない。

SC73 (第42図)

G-30区、SC19の北西で検出された。プランは円形を呈する。規模は0.66×0.58 (m)、検出面からの深さは0.04 (m) と非常に浅い。埋土は黒色シルトでバミスを若干含んでいる。SD19の埋土と近似しており、VIIa層に対応するものである。遺物は検出されていない。



第45図 東区硬化面実測図② (S=1/100)

4 硬化面 (SF)

SF02 (第44図)

調査区の南東隅L-34区で検出された。調査区の南東壁際から北西方向へと延びる。Vla層上面で検出された。IVa層の硬化層が浅く落ち込んでおり、層厚5cm程度で堆積していた。遺物は検出されていない。

SF03 (第44図)

G-30区、SD18の北側で検出された。幅0.4m前後で東西方向へ延びる。部分的に途切れるものの、約8mの長さで検出された。硬化面はVlb層が硬化したもので、断面観察からは硬化土が浅く落ち込んでいる状況が確認できた。遺物は検出されていない。

SF04 (第45図)

G-31、H-32区、SD20の東で検出された。北西-南東方向へと延びている。幅は50cm前後で蛇行しながら延び、H-32区で収束している。硬化面はVlb層が硬化したもので、ここでもやはり硬化土が浅く落ち込んでいる状況が確認できた。遺物は検出されていない。

SF06 (第45図)

G-31、G-32、H-33区、SD20の東で検出された。北西-東方向へと延びる。西側の起点はSF04と同一地点にある。幅は最大で1.2mほどで、蛇行しながら延び、G-33区で収束している。長さは25.2mである。基本的にはSF04と同様にVlb層の硬化土が認められ、一部それと比して非常に硬化している面も認められた。また、SF04の硬化土に比べると鉄分を多く含んでおり、硬化土全体が赤味がかった状態で検出された。SF04と起点が同一であるが、両者の時間関係は不明である。遺物は検出されていない。

5 不明遺構 (SX)



SX02 (第46図)

G-24区で検出された。SB06の柱穴に切られており、これに先行して構築されたようである。狭小な溝状遺構のような形態をしている。掘土は黒褐色シルトを基本としており、バミスをまんべんなく含んでいた。遺物は検出されていない。

第46図 東区不明遺構実測図 (S=1/80)

(2) 包含層出土の遺物

1 繩文時代の遺物 (第47図)

東区においても縄文時代に帰属する遺物が見られた。しかし、西区に比べるとその量は僅少で図化可能な遺物はわずかに2点のみである。両者とも縄文晩期に属する土器である。

387、388は縄文晩期の深鉢の口縁部である。387の外面にはミガキの痕が残る。いずれも黒川式期の所産と考えられるものである。

2 弥生時代の遺物 (第47図)

土器

弥生時代の遺物は土器、石器が検出されている。Vlb層から出土したものがほとんどである。389-391は甕である。389は口縁端付近に2条の刻目突帯を巡らす。弥生時代前期の下城式甕に見られる特徴をもつ。390、391も同様の資料である。394は小型の甕である。396は口径5.4cmで小型の壺と考えられる。頸部に4

条の突帯を巡らし、最下段には勾玉状の浮文が付されている。勾玉状浮文が貼付されていることから、弥生中期後半～後期前葉の時間幅で捉えられる資料である。

石器

包含層中から検出された石器は計6点を数える。ただし、これらは必ずしも弥生時代に限定して時期比定できるものではなく、縄文時代後期～古墳時代まで含めた時間幅の中で捉えうる。

398は打製石斧である。粗加工の後、両側縁及び両端に打撃を加え整形している。刃部には使用時に付いたと見られる擦痕（線状痕）が認められる。石材はホルンフェルスである。399は剥片石器。石材は輝石安山岩である。401、402は砥石である。正背面及び両側面に使用痕が残る。403は台石で敲打痕のほかにススも付着しており、二次的な転用の可能性がある。

3 古墳時代の遺物（第47図）

甕の胸部片（397）が1点検出されたのみである。押圧による刻目突帯が1条確認でき、外面には接合線が残っている。古墳時代中～後期の時間幅に位置付けられよう。

4 中世の遺物（第48～52図）

東区から最もまとまって検出されたのは西区と同様、中世に該当する資料である。これらの多くは遺構が多く検出されているF～J-24・25区を中心に見つかっており、IVb層中から出土したものが多い。また、Vla層が残存している箇所については、ここからも検出されている。以下、各種別・分類順に報告していく。

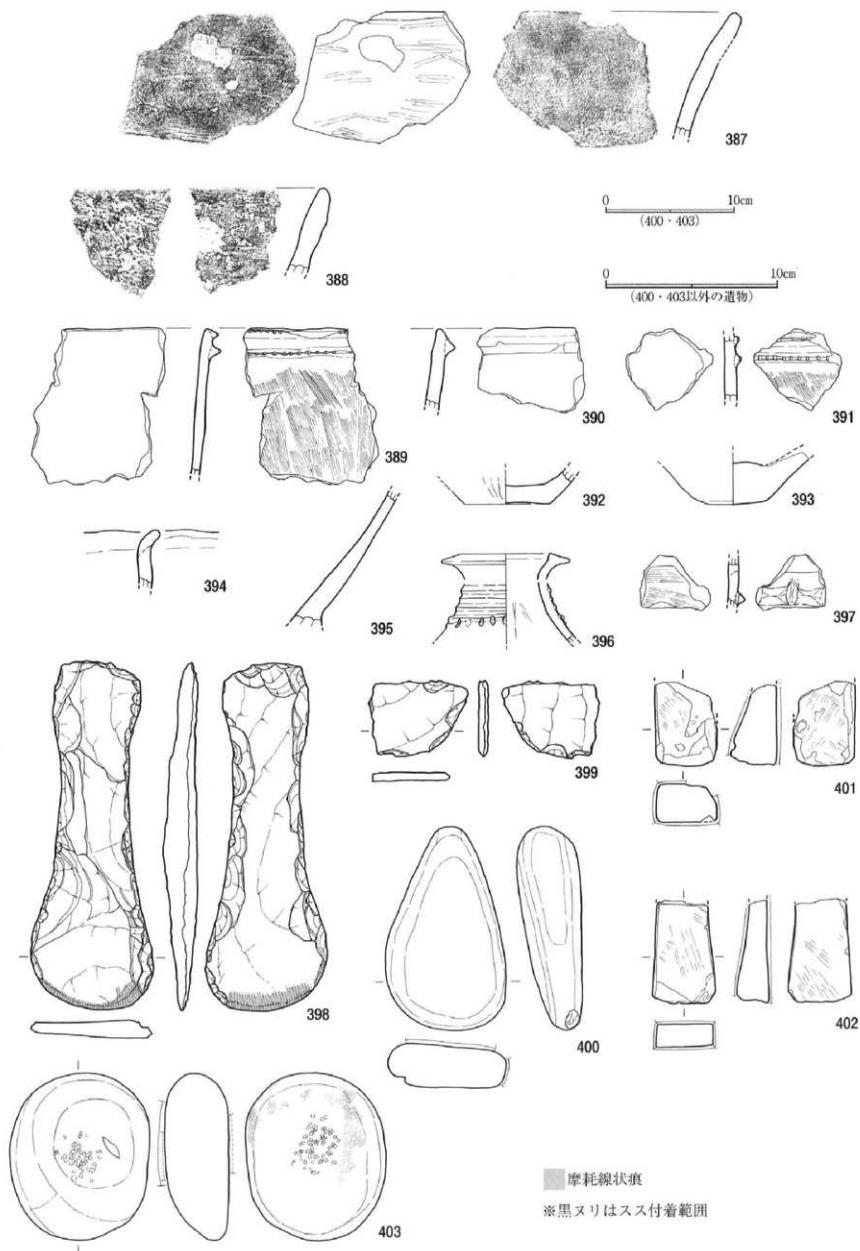
①陶磁器（第48～50図）

東区においても白磁が検出されている。いずれも口縁部等の破片資料がほとんどであり、完形のものは検出されていない。椀（404～413）が中心に出土している。これらは、大宰府編年IV類、V類、VI類に該当する一群である。404、405は玉縁状口縁をもつものでIV類に該当する。405の外面はくすんだ灰白色を呈している。414は青白磁の碗である。III（415～420）は口縁部が主に検出されているがその検出量は少ない。420は内面にヘラ書きの草花文が施されており、VI類に該当するものと考えられる。他の資料もその形態からVI類およびIX類に該当するものである。これらは概ね12世紀代の時間幅の中で捉えられる一群である。422は椀の底部である。胴下半の外面は露胎で釉薬はかかっていない。底部内面には沈線が1本巡っている。424には釉薬が厚くかけられており、底部にまで釉垂れが及んでいる。

青磁（425～444）について見てみると、検出された器種はほとんどが碗である。430、431は内面に花文が認められ、龍泉窯系統I類に該当する。これは検出された一群の中では12世紀中頃～後半と一番古いものに属する。432～441の外面には鎮連弁文が見られ、龍泉窯系統II類に該当するものである。これらの中でもII-b類の検出数が多く、9点検出されている。439は連弁文に加えて櫛目文が施されており、I-6a類の可能性がある。13世紀前後～前半に位置づけられるものである。このほかにIII（443・444）が2点検出されている。443は胴部が露胎となっており、器面調整に粗い回転ヘラケズリの痕が見られる。

445～447は中国陶器と考えられる資料である。いずれも小片であるため、全容をうかがい知ることはできないが、暗緑色がかった褐釉がかかっている。445は口縁部のみであるが、壺もしくは水注と考えられる資料である。446の口縁部上面には目痕（胎土目？）が残っている。

448～458は国産陶器の一群としてグルーピングした。この中の448～454は常滑焼の大甕と考えられる資料である。胴部や底部片が主であるため、帰属時期の判別が困難である。



第47図 東区包含層出土遺物① (縄文土器・弥生土器・古墳土師器: S=1/3、石器: S=1/3・1/4)

459は瓦質土器の鉢である。外面は黄灰色、内面は灰白色を呈している。内外面ともに器面が荒れているが、捏鉢であろう。

460～462は須恵器甕の胴部片である。3点図化している。それぞれ外面に平行、格子目タタキが、内面には平行、同心円の当具痕が認められる。460はやや土師質の焼成で、外面には自然釉が付着している。いずれの資料も胎土中に白色粒を含んでいる。これらは中世の資料として報告しているが、平安期の資料である可能性も否めない。

463～487は東播系須恵器の鉢もしくは片口鉢である。東区においてもまとまって検出されている。口縁部は外方へと開き、口径は23.5～29.6cmほどである。口縁端部の形態にはバリーションが認められ、端部を上方へ拡張するもの（463～466）、端部を上方へ拡張しないものの（467）、玉縁状になるもの（473、476）がある。これらは、口縁部形態による判断のみで不確実性を伴うが、森田編年の「第Ⅱ期第2段階」～「第Ⅲ期第1段階」に位置付けることができよう。従って12世紀末～13世紀代（特に前半）の時間幅を与えることができる。463および478の口唇には自然釉が付着している。465の器面には白色や灰色のやや大きめの砂粒が露出している。

②土師器（第51・52図）

土師器は杯、小皿が多くまとまって検出されている。小片で検出されたものも非常に多かったがここでは図化可能だった資料を掲載している（491～525）。

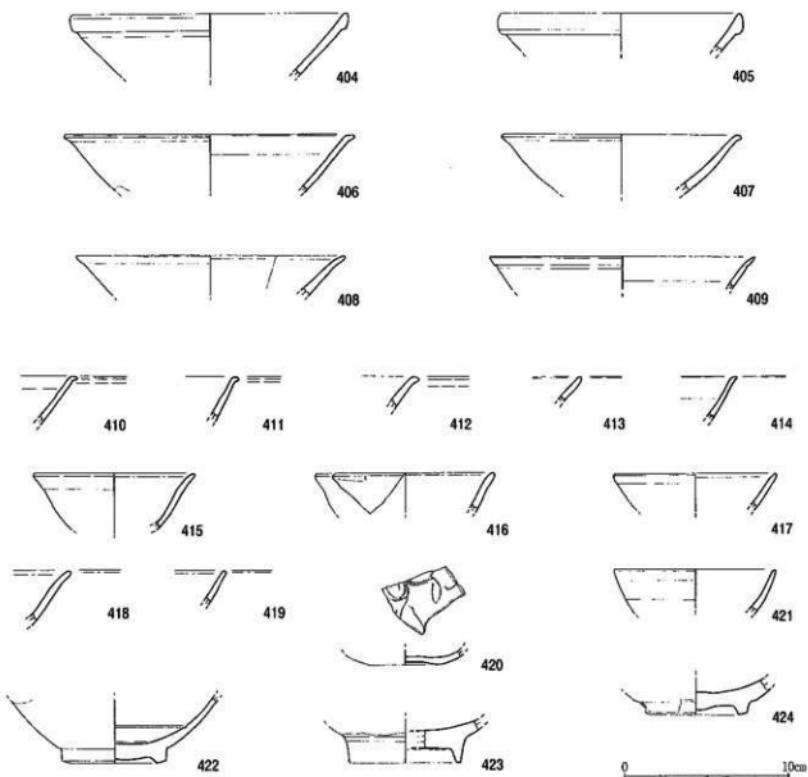
杯491の内面には墨書きが確認できる。文字としての判別は困難で、直線を組み合わせて何らかの文様を描いているように見える。胎土が浅黄橙色を呈しており、明るめに発色している。その他の杯は口縁部が外へ開きながら、わずかに内湾するものが多いが、493、495のように直立ぎみに立ち上がるものもある。また、これらの口径は確認できるもので9.8～13.9cmの幅である。底部の切り離しはすべて糸切によるもので、491にのみ底面に板状圧痕が確認できる。すべての資料は回転整形によるもので、明瞭なナデ痕を見ることができる。495は回転ナデによって、胴部中央がやや膨んでいる。色調は橙色系に発色するものと、灰白色に発色するものに大別できる。いずれも胎土中に茶褐色粒（砂礫）を含んでいる点で共通している。

小皿（497～509）は杯よりも多く検出されている。口径が7.5～10.2cmで平均値は8.2cmである。底径は5.2～7.6cmの幅で見られ、平均値は6.5cmである。底部の切り離しはすべて糸切によるもので、一部の底面には板状圧痕が観察できる。501は底部下端で明瞭な稜を形成している。にぶい黄橙色を呈しており、焼成が堅鐵である。503は色調が浅黄橙色を呈しており、胎土中に茶褐色の粒が多く混入している。507～509は小皿の中でも口径が小さい。522の内面には、回転整形時に付いたと思われる工具痕が沈線状に巡っている。525の内面には黒色物質が付着している。灯明皿として使用された可能性がある。これら小皿の色調にはにぶい橙色、浅黄橙色、灰白色に発色する3パターンが見られ、浅黄橙色のものが最も多い。

杯、小皿とともに形態のヴァリエーションが認められ、口径、底径とともにサイズにもややばらつきが見られた。これらは当地域の中世土師器の編年を行なった柴畑光博の編年案に対照させると12世紀後半～13世紀代で取まるものである。

③滑石製品（第52図）

滑石製品は2点検出されている。526は滑石製石鍋である。口径は16.6cmを測る。内外面ともに整形時の加工痕が明瞭に残されており、継ぎの工具痕が残っている。外面には煤の付着が認められる。527は台形状の滑石製品で上端付近に穿孔を施している。正面下端付近は磨り減っており、砥石として使用されたようである。



第48図 東区包含層出土遺物②（白磁・青白磁：S=1/3）

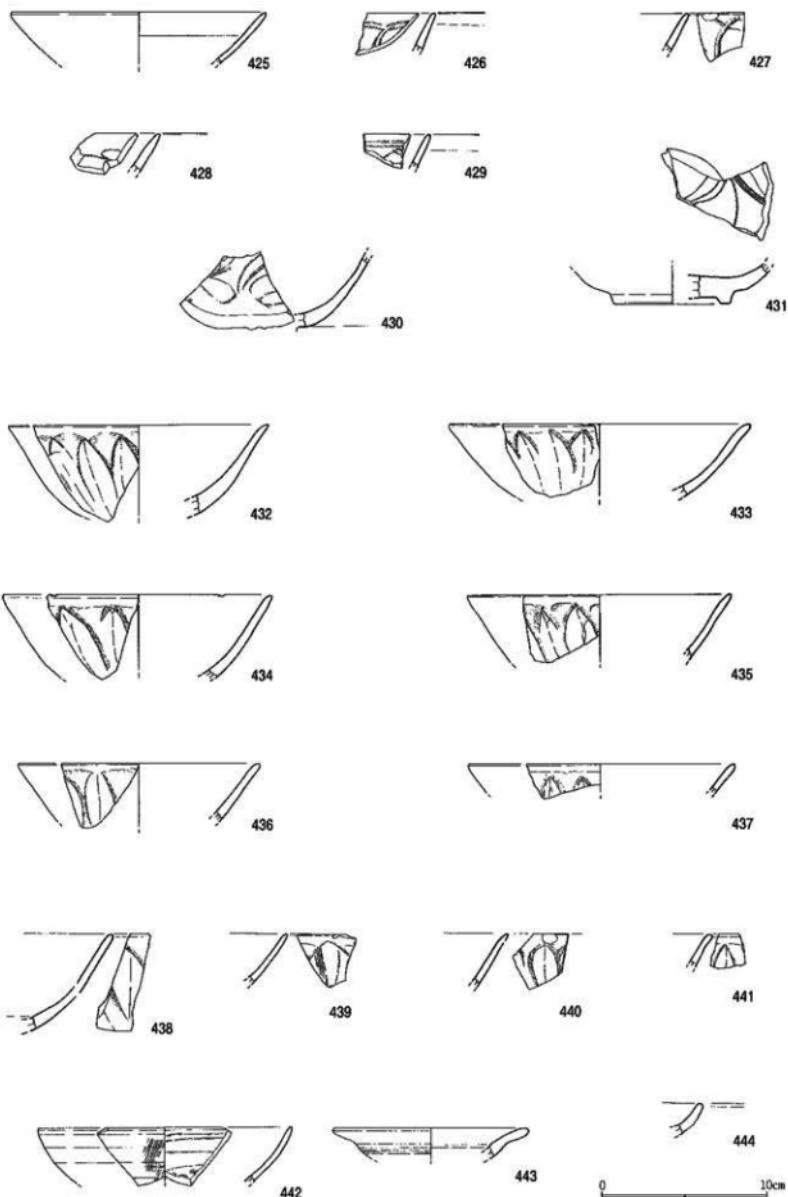
④その他の遺物（第52図）

528は土製品、529～532は鉄製品、533は軽石製品である。

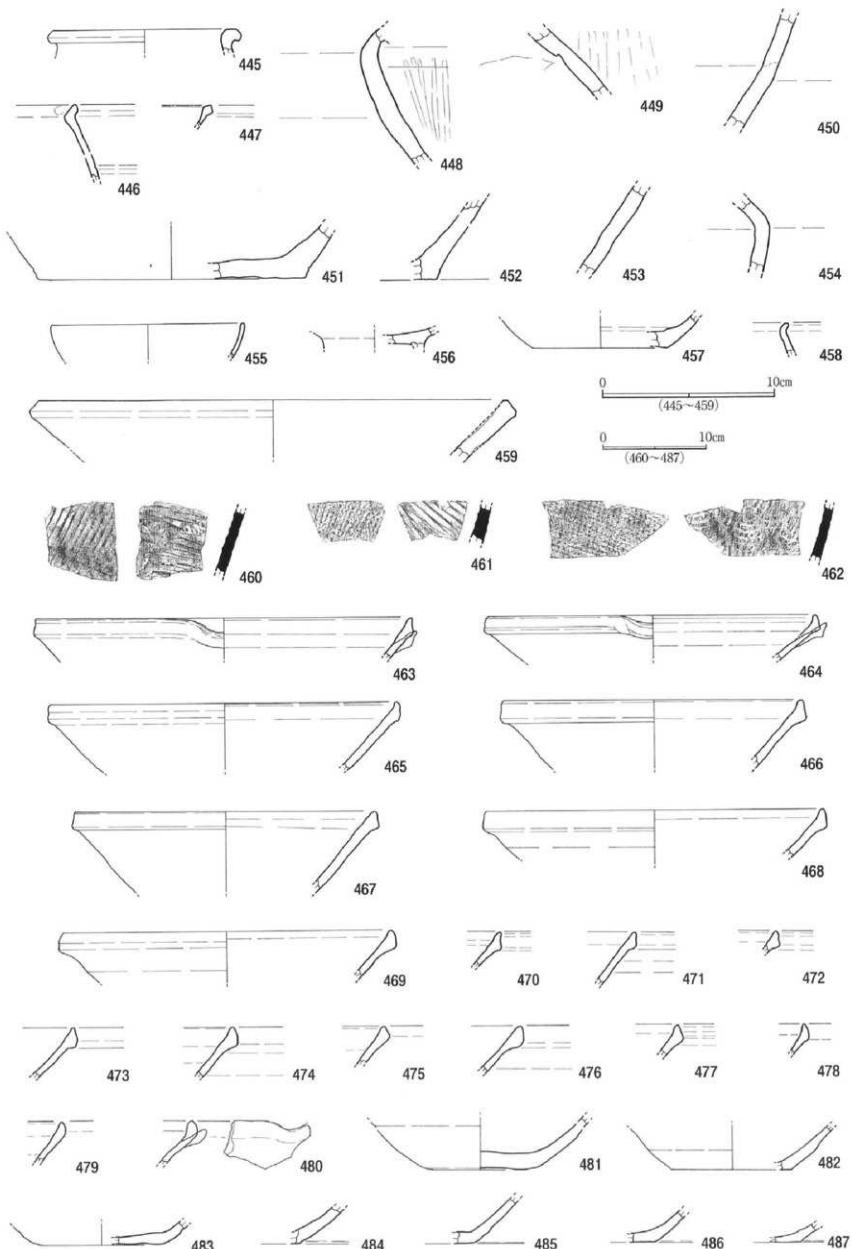
528は土師器底部を転用した土製品である。底部片を直径約1.5cmの円盤状に加工している。ローリングも受けているようで、全体的に摩滅している。用途は不明である。

鉄製品は合計3点検出された（529～531）。これらはいずれも製品の破片であるが、錆ぶくれ、層状剥離も著しい。そのため形態、用途ともに不明である。明確な刃部や加工痕も確認できないが、何らかの利器の一部と考えられる。532は鉄滓である。

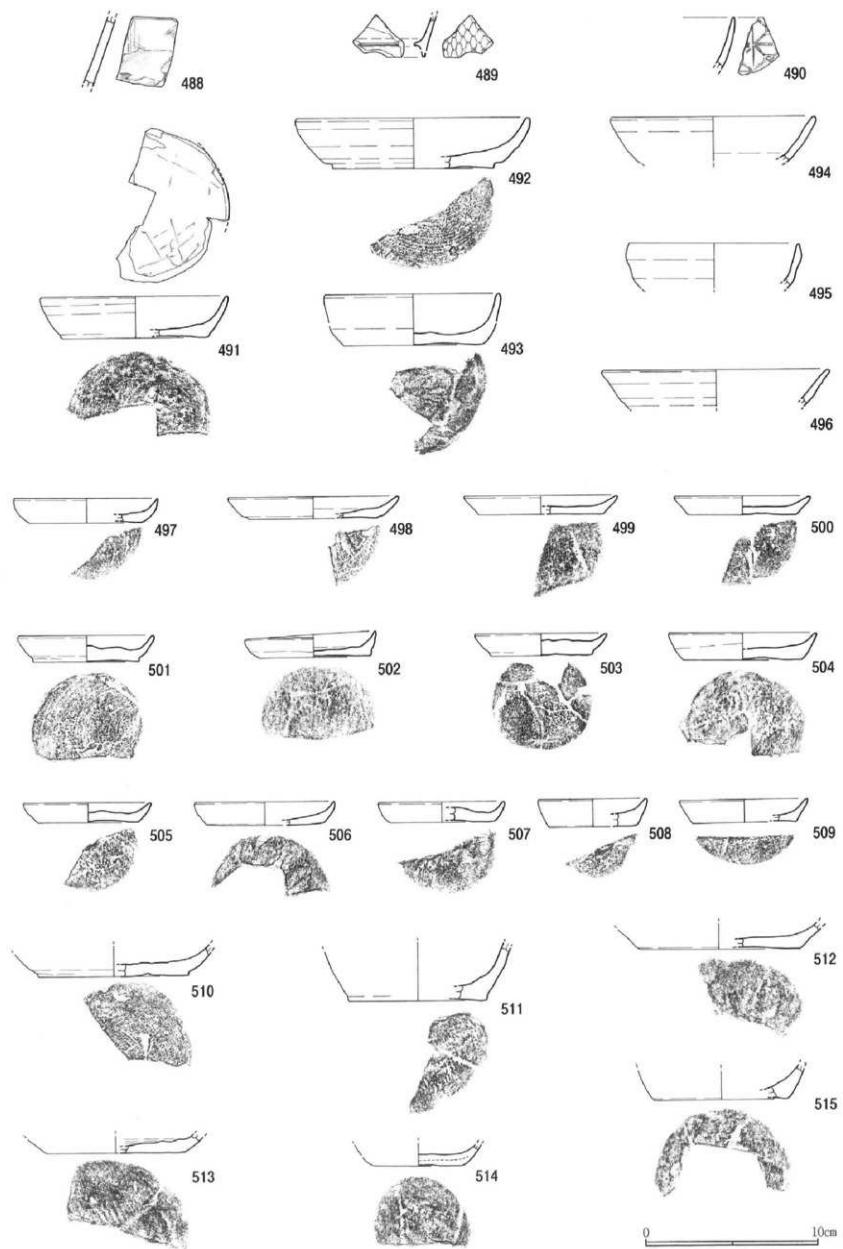
533は調査区の東端、L-34区で検出された軽石製の石塔の一部である。一片を約30cm四方の正方形にカットし角は丸く削り取られている。中央には正・背両面から円孔が穿たれている。その形態から五輪塔の一部と考えられるが、検出ポイント付近では埋葬遺構やそのような状況を示す資料は検出されていない。II層中から検出されたものでもあり、周囲から流れ込んできたものと考えられる。



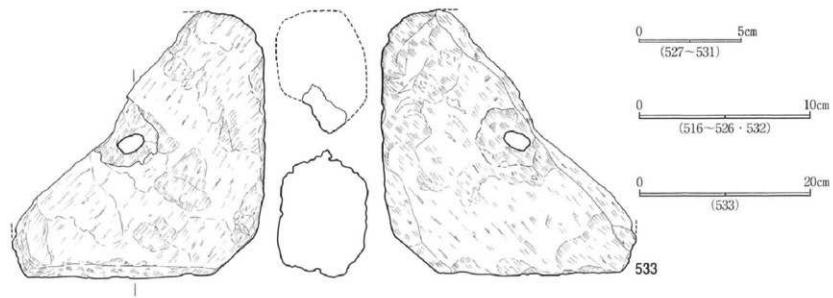
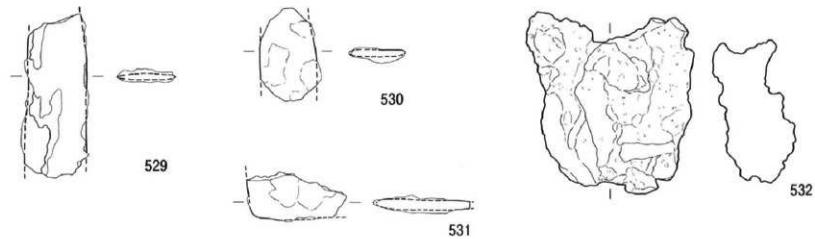
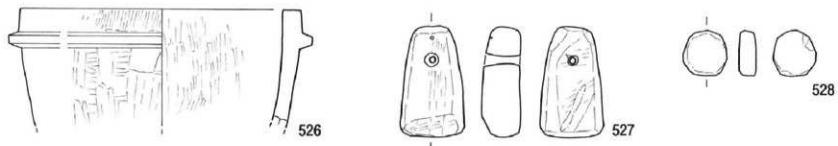
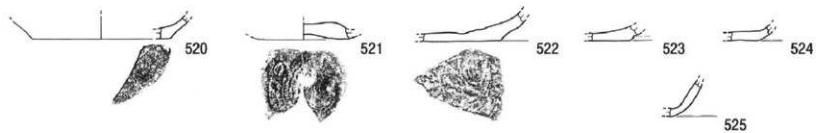
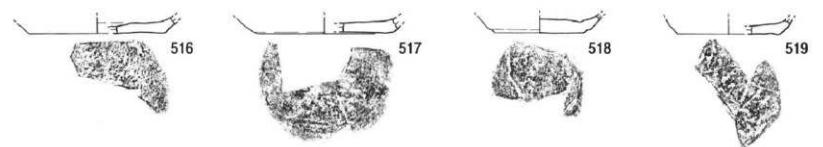
第49図 東区包含層出土遺物③ (青磁: S=1/3)



第50図 東区包含層出土遺物④ (陶器・瓦質土器: S=1/3、須恵器・東播系須恵器: S=1/4)



第51図 東区包含層出土遺物⑤ (染付・土師器: S=1/3)



第52図 東区包含層出土遺物⑥(土師器・石鍋・鉄滓: S=1/3、滑石製品・鉄製品: S=1/2、軽石製品: S=1/6)

(4) 小結

ここで東区の調査成果について簡単にまとめておきたい。

まず、検出された遺構のうち、掘立柱建物跡は計5棟が検出された。しかし、これらは調査区域の都合から、そのほとんどが部分的な検出でとどまっている。このうち、SB06とSB14には重複がみられ、柱穴の切り合いからSB14⇒SB06への新旧関係が明らかとなっている。主軸方向も考慮に入れると、検出された掘立柱建物跡群には、少なくとも2時期の時間変遷が想定されるが、これらに直接伴う遺物はほとんどなく、その検証は非常に困難である。

溝状遺構は11条検出された。プラン・規模ともに大小あるが、これも部分的な検出でとどまっているため、遺跡内でどのように走行しているのか不明である。機能面を考えると、SD20、SD25、SD26は床面付近やそれより上位の埋土中に幾層かの砂層を交えており、幾度となく水流があったことが想起される。水田経営あるいは他の用途での導水施設の可能性が高いといえる。他の溝状遺構については、他の掘立柱建物跡等の遺構との関係も不明であり、その正確な機能・用途は不明である。これらの大半は出土遺物の状況、遺構埋土の堆積状況から13世紀の後半段階にはその使用を終えているものと推定される。

土坑は計26基検出され、そのうち2基を土坑墓として報告した(SC23、SC38)。土坑墓は2基とも出土七師器の形態が類似しており、同時期とみて大過ない。衆畠光博の編年案に対照させたならば、概ね12世紀後半～13世紀の時間幅で捉えられるものである。SC38では、鎌状鉄器の副葬も見られた。現在のところ、都城市内における中世段階の土坑墓は正坂原、松原地区第IV、王子原第2、加治屋B遺跡等で検出されている。これらのうち、松原地区第IV遺跡SC04では刀子の副葬が認められ、白磁碗IV類と共に副葬されている(11世紀後半～12世紀前半)。これら中世段階の土坑墓においても、被葬者ごとに幾バターンかの供獻形態が想定されるところであり、今後事例の蓄積を待って検討すべきであろう。

出土遺物の状況を見てみると、少量の绳文時代～古墳時代の上器が検出されているが、非常に点的な検出にとどまっている。メインは中世の遺物であり、貿易陶磁(青・白磁)、東播系須恵器、土師器等が検出された。その分布について見てみると、各遺物とも掘立柱建物跡や土坑等の遺構が多く検出されたG～L-23・24区に集中する傾向にある。出土した貿易陶磁の量は西区に比べて多いとは言えないが、年代は11世紀後半～13世紀代の時間幅に位置づけられるものである。このうち青磁に着目すると龍泉窯II-b類碗が多く検出されている。西区出土の青磁碗がI類を中心とした12世紀代の資料がまとまって検出されているのに対して、13世紀前半台を中心とする傾向にある。

土師器の出土量は西区に比べると多い傾向にある。杯・小皿が中心に検出されており、技法的な側面に着目すると、底部の切り離しはいずれも糸切りによるものである。形態には幾つかのバリエーションが認められるが、当該期の土師器編年を行なった衆畠光博(2004)の編年案に対比させると、これも概ね12世紀～13世紀代の時間幅でおさえられる一群である。

このように見えてくると、東区における中世集落は西区と同様12～13世紀を中心に展開したものであり、中でも13世紀代の資料が卓越する傾向にあり、ピークはその時期にあるとも考えられる。その後、15世紀の後半、文明輕石降下(1471～1476年)の直前までには完全に水田城に転化したようである。12～13世紀代を挟んで、その前後の時代の遺構遺物はほとんど検出されておらず、東区における居住活動はこの時間幅に限定されるといえよう。

ところで、東区の土層では、西区において安定的に堆積するVIa層が堆積しない箇所が幾つか見られた。このような場所ではVIb層の直上にIVb層が堆積している状況にあり、間にるべきVIa層を欠いている。掲

載した東区の土層断面にはIVb層上に堆積するIVa層が畦畔状の高まりを見せている箇所もある。両層とも
プラントオパール分析の結果からは多量のプラントオパールが検出されており、水田層の可能性が高いと
いう結果が得られている。これが文明軽石降下前の水田開発に伴ってなんらかの造成を受けた層であるな
らば、VIIa層は造成により搅乱・消滅した可能性も想定できる。実際にSC23の土層断面では、上位の埋土が
IVb層に挟られるような堆積状況が確認されている。このような事例がさらに積み重なっていれば一つの傍
証ともなろうが、現在のところ他に判断材料がない。今後、仔細な検討が必要であり、未だ推定の域を出る
ことはないが、可能性の一つとして付言しておきたい。

第1表 早馬遺跡出土遺物観察表①

目次 番号	遺物 名	種別	器種	出土遺跡 地点・層位		法量 (cm)		文様・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	高さ	外側	内面	外側	内面			
1	青磁	碗	SB09 P1-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	茶褐色	泥泉系窯J-6a類	
3	白磁	碗	SB10 12-1層	16.2	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	淡褐色	反転復元 白磁碗Vor復原	
4	滑石製品	石瓶	SB10 P2-1層	-	-	-	-	-	-	-	-	外面墨付着	
5	土師器	小鉢	SD01-1層	-	4.8	-	四軸ナデ	四軸ナデ	に赤い斑模	に赤い黄緑	茶褐色	底部糸切	
6	中国陶器	小盤	SD01-2層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	淡褐色	中國陶器小盤I-2a類	
7	圓文土器	深鉢	SD01-1層	-	-	-	凹縫	ナデ	黒褐	黒褐	白色・透明感	圓文時代後期	
8	圓文土器	深鉢	SD01-1層	-	-	-	条痕	ナデ	に赤い縫~	縫	茶褐色	圓文時代後期	
9	圓文土器	深鉢	SD01-1層	-	-	-	条痕+凹縫	ナデ	に赤い縫	縫	白色・茶褐色	圓文時代後期	
10	圓文土器	深鉢	SD01-1層	-	-	-	条痕	条痕	に赤い赤闘	明赤褐	白色・茶褐色	圓文時代後期	
11	圓文土器	浅鉢	SD01-1層	-	-	-	ミガキ	ミガキ	に赤い	褐灰	茶褐色	圓文時代後期(黒田式)	
12	白磁	碗	SD04-2層	15.2	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	淡褐色	反転復元 白磁碗Vor復原	
13	白磁	碗	SD07-2層	-	6.1	-	施釉-露胎	施釉-露胎	灰白	灰白	淡褐色	反転復元 白磁碗露胎	
14	十輪器	小鉢	SD04-1層	10.1	6.2	2.8	四軸ナデ	四軸ナデ	浅灰模	浅灰模	黑色	反転復元 底部糸切 板状正直	
15	東漢系須恵器	鉢	SD04-1層	27.6	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰一灰白	灰	白色・黑色	反転復元	
16	勞生土器	甕	SD07-床面	-	4.0	-	磨耗	磨耗	櫻	櫻	白色・赤褐色	全体的に磨耗	
17	白磁	皿	SD07-床面	10.0	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	淡褐色	白磁蓋器Ib類	
18	青磁	碗	SD07-床面	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	茶褐色	泥泉系窯口頭	
19	中國陶器?	?	SD07-床面	-	-	-	露胎	露胎	灰白	灰白	淡褐色		
20	土器器	小皿	SD07-床面	8.2	6.4	1.3	四軸ナデ	ナデ	櫻	櫻	黑色	反転復元 底部糸切 板状正直	
23	圓文陶器	甕	SD07-床面	-	-	-	ナデ	ナデ	に赤い	茶闘	茶褐色	常滑器 外面自然施の上に修復	
24	圓文陶器	甕	SD07-床面	-	-	-	タタキ	ナデ	に赤い	茶闘	茶褐色	常滑器 外面自然施	
25	勞生土器	高杯	SD12-3層	-	-	-	ミガキ	工具ナデ	櫻	櫻灰	黑色・白色・茶褐色	反転復元 全体的に磨耗	
26	勞生土器	甕	SD14-1層	-	-	-	ナデ	ナデオサエ	浅灰模	浅青模~黒	黑色・白色・茶褐色	黒盤式系?	
27	白磁	皿	SD14-1層	10.5	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	淡褐色	白磁皿頭	
28	青磁	碗	SD14-1層/H-13-IVb/ Via類	16.6	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	淡褐色	反転復元 泥泉系窯I-2類	
29	青磁	碗	SD14-2層	-	5.0	-	施釉	施釉	オリーブ青	オリーブ青	茶褐色	青磁系系統頭	
30	青磁	碗	SD14-3b層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ青	オリーブ青	茶褐色	泥泉系窯II類	
31	中國陶器	小皿	SD14-1層	18.2	14.6	5.0	露胎	露胎	灰白	灰白	淡褐色	反転復元 宇國陶器小皿I-2a類	
32	土器器	小皿	SD14-1層	7.6	6.0	1.2	四軸ナデ	四軸ナデ	櫻	櫻	黑色	反転復元 底部糸切 板状正直	
33	土器器	杯	SD14-床面	-	10.4	-	磨耗	磨耗	浅黄模	浅黄模	黑色	反転復元 板状正直 外面鐵付着	
34	土器器	小皿	SD14-2層	10.0	7.8	1.4	四軸ナデ	四軸ナデ	に赤い	に赤い	茶褐色	反転復元 底部糸切 内面鐵付着	
35	土器器	杯	SD14-1層	-	8.8	-	ナデ	ナデ	灰白	灰白	黑色	反転復元 底部糸切 板状正直	
36	土器器	杯	SD14-1層	-	8.6	-	ナデ	ナデ	に赤い	茶褐色	黑色	反転復元 底部糸切 板状正直	
37	土器器	杯	SD14-1層	-	7.2	-	四軸ナデ	ナデ	に赤い	茶褐色	黑色	反転復元 底部糸切	
38	東漢系須恵器	鉢	SD14-1層	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰黄	灰黄	白色・灰白色		
39	東漢系須恵器	鉢	SD14-1層	-	8.0	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰白	灰白	白色・灰白色	反転復元 底部糸切	
40	東漢系須恵器	鉢	SD14-1層	-	11.0	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰黄	灰黄	白色・灰白色	反転復元	
41	東漢系須恵器	鉢	SD14-床面	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	黄褐	黄褐	白色	内外面鉄分付着	
42	東漢系須恵器	鉢	SD14-柄	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰白	灰白	白色・黑色		

第2表 早馬遺跡出土遺物觀察表②

器物 番号	種別	器種	出土遺構 位置	法蓋 (cm)		文様・御題		色調		胎土	備考	
				口径	底径	器高	外縁	内面	外側	内側		
18	東漢系鉢形 壺	壺	SD21-1層	-	-	-	平行タキ	丁寧なナデ	灰黄褐色	褐灰	白色粒	土瘤質
	青磁	碗	SD27-1層	-	7.8	-	施釉・青釉	オリーブ黄	オリーブ黄	鐵褐色黑色粒	内面見込み朱書きあり	
	青磁	碗	SD27-1層	-	6.4	-	施釉	施釉	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	鐵褐色黑色粒	反転復元 青磁系碗
	白磁	碗	SC01-1層	15.7	4.6	7.4	施釉・青釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	内面焼付La類
	十輪器	小皿	SC18-1層	-	7.6	6.5	1.1	無軸ナデ	無軸ナデ	灰白	灰白	茶褐色
22	上部器	杯	SC20-1層	-	8.2	-	同軸ナデ	同軸ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	黑色粒	反転復元 底部足切
	土師器	杯	SC48-2層	11.5	7.0	3.1	同軸ナデ →ナデ	同軸ナデ →ナデ	浅黄褐色	にかい銀	黑色粒	底部余型 極板上級
	青磁	碗	SC50-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	稍鐵	反転復元 青磁系碗I類?
	青磁	碗	SC52-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	稍鐵	龍泉窯系碗I類
	十輪器	杯	SC55-1層	-	8.0	-	同軸ナデ	同軸ナデ	にかい銀	にかい銀	稍鐵	反転復元
23	木漆系鉢形 器	SC55-1層/T10-Vb層	28.8	-	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	稍鐵	反転復元 底部足切 棒状直脚
	土師器	小皿	SC56-1層	8.0	6.2	1.3	同軸ナデ	同軸ナデ	にかい銀	浅黄褐色	黃褐色較	反転復元 底部足切
	土師器	小皿	SC58-1層	8.8	6.6	1.6	同軸ナデ →ナデ	同軸ナデ →ナデ	にかい銀	にかい銀	黑色-茶褐色較	底部余型
	上部器	小皿	SC58-1層	8.0	6.6	1.2	施墨	施墨	浅黄褐色	浅黄褐色	反転復元 金井の内施墨	
	青磁	碗	SC59-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	稍鐵	龍泉窯系碗I類
25	青磁	碗	SC61-1層	-	-	-	施釉	施釉	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	鐵褐色	同安窯系碗I-II類
	土師器	杯	SC61-1層	-	8.2	-	同軸ナデ	同軸ナデ	にかい銀	浅黄褐色	茶褐色	反転復元 底部足切
	東漢系環足 鉢	SC66-1層	...	-	-	-	同軸ナデ	同軸ナデ	灰-灰白	灰白	白色-黑色粒	
	食器系鉢形 器	皿	SC67-1層	-	-	-	平行タキ	丁寧なナデ	にかい銀	にかい銀	白色-透明粒	土瘤質
	漢文土器	深鉢	H-10-Vb層	20.0	-	-	秦灰→四 線-指文次	秦灰	褐	にかい褐	白色-茶褐色較	反転復元 簡式
26	漢文土器	深鉢	B-10-Vb層	-	-	-	秦灰→黑 線	秦灰→黑 线	明赤褐	灰褐	白褐-透明-茶褐色 灰色	漢文時代後期(端式)
	漢文土器	深鉢	B-10-Vb層	-	-	-	秦灰→門 闌	秦灰→門 闌	明赤褐	にかい赤褐	白色-透明較	漢文時代後期(端式)
	漢文土器	深鉢	B-10-Vb層	-	-	-	秦灰→ナ サエ	秦灰→ナ サエ	明赤褐	褐	白色粒	漢文時代後期(端式)
	漢文土器	深鉢	B-10-Vb層	-	-	-	ナサエ→ナ サエ	ナサエ→ナ サエ	白色-透明	白色-透明	白色-茶褐色較 白色	漢文時代後期(端式)
	漢文土器	深鉢	B-11-Va層	-	-	-	ナサエ	ナサエ	にかい銀	にかい銀	白色-茶褐色較 白色	漢文時代晚期 外面蓆付着
27	撲士器	浅鉢	H-4-Vb層	33.2	-	-	ミガキ	ミガキ	にかい銀	にかい銀	黑色-白色粒	漢文時代晚期(川式)
	撲士器	浅鉢	E-4-Vd層	15.4	-	-	ミガキ	ミガキ	施釉	灰黄褐色	白色粒	撲士時代晚期(川式)
	撲士器	鉢	D-14-Va層	27.8	-	-	ナデ	ナデ	にかい銀	にかい銀	黃褐色較	撲士時代後期 外面蓆付着
	内磁	碗	J-13-Va層	16.0	-	-	施釉・轟目	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	反転復元 白胎燒IV類
	内磁	碗	E-14-T-12-Vb層	16.8	-	-	施釉	施釉	淡黃	灰白	鐵褐色黑色粒	反転復元 白胎燒IV類
28	白磁	碗	X-12-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
	白磁	碗	I-13-Va層	15.6	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	反転復元 白胎燒IV類
	白磁	碗	I-14-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	浅黃	浅黃	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
	白磁	碗	E-14-Vb層/ J-13T-Va層	-	-	-	施釉	施釉	浅黃	浅黃	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
	白磁	碗	E-14-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
29	白磁	碗	J-13-Vb層	15.4	-	-	施釉	施釉	灰	灰	鐵褐色黑色粒	反転復元 白胎燒IV類
	白磁	碗	L-13-Va層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
	白磁	碗	J-12-Va層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
	白磁	碗	G-12-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類
	白磁	碗	J-12-Va層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	鐵褐色黑色粒	白胎燒IV類

第3表 早馬遺跡出土遺物觀察表③

器物 番号	種類	器種	出土遺構 地点・層位	法量(cm) L径 底径 器高	文様・調査		色調		地土	備考
					外側	内面	外側	内面		
93	白磁	碗	L12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
94	白磁	碗	L13-V1a層	16.0 - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁碗Vor種類
95	内胆	碗	L13-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
96	白磁	碗	H-13-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
97	白磁	碗	G-13-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
98	白磁	碗	I-11-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
99	白磁	碗	I-13-V1a層	17.8 - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁碗Vor種類
100	白磁	碗	I-11-V1b層	- - -	施釉	施釉	淡黃	淡黃	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
101	白磁	碗	I-12-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
102	白磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
103	内胆	碗	I-13-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
104	白磁	碗	I-12-V1a層	14.6 - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元
105	白磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗V類? 花柄あり
106	白磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗Vor種類
107	白磁	碗	I-13-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁碗V種類
108	白磁	碗	K-12-V1b層	17.6 - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁碗V類
109	白磁	碗	C-13-V1a層	16.8 - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁碗V類
110	白磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉-露胎	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁碗V類?
111	白磁	碗	I-13-V1a層	- 6.0 -	施釉-露胎	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁碗V類?
112	白磁	皿	J-12-V1a層	10.8 - -	施釉-露胎	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元 白磁皿?
113	内胆	皿	I-11-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁皿種類
114	白磁	皿?	J-12-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁皿?
115	白磁	皿	I-13-V1b層	9.4 - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁皿種類?
116	白磁	皿	H-13-V1b層/H-13-V1a層	9.8 3.4 1.6 -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	白磁皿種類
117	青白磁	合子蓋	I-13-V1b	5.5 3.3 1.7 -	施釉	施釉-露胎	灰白	灰白	微細黑色紋	反転復元
118	青白磁	合子身	H-13-V1a層	4.5 - -	施釉-露胎	施釉	綠灰	綠灰	微細黑色紋	反転復元
119	青白磁	合子身	J-12-V1b層	4.3 3.6 2.2 -	施釉-露胎	施釉	明綠灰	明綠灰	微細黑色紋	反転復元
120	青白磁	合子身	K-12-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	
121	青白磁	合子身	K-12-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	
122	青磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	糯	龍泉窯系鉢I類
123	青磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	糯	龍泉窯系鉢II類
124	青磁	碗	I-13-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	糯	龍泉窯系鉢II類
125	青磁	碗	J-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黑色紋	龍泉窯系鉢II類
126	青磁	碗	I-12-V1a層	- - -	施釉	施釉	淡黃	淡黃	微細黑色紋	龍泉窯系鉢II類
127	青磁	碗	I-13-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黑色紋	龍泉窯系鉢II類
128	青磁	碗	H-13-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黑色紋	龍泉窯系鉢II類
129	青磁	碗	K-12-V1b層	- - -	施釉	施釉	灰白	灰白	微細黑色紋	龍泉窯系鉢II類?
130	青磁	碗	F-13-V1a層	- - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黑色紋	龍泉窯系鉢II類
131	青磁	碗	E12-I-13-V1b層	15.6 - -	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	糯	反転復元 龍泉窯系鉢I類

第4表 早馬遺跡出土遺物觀察表④

遺物 番号	種別	器種	出土遺構 地点・層位		法量 (cm)		文様・痕跡		色調		黏土	備考	
			広径	延径	高さ	外面	内面	外面	内面				
132	青磁	碗	G-13-Vla層		15.4	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	反転復元 龍泉窯系鏡I-類
133	青磁	碗	J-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I類
134	青磁	碗	D-15-Vla層		18.8	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	板根復元 龍泉窯系鏡I-類
135	青磁	碗	I-12-Vla層		17.6	-	-	施釉	施釉	灰	灰	微細黒色粒	反転復元 龍泉窯系鏡I-類
136	青磁	碗	I-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	龍泉窯系鏡I-類
137	青磁	碗	K-12-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	粘土	龍泉窯系鏡I-類
138	青磁	碗	H-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	粘土	龍泉窯系鏡I-類
139	青磁	碗	L-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I-類
140	青磁	碗	I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	明オリーブ灰	明オリーブ灰	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I-類
141	青磁	碗	I-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	龍泉窯系鏡I-類
142	青磁	碗	I-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	粘土	龍泉窯系鏡I類
143	青磁	碗	I-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	龍泉窯系鏡I類
144	青磁	碗	I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	龍泉窯系鏡I-類
145	青磁	碗	I-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微細黒色粒	反転復元 龍泉窯系鏡I類
146	青磁	碗	G-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	龍泉窯系鏡I類
147	青磁	碗	J-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I類 花化有
148	青磁	碗	I-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	灰	灰	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I-類 花化有
149	青磁	碗	G-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	龍泉窯系鏡II-類
150	青磁	碗	H-13-Vlb層/I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I-6a類
151	青磁	碗	I-12/J-13-Vb		16.2	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	反転復元 同安窯系鏡I-6b類
152	青磁	碗	I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	粘土	同安窯系鏡I-1b類
153	青磁	碗	I-13-Vlb層		17.4	-	-	施釉	施釉	灰	灰	粘土	反転復元 同安窯系鏡I-1b類
154	青磁	碗	I-13-Vlb層		16.4	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	反転復元 同安窯系鏡I-1b類
155	青磁	碗	I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I-類
156	青磁	碗	J-13-Vla層		17.8	-	-	施釉	施釉	从オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	反転復元 同安窯系鏡I類
157	青磁	碗	I-12-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
158	青磁	碗	J-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
159	青磁	碗	H-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
160	青磁	碗	G-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
161	青磁	碗	H-12-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
162	青磁	碗	I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
27	163	青磁	I-12-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
164	青磁	碗	H-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
165	青磁	碗	I-13-Vlb層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	同安窯系鏡I類
166	青磁	碗	H-12-Vlb層		5.8	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	粘土	反転復元 龍泉窯系鏡I類
167	青磁	碗	I-12-Vlb層		5.3	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	反転復元 龍泉窯系鏡I類
168	青磁	碗	I-13-Vlb/Vla層		5.5	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	微細黒色粒	反転復元 龍泉窯系鏡I類
169	青磁	碗	I-13-Vlb/Vla層		6.0	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微細黒色粒	反転復元 龍泉窯系鏡I類
170	青磁	碗	V-13-Vla層		-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微細黒色粒	龍泉窯系鏡I-3類

第5表 平馬遺跡出土遺物觀察表⑤

回復 番号	種類	器種	出土遺物 地点・層位	法長(cm)		文様・表面		色調		黏土	備考		
				口径	底径	器高	外面	内面	外面				
27	171	青磁	碗	H-13-Vb/Vn層	-	6.2	施釉	施釉	灰	灰	無	反転復元 龍泉窯系鏡1頭	
	172	青磁	碗	H-13-Vb層/H-13-Vb/ Vn層	-	6.0	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	無	反転復元 龍泉窯系鏡1頭	
	173	青磁	碗	I-13-Vla	-	-	露胎	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	無	微細黒色粒 反転復元 阿安窯系鏡1頭	
	174	青磁	碗	J-12-Vb層	-	4.8	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	無	微細黒色粒 反転復元 龍泉窯系鏡1頭	
	175	青磁	碗	I-13-Vla層	-	4.4	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	無	微細黒色粒 反転復元 龍泉窯系鏡1頭	
	176	青磁	皿	H-13-Vla層	9.2	4.0	1.7	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	無	微細黒色粒 反転復元 龍泉窯系鏡1頭
	177	青磁	皿?	I-13-Vb層/J-12-Vla層	10.9	5.7	2.1	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	無	微細黒色粒 反転復元 龍泉窯系鏡1頭
	178	青磁	皿?	I-13-Vla	-	4.6	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	無	微細黒色粒 反転復元 龍泉窯系鏡1頭	
	179	青磁	皿?	K-12-Vb層	10.2	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	無	微細黒色粒 反転復元 龍泉窯系鏡1頭
	180	青磁	皿?	I-13-Vla層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	無	同安窯系鏡1頭
	181	中國陶器	盞?	I-12-Vla層	8.8	-	-	施釉	施釉	黃褐	灰オリーブ	無	微細黒色粒 反転復元
	182	中國陶器	盞?	I-13-Vb層	8.0	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	無	反転復元
	183	中國陶器	盞?	I-12-Vla層	12.0	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	無	微細黒色粒 反転復元 山經器内面白跡あり
	184	中國陶器	? G-13-Vb	-	-	-	施釉	施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	白色粒		
	185	中國陶器	? G-13-Vla層/H-13-Vb層/ I-13-Vb/Vn層	-	-	-	施釉	施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	無	反転復元	
	186	中國陶器	? E-12-Vb層/I-13-Vla層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	無	中國陶器水注?	
	187	中國陶器?	耳杯 H-13-Vb	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰白	無	微細黒色粒	
	188	中國陶器?	E-12/I-13-Vla層	-	-	-	施釉	施釉	暗灰黒	灰黒	黑色粒	反転復元	
	189	中國陶器?	G-13-Vla層/I-12-Vla層/ I-13-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	黑色粒	反転復元	
	190	中國陶器	鉢 J-13-Vla層	-	21.0	-	施釉	施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	白色・黒色粒	反転復元 中國陶器鉢正側	
	191	中國陶器	盞?	I-12-Vb層	-	-	-	圓輪ケツリ	圓輪ナガ	灰白	灰白	黑色・茶褐色粒	反転復元
	192	中國陶器	小盤	H-13-Vb層/I-12-Vla層	17.2	13.6	4.9	露胎	施釉	灰色	灰色~ オリーブ黄	無	微細黒色粒 反転復元 中國陶器小盤1-2a類
	193	中國陶器	小盤	I-12-Vla	-	-	-	施釉	露胎	灰白	灰白	無	中型陶器小盤1-2a類
	194	中國陶器	大口茶 瓶	K-12-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	黑	黑	無	微細黒色粒
	195	中國陶器	天目茶 碗	K-12-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	■~■	■~■	無	微細黒色粒
	196	圓底陶器?	鉢	I-12/I-13-Vb層/H-12-Va層	-	-	-	圓輪ナダ	圓輪ナダ	にぶい穀	にぶい穀	黑色粒	
	197	瓦質土器?	圓錐	G-13-Vb	-	-	-	ハケメ	ハケメ	にぶい穀	鵝卵	白色・透明粒	
	198	圓底陶器?	鉢?	I-13-Vla層	-	-	-	ナデ	圓輪ナダ	にぶい穀	にぶい穀	茶褐色粒	
	199	圓底陶器?	鉢?	I-12-Va層/I-13-Vb層/ J-12-Va層	-	-	-	圓輪ナダ	圓輪ナダ	にぶい穀	にぶい穀	茶褐色粒	
	200	圓底陶器?	杯	I-13-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰褐	灰褐	無	微細黒色粒
	201	圓底陶器?	G-13-Vla層/I-13-Vb層	-	-	-	施釉-カキ 口	施釉	黑褐	暗褐	白色粒	底部外縁付着	
	202	圓底陶器?	鉢	K-12-Vb層	-	-	-	平行タクキ	ナデ	褐灰	鵝卵	白色・茶褐色粒	
	203	支撐系統の 器?	鉢	H-13/I-12/K-12-Vb/ G-13-Vla	-	-	-	平行タクキ	同心円当 具眼	圓輪	にぶい穀	黑色・白色粒	
	204	支撐系統の 器?	J-12-Va層	-	-	-	平行タクキ	同心円当 具眼	灰黃褐	灰黃褐	白色・茶褐色粒		
	205	支撐系統の 器?	J-12/I-13-Vb層	-	-	-	平行タクキ	同心円当 具眼	浅黃褐	にぶい穀	白色粒		
	206	支撐系統の 器?	鉢	I-12-Vb/Vla層	-	-	-	平行タクキ	ナデ	にぶい穀	にぶい穀	白色粒	
	207	支撐系統の 器?	鉢	I-13-Vb層	-	-	-	平行タクキ	ナデ	黑褐	にぶい穀	白色粒	
	208	支撐系統の 器?	鉢	J-12-Va層	-	-	-	平行タクキ	ナデ	黑褐	灰黃褐	白色粒	
	209	支撐系統の 器?	鉢	J-12-Va層	-	-	-	平行タクキ	ミガキ?	淡黃	にぶい穀	白色粒	

第6表 早馬遺跡出土遺物觀察表(6)

回叢 番号	遺物 番号	種別	器種	出土遺物 地点・層位	法蓋 (cm) 口径 直径 高さ	丈様・調査		色調		黏土	備考
						外面	内裏	外面	内裏		
28	210	束縛系頭部 器?	鉢	L12-Va層	- - -	平行タキ 内裏凸出	灰~灰黒	灰黄褐	白色粒		
	211	束縛系頭部 器?	鉢	L12-Vb層	28.0	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰~灰黒	灰黄	白色粒 反転復元
	212	束縛系頭部 器?	鉢	J-13-Va層	29.4	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰オーブ 一ノ字	灰	白色粒 反転復元
	213	束縛系頭部 器?	鉢	L12-Va J-13-Vb層	28.0	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒 反転復元
	214	束縛系頭部 器?	鉢	J-13-Vb層	31.0	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒 口縁部外側自然輪 反転復元
	215	束縛系頭部 器?	鉢	J-13-Vb層	27.2	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰黄	灰黄	黑色・茶褐色粒 反転復元
	216	束縛系頭部 器?	片口鉢	J-13-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒
	217	束縛系頭部 器?	片口鉢	K12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	暗灰~灰	暗灰黒	白色粒 内外面分付着
	218	束縛系頭部 器?	鉢	L12-Va層	26.2	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒 反転復元
	219	束縛系頭部 器?	片口鉢	L13-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒
	220	束縛系頭部 器?	片口鉢	L13-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白	灰白	白色・黑色粒
	221	束縛系頭部 器?	鉢	L12-Va層	25.0	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰白	暗緑 反転復元
	222	束縛系頭部 器?	鉢	L12-Va層	28.0	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	暗緑 反転復元
	223	束縛系頭部 器?	片口鉢	J-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・茶褐色粒
	224	束縛系頭部 器?	鉢	G-13-Va層	19.8	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒 反転復元
	225	束縛系頭部 器?	片口鉢	K-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	暗緑
	226	束縛系頭部 器?	鉢	J-13-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒
	227	束縛系頭部 器?	鉢	L-13-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒
	228	束縛系頭部 器?	鉢	L-13-Vb/Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒
	229	束縛系頭部 器?	鉢	L-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒 口縁部外側自然輪
	230	束縛系頭部 器?	鉢	K-12-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	暗灰~灰	灰	白色・茶褐色 口縁部外側自然輪
29	231	束縛系頭部 器?	鉢	L-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	黑色粒
	232	束縛系頭部 器?	鉢	J-13-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	黄灰	黄灰	白色・黑色粒
	233	束縛系頭部 器?	鉢	L-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒 口縁部外側自然輪
	234	束縛系頭部 器?	鉢	J-11-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒
	235	束縛系頭部 器?	鉢	L-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	黑色粒
	236	束縛系頭部 器?	鉢	L-11-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒
	237	束縛系頭部 器?	鉢	J-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒
	238	束縛系頭部 器?	鉢	L-13-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰オーブ 一ノ字	灰	白色粒 口縁部外側自然輪
	239	束縛系頭部 器?	鉢	L-12-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白	灰白	白色・黑色粒
	240	束縛系頭部 器?	鉢	J-12-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰~灰白色	灰白	白色粒
	241	束縛系頭部 器?	鉢	G-13-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	暗灰~灰白	灰白	白色粒
	242	束縛系頭部 器?	鉢	L-13-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒
	243	束縛系頭部 器?	鉢	J-13-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色粒
	244	束縛系頭部 器?	鉢	L-13-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	白色・黑色粒
	245	束縛系頭部 器?	鉢	L-12-Va層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	暗灰~灰	灰	白色・黑色粒 口縁部外側自然輪
	246	束縛系頭部 器?	鉢	J-12-Vb層	- - -	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰黄	灰黄	黑色・茶褐色粒
	247	束縛系頭部 器?	鉢	J-12/L-13-Va層	9.0	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰	灰	暗緑 外側擦付着
	248	束縛系頭部 器?	鉢	J-12-Vb/Va層	10.8	- - -	圓軸ナデ	圓軸ナデ	灰白	灰白	白色・黑色粒 反転復元

第7表 早馬遺跡出土遺物觀察表⑦

図版 番号	遺物 番号	種別	器種	出土上遺跡 地点・層位	法蓋(cm)		文様・調整		色調		胎土	備考	
					口径	底径	裏面	内面	外側	内側			
	249	束縛系頭部 鉢	I-13-Vb層	-	9.8	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰白	灰白	白色・灰色紋	反転復元	
	250	束縛系頭部 鉢	J-12-Va層	-	9.4	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	白色紋	反転復元	
	251	束縛系頭部 鉢	G-13-Vla層	-	7.6	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	白色・黑色紋	反転復元	
	252	束縛系頭部 鉢	I-12-Vla/Vlb層	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	白色・黑色紋		
253	束縛系頭部 鉢	I-12-Vb層	-	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	黄灰	黄灰	白色紋		
254	束縛系頭部 鉢	J-12-Vb層	-	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	白色・茶褐色紋		
	255	束縛系頭部 鉢	G-13-Vla層	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	白色紋		
	256	束縛系頭部 鉢	I-12-Va層	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	白色・黑色紋		
	257	束縛系頭部 鉢	I-13-Vb層	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰	灰	灰色紋		
	258	束縛系頭部 鉢	I-13-Vla層	-	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰・灰黃	灰・灰黃	白色・茶褐色紋		
	259	十輪器	杯	I-11-Vla層	15.2	9.6	2.9	四軸ナデ	四軸ナデ	灰黃褐	灰黃褐	黑色紋	反転復元 底部糸切
	260	土師器	杯	I-12-Vla層/I-13-Va層	14.2	7.0	2.8	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	茶褐色	反転復元 底部糸切
	261	土師器	杯	J-12-Vla層	-	9.5	-	四軸ナデ →ナデ	四軸ナデ →ナデ	浅青褐	浅青褐	茶褐色紋	反転復元 底部糸切 板状直痕
	262	土師器	小皿	I-12-Vla層	9.8	7.8	1.5	四軸ナデ	四軸ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	茶褐色	反転復元 底部糸切
	263	土師器	小皿	K-12-Vla層	10.2	8.8	1.5	四軸ナデ →ナデ	四軸ナデ →ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	黑色紋	反転復元 底部糸切 板状直痕
	264	土師器	小皿	I-11-Vla層	9.6	7.4	1.5	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	黑色・茶褐色紋	反転復元 底部糸切
	265	土師器	小皿	J-11-Vla層	10.3	8.0	1.5	四軸ナデ	ナデ	灰色	灰色	稍顯	反転復元 底部糸切
	266	土師器	小皿	I-13-Vla層	9.8	7.4	1.1	四軸ナデ	四軸ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	稍顯	反転復元 底部糸切
	267	土師器	小皿	J-12-Vla層	9.4	7.4	1.3	四軸ナデ	四軸ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	稍顯	反転復元 底部糸切 板状直痕
	268	土師器	小皿	K-12-Vb層	9.2	7.6	1.1	四軸ナデ	四軸ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	白色紋	反転復元 板状直痕
30	269	十輪器	小皿	J-12-Vla層	7.7	6.0	1.0	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	黑色紋	反転復元 底部糸切 内外黒鉄 分合層
	270	土師器	小皿	J-12-Vla層	8.5	6.6	1.1	四軸ナデ	四軸ナデ →ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	茶褐色紋	反転復元 底部糸切 板状直痕
	271	土師器	小皿	J-12-Vla層	8.4	6.8	1.1	四軸ナデ	四軸ナデ	灰白	灰白	黑色紋	反転復元 底部糸切 板状直痕
	272	土師器	小皿	J-13-Vla層	8.2	6.0	1.4	四軸ナデ	四軸ナデ	にない・黄褐	にない・黄褐	茶褐色	反転復元 底部糸切 板状直痕
	273	土師器	小皿	I-11-Vla層	9.4	7.6	1.2	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	茶褐色	反転復元 全体的に磨耗
	274	土師器	杯	I-11-Vla層	-	9.0	-	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	灰黃褐	黑色紋	反転復元 底部糸切
	275	土師器	杯	I-12-Vla層	-	9.0	-	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	黑色紋	反転復元 全体的に磨耗
	276	土師器	小皿	I-13-Vb/Vla層	-	6.0	-	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	黑色紋	反転復元 全体的に磨耗
	277	土師器	小皿	D-15-Vla層	-	6.6	-	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	茶褐色	全體的に磨耗
	278	諸石製品	石鍋	I-12-Vla層	-	-	-	-	-	-	-	外面泥付着	
	279	諸石製品	石鍋	I-13-Vla層	-	-	-	-	-	-	-	外面漆付着	
	288	土師器	小皿	SB14-39b層	9.0	7.3	1.4	四軸ナデ →ナデ	四軸ナデ →ナデ	浅黃褐	浅黃褐	茶褐色紋	底部糸切 板状直痕
	289	土師器	杯	SD16-2層	-	9.0	-	四軸ナデ	四軸ナデ	浅黃褐	浅黃褐	黑色紋	底部糸切 板状直痕
	290	青磁	碗	SD15-1/2層	17.2	-	-	施釉	施釉	オーリーブ灰	オーリーブ灰	深褐色	反転復元 龍泉窯系碗I-2類
	291	青磁	碗	SD15-1層	16.8	-	-	施釉	施釉	灰オーリーブ	灰オーリーブ	粗粒	反転復元 龍泉窯系碗I-4類
	292	青磁	碗	SD15-2T-2層	-	-	-	施釉	施釉	明オーリーブ灰	明オーリーブ灰	粗粒	龍泉窯系碗II-b類
	293	青磁	碗	SD15-1層	-	-	-	施釉	施釉	オーリーブ灰	オーリーブ灰	粗粒	龍泉窯系碗II-b類
	294	青磁	碗	SD15-1層	-	-	-	施釉	施釉	オーリーブ灰	オーリーブ灰	粗粒	同安窯系碗I-1b類
36	295	土師器	小皿	SD15-4層	9.4	7.4	1.3	四軸ナデ	四軸ナデ にない・黄褐	にない・黄褐	黑色紋	反転復元 底部糸切 板状直痕	

第8表 早馬遺跡出土遺物觀察表⑧

遺物 番号	種別	器種	出土遺物 地點・層位	寸法 (cm)		文律・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	高さ	外輪	内面	外輪		
296	土師器	小瓶	SD15-1橋	8.6	7.0	1.2	回転ナデ	回転ナデ	にせい黄緑	黒色粒	反転復元 底部系切
297	土師器	小瓶	SD15-1層	7.0	6.0	1.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	反転復元 板状圧痕
298	土師器	杯	SD15-1橋	12.0	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	黒色粒
299	土師器	杯	SD15-1Tr	-	9.0	-	ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	反転復元 底部系切
300	土師器	小皿	SD15-1層	-	6.8	-	四軸ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	茶褐色粒
301	土師器	小瓶	SD15-2/3層	-	6.6	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	反転復元 板状圧痕
36	東浦系須恵器	鉢	SD15-4層	30.8	-	-	四軸ナデ	四軸ナデ	灰暗-灰	灰	白色粒
		中型陶器	壺?	SD15-1層	-	-	施釉	施釉	暗オーリー	暗オーリー	黒色粒
		碗	SD19-2層	-	-	-	施釉	施釉-霧駆	灰オーリー	鶴紋	同安寺系同型?
		杯	SD19-1層/G-30Tr	11.4	7.0	3.6	回転ナデ	回転ナデ	灰白	浅黄緑	茶褐色粒
		小瓶	SD19-1層/a/B-30層	7.5	5.4	1.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	にせい-灰	黑色-茶褐色粒
		土師器	杯	SD19-2層	-	7.7	-	四軸ナデ	回転ナデ	浅黄緑	灰白
		土師器	小皿	SD19-2層	-	7.0	-	回転ナデ	四軸ナデ	淡橙	淡橙
		陶器?	?	SD19-2層	-	6.2	-	ナデ	回転ナデ	板	板
		東浦系須恵器	鉢	SD19-1層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰
38	吉備	碗	SD20-11層	16.6	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	鐵錫黒色粒
		土師器	小鉢	SD20-7層	8.9	7.0	1.5	磨耗	磨耗	にせい-灰	にせい-灰
		青磁	碗	SD20-1活	-	-	-	施釉	施釉	灰オーリー	灰オーリー
		須恵器?	?	SD20-1活	-	-	-	施釉	施釉	同州系?	
		須恵器	?	SD20-1活	-	-	-	施釉	施釉	灰	
		青磁	碗	SD20-2層/J-23-Via層/ K-23-Via層	17.6	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰
		青磁	碗	SD20-1層	-	-	-	施釉	施釉	明銀灰	明銀灰
		青磁	碗	SD20-1層	-	6.7	-	施釉	施釉	灰オーリー	灰オーリー
		青磁	鉢	SD20-3層	-	6.0	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰
39	土師器	杯	SD25-3層	12.0	8.8	3.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	黑色-茶褐色粒
		土師器	杯	SD25-1層	12.0	9.3	3.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白
		土師器	杯	SD25-3層	-	-	2.3	回転ナデ	回転ナデ	灰白	黒色粒
		土師器	小皿	SD25-1層	9.4	6.6	1.5	回転ナデ	回転ナデ	にせい-灰	にせい-灰
		土師器	小皿	SD25-1層	7.8	5.8	1.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑
		土師器	小皿	SD25-3層	-	-	1.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白	黒色粒
		土師器	杯	SD25-3層/SD26-1層/ SD26-26Tr	-	9.0	-	西脇ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑
		土師器	杯	SD25-1層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	SD25-1層	SD25-1層
		東浦系須恵器 片口	J-23-Via層/SD25-1層/ J-23-Via層	27.8	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰-灰白	灰白	白色-黒色粒
33	土師器	高杯	SD26-2	-	-	-	ガキ	ナデ	浅黄緑	にせい-灰	黒色-透明粒
		土師器	鉢?	SD26-1層	-	5.6	-	皆純	ナカメ→ナデ	にせい-黄緑	黒色-白色粒-角 四石
		白磁	碗	SD26-1層	15.6	-	-	施釉-露胎	施釉	灰白	微細黒色粒
		白磁	碗	SD26-1層	18.8	-	-	施釉	施釉	灰白	微細黒色粒
		白磁	碗	SD26-1層	-	-	-	施釉-露胎	施釉	灰白	微細黒色粒
		白磁	碗	SD26-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	白磁施Vorberg 型 菊花あみ
		白磁	碗	SD26-1層	-	5.9	-	施釉-露胎	施釉	灰白	白磁施Vorberg 型

第9表 早馬遺跡出土遺物觀察表⑨

遺物 番号	遺物 名	種別	器種	出土遺構 地点・層位	法量 (cm) 口径 底径 高さ	文様・調修		色調		胎土	備考		
						外面	内面	外面	内面				
338	吉縄	碗	SD26-1層	15.2	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	褐鐵	反転復元 亂象系碗13類	
339	青縄	碗	SD26-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	褐鐵	亂象系碗1類	
340	青縄	碗	SD26-1層/1-12-Vib層	16.4	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	褐鐵	反転復元 亂象系碗1-2類	
341	青縄	碗	SD26-1層	15.8	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	褐鐵	反転復元 亂象系碗1-4類	
342	青縄	碗	SD26-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	褐鐵	亂象系碗1類	
343	青縄	碗	SD26-1層	-	5.2	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	褐鐵	亂象系碗1類	
344	吉縄	碗	SD26-1層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	褐鐵	亂象系碗1類	
345	青縄	碗	SD26-1層	-	5.4	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	褐鐵	亂象系碗1類	
346	上彌器	小皿	SD26-1層	9.8	8.3	1.4	円転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	灰青褐	黑色粒	反転復元 底部糸切 板状圧痕	
347	十輪器	小皿	SD26-1層	8.8	7.8	1.6	円転ナデ	圓転ナデ	灰白	灰白	褐鐵	反転復元 底部糸切 板状圧痕	
348	土師器	小皿	SD26-1層	7.2	5.6	1.4	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	反転復元 底部糸切 板状圧痕	
349	土師器	小皿	SD26-1層	8.7	7.0	1.3	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	反転復元 底部糸切 板状圧痕	
350	土師器	小皿	SD26-1層	8.3	6.3	1.3	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	反転復元 底部糸切	
351	土師器	小皿	SD26-1層	7.2	5.8	1.1	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	黑色粒	反転復元 底部糸切	
352	土師器	杯	SD26-1層	-	8.0	-	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	反転復元 底部磨耗	
353	土師器	杯	SD26-1層	-	7.6	-	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	反転復元 底部糸切	
354	土師器	杯	SD26-1層	-	9.1	-	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	茶褐色粒	反転復元 底部糸切	
355	土師器	杯	SD26-1層	-	8.5	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰白	灰白	茶褐色粒	反転復元 亂象ヘラ切	
356	土師器	杯	SD26-1層/J-24-Vib層	-	7.5	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰白	にぶい黄褐	黑色・茶褐色粒	底部無切 板状圧痕	
357	土師器	小皿	SD26-1層	-	7.6	-	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	茶褐色粒	反転復元 底部糸切	
358	土師器	小皿	SD26-1層	-	7.2	-	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	反転復元 底部無切	
359	土師器	杯	SD26-1層	-	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	茶褐色粒	底部無切 板状圧痕	
360	土師器	杯?	SD26-2層	-	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	黑色粒	底無切 板状圧痕	
361	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	15.6	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰・底白	灰白	白色	以転復元	
362	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰	灰	白色	底無切	
363	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰	灰白	白色・黑色粒		
364	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	11.6	-	圓転ナデ	四転ナデ	灰	灰	白色・褐色粒	反転復元	
365	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰	灰	白色		
366	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	-	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰・底白	暗灰白	白色粒		
367	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	9.6	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰	灰	白色・褐色粒	反転復元	
368	東播系須恵器	鉢	SD26-1層	-	9.0	-	圓転ナデ	圓転ナデ	灰	灰	白色・褐色粒	底部糸切	
369	中国陶器	小盤	SD26-1層	-	-	-	ナデ	施釉	にぶい黄	オリーブ灰	白色粒		
370	土師器	杯	SC23-1層	11.9	8.5	3.2	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	黑色粒	底部糸切	
371	土師器	杯	SC23-1層/G-24-Vib層	11.6	8.0	3.3	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	黑色・茶褐色粒	反転復元 底部糸切	
372	土師器	小皿	SC23-1層	8.0	6.6	1.4	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	茶褐色粒	底部糸切	
373	土師器	小皿	SC23-1層	8.5	6.3	1.4	圓転ナデ	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	茶褐色粒	底部糸切	
374	土師器	小皿	SC23-1層	8.3	6.1	1.7	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	黑色粒	底部糸切 板状圧痕	
375	土師器	小皿	SC23-1層	8.9	7.5	1.2	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい黄	にぶい黄	白色粒	反転復元 底部糸切	
43	376	土師器	杯	SC28-3層/1-24-Vib層	15.3	10.0	4.0	圓転ナデ	圓転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	茶褐色粒	底部糸切 板状圧痕

第10表 早馬遺跡出土遺物觀察表⑩

図版 番号	遺物 番号	種別	器種	出土直積 地點・層位		法量 (cm)		文様・調整		色調		断土	備考	
				L	W	H		外面	里面	外縁	内縁			
	377	土師器	小皿	SC38-3層		8.7	5.7	1.7	四輪ナデ	陶軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	茶褐色	底部赤切
	378	土師器	小皿	SC38-3層		8.6	7.0	1.6	四輪ナデ	陶軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	茶褐色	底部赤切 板状痕
	379	土師器	小皿	SC38-3層		9.0	6.8	1.5	四輪ナデ	陶軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	黑色	底部赤切 板状痕
	380	土師器	小皿	SC38-3層		8.7	6.8	1.6	四輪ナデ	陶軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	茶褐色	底部赤切
43	382	青磁	碗	SC39-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	暗緑	龍泉窑系青Vb類	
	383	青磁	碗	SC39-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	暗緑	龍泉窑系青Vb類	
	384	青磁	碗	SC42-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	明オリーブ灰	明オリーブ灰	微纖黑色	-	
	385	土師器	小皿	SC42-1層	8.2	6.2	1.4	四輪ナデ	陶軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	稍緑	反転復元 底部赤切	
	386	土師器	杯	SC47pit/H-24-Vla層	13.0	8.2	2.9	四輪ナデ	陶軸ナデ	浅黄緑	浅黄緑	茶褐色	反転復元 底部赤切 全体的に 黒斑	
	387	縄文土器	漆鉢	J-35-層	-	-	-	日本ガ	丁寧なナデ	結奈面	にぬ・開	灰色・透明・茶褐色 色記・剣呂石	縄文時代晚期	
	388	縄文土器	漆鉢	F-26-Vb層	-	-	-	ナデ	ナデ	にぬ・穂	にぬ・穂	黑色・茶褐色 色記・剣呂石	縄文時代晚期 外部剥着	
	389	弥生土器	甕	E-21-Vb層	-	-	-	ナデハケメ	ナデ	にぬ・黄緑	にぬ・黄緑	白色・茶褐色	弥生時代前期(下城式)	
	390	弥生土器	甕	H-36-Vb層	-	-	-	ナデ	ナデ	にぬ・黄緑	浅黄緑	黒色・白色・灰 色・茶褐色	弥生時代前期(下城式)	
	391	弥生土器	甕	E-23-Vb層	-	-	-	ナデハケメ	ナデ	浅黄緑	にぬ・黄緑	白色・赤褐色	弥生時代前期(下城式)	
47	392	弥生土器	甕	J-23-Vb層	-	5.0	-	日本ガ	ナデ・オサ エ	にぬ・橙	赤褐	白色	周庭赤	
	393	弥生土器	甕	D-19-Vb層	-	3.5	-	ナデ	ナデ・網落	穂	浅黄緑	黑色・赤色・茶褐色 色記	弥生時代後期 黑庭赤	
	394	弥生土器	甕	K-34-Vb層	-	-	-	ナデ	ナデ	にぬ・穂	にぬ・穂	黑色・茶褐色	外側網落	
	395	弥生土器	甕	J-23-Vb層	-	-	-	ナデ・ミガキ	ナデ	にぬ・穂	にぬ・穂	白色・赤褐色	-	
	396	弥生土器	甕	J-23/J-24-Vb層	5.4	-	-	ナデ・ミガキ	ナデ	にぬ・黄緑	にぬ・穂	黑色・白色・赤褐色	弥生時代中期後～後期前半	
	397	土師器	甕	D-19-Vla層	-	-	-	ナデ	ハクメ	灰色	浅黄緑	白色・透明・茶褐色 色記	古墳時代	
	404	白磁	碗	D-18-IV層	16.8	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁碗IV類	
	405	白磁	碗	D-18-IV層	14.7	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁碗IV類	
	406	白磁	碗	J-23-1層	17.8	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁碗V類	
	407	白磁	碗	K-24-Tr-N-Vla層	14.4	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁碗V類	
	408	白磁	碗	J-24-SK/C-13-Vla層	16.6	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁碗V-2a類?	
	409	白磁	碗	E-21-Va層	16.4	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	稍緑	反転復元 白磁碗V類	
	410	白磁	碗	M-34-IVb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁碗V類	
	411	白磁	碗	J-35-Tr-1-1層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁碗V類	
	412	白磁	碗	I-35-IVb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁碗V類	
48	413	白磁	碗	H-24-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁碗?	
	414	白磁	碗	H-24-Va層	-	-	-	施釉	施釉	明緑灰	明緑灰	微纖黑色	-	
	415	白磁	皿	L-24-Vla層	9.9	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁皿II類	
	416	白磁	皿	H-24-Vb層	10.8	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁皿II類	
	417	白磁	皿	H-24-Vla層	10.0	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	反転復元 白磁皿II類	
	418	白磁	皿	D-18-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁皿II類	
	419	白磁	皿	H-24-Vb層	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	稍緑	白磁皿II類	
	420	白磁	皿	E-21-Vb層	-	4.3	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁皿II類?	
	421	白磁	皿	F-27-II層	9.8	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色	反転復元 近世?	
	422	白磁	皿	K-34-Vla層	-	6.4	-	施釉・露胎	施釉	灰白	灰白	微纖黑色	白磁皿II類	

第11表 早馬遺跡出土遺物觀察表⑪

遺物 番号	種別	器種	出土遺構 地点・層位	法益(cm)		文様・陶製		色調		胎土	備考	
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面			
423	白磁	碗	E-21-Na層	-	6.8	-	施釉・高筋 施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色紋	白磁碗V類?
424	白磁	碗	F-23-1層	-	6.3	-	施釉・高筋 施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色紋	白磁碗?
425	青磁	碗	D-19-Nb層	15.6	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	反転青元 龍泉窯系碗口類
426	青磁	碗	H-24-Na層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
427	青磁	碗	L-34-Nb層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
428	青磁	碗	E-21-N層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
429	青磁	碗	H-24-Nb層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
430	青磁	碗	E-22-N層	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
431	青磁	碗	F-27-Na層	-	7.2	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	鈎鉢	反転青元 龍泉窯系碗口類
432	青磁	碗	D-19-N層	16.0	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	鈎鉢	反転青元 龍泉窯系碗口類
433	青磁	碗	G24-Nb層	15.6	-	-	施釉	施釉	明オリーブ	明オリーブ	鈎鉢	反転青元 龍泉窯系碗口類
434	青磁	碗	J-34-Nb層	16.6	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	鈎鉢	反転青元 龍泉窯系碗口類
435	青磁	碗	H-24-Nb層	16.2	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	微纖黑色紋	反転青元 龍泉窯系碗口類
436	青磁	碗	J-23-1層	14.8	-	-	施釉	施釉	明オリーブ	明オリーブ	鈎鉢	反転青元 龍泉窯系碗口類
437	青磁	碗	J-23-1層	16.4	-	-	施釉	施釉	明緑灰	明緑灰	微纖黑色紋	反転青元 龍泉窯系碗口類
438	青磁	碗	H-24-Nb/Via層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
439	青磁	碗	G-27-Na層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	鈎鉢	龍泉窯系碗口類?
440	青磁	碗	F-26-1層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
441	青磁	碗	H-24-Nb層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微纖黑色紋	龍泉窯系碗口類
442	青磁	碗	G-25-Nb層	15.6	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	鈎鉢	反転青元 龍泉窯系碗口類
443	青磁	皿	E-21-N層	11.6	-	-	施釉・高筋	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	鈎鉢	反転青元 皿?
444	青磁	皿	E-21-有層	-	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微纖黑色紋	盤?
445	中国陶器	甕	I-24-Via層	11.0	-	-	露胎	露胎	灰色	灰色	微纖黑色紋	口縁部剥離あり
446	中国陶器	甕?	H-24-Via層	-	-	-	施釉	施釉	暗緑青	にい青	熱板	中国陶器甕? 口縁部内面剥離あり
447	中国陶器?	?	I-24-Via層	-	-	-	露胎	露胎	灰白	オリーブ	鈎鉢	
448	中国陶器	甕	I-24-Via層	-	-	-	タクキ→ナ ダ	回転ナダ	にい青	灰青	白色・茶褐色紋	常滑燒
449	中国陶器	甕	D-19-N層	-	-	-	タクキ	回転ナダ	灰白	灰青	白色・茶褐色紋	常滑燒
450	中国陶器	甕	K-23-Via層	-	-	-	回転ナダ	回転ナダ	にい青	灰青	白色紋	常滑燒
451	中国陶器	甕	J-24-Via層	-	16.0	-	ナダ	ナダ	にい青	灰青	白色・茶褐色紋	常滑燒
452	中国陶器	甕	L-34-Nb層	-	-	-	ナダ	自然輪	周灰	周灰	白色紋	常滑燒
453	中国陶器	甕	M-34-Nb層/I-35-Nb層	-	-	-	回転ナダ	回転ナダ	灰青	灰青	白色紋	常滑燒
454	中国陶器	甕	K-34-Tr-N層	-	-	-	四軸ナダ	回転ナダ	灰青	灰青	白色紋	常滑燒
455	中国陶器	甕	J-34-Na層	11.4	-	-	施釉	施釉	にい青	にい青	微纖黑色紋	
446	白磁?	碗	J/K-24	-	-	-	施釉	施釉	灰白	灰白	微纖黑色紋	白磁?
457	陶器	甕?	I-24-Tr-N~Via層	-	8.0	-	施釉	施釉	深青	深青	微纖白色紋	袋裝燒?
458	陶器	甕?	C-31-N層	-	-	-	施釉	施釉	黑青	黑青	微纖白色紋	袋裝燒?
459	瓦質陶器	甕	K-34-Nb層	28.0	-	-	磨耗	調蓄	黃灰	灰白	單色紋	反転青元
460	灰陶器	甕	G-28-Vb層	-	-	-	平行タクキ ナダ	平行タクキ ナダ	灰色	褐色	白色・茶褐色紋	やや土質質
461	須恵器	甕	F-29-Na層	-	-	-	格子タクキ ナダ	平行タクキ ナダ	黃灰	灰白	白色紋	

第12表 早馬遺跡出土遺物觀察表(2)

段別 番号	遺物 番号	種別	器種	出土遺物 地点・層位	法蓋 (cm) 口径 直径 厚さ	文様・調査		色調		胎土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
	462	須恵器	壺	G-23-Vla層	-	-	格子目クラ シ	内心円出 具板	暗青	青灰	白色粒	
	463	東漢系須恵器	片口鋤	G-24-Vlb層/F-24-Vlb層	29.6	-	四輪ナデ	四輪ナデ	暗灰～灰黃	灰灰	白色・黑色・灰色 粒	口縁部外面自然釉 反転復元
	464	東漢系須恵器	片口鋤	G-24-Vlb層	26.0	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色・混色粒	口縁部外面自然釉 反転復元
	465	東漢系須恵器	鉢	E-21-Vb層	27.5	-	四輪ナデ	四輪ナデ	暗灰～黄灰	灰	白色・灰色粒	口縁部外面自然釉 反転復元
	466	東漢系須恵器	鉢	E-19-Vd層	23.5	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰黃	灰黃	白色・灰色粒	反転復元
	467	東漢系須恵器	鉢	H-24-Vb層	24.0	-	四輪ナデ	四輪ナデ	黄灰～灰黃	灰黃	白色・黑色粒	反転復元
	468	東漢系須恵器	鉢	J-23-Vb層	26.8	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰黃	灰黃	白色・黑色粒	反転復元
	469	東漢系須恵器	鉢	J-23-Va層	26.0	-	四輪ナデ	四輪ナデ	暗灰～灰	灰	白色粒	口縁部外側自然釉 反転復元
	470	東漢系須恵器	鉢	M-34-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色・黑色粒	口縁部外面自然釉
50	471	東漢系須恵器	鉢	F-27-Va層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰～灰黃	黃灰	白色・黑色粒	口縁部外面自然釉
	472	東漢系須恵器	鉢	H-24-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色粒	
	473	東漢系須恵器	鉢	H-24-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色・透明粒	口縁部外面自然釉
	474	東漢系須恵器	鉢	J-24-Va層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色粒	
	475	東漢系須恵器	鉢	E-22-Va層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	黃灰	黃灰	白色・黑色粒	
	476	東漢系須恵器	鉢	J-23-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	ヨリーフ灰 一灰	ヨリーフ灰 一灰	白色粒	口縁部外面自然釉 反転復元
	477	東漢系須恵器	鉢	E-22-Va層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	黃灰	黃灰	黑色粒	
	478	東漢系須恵器	鉢	L-34-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	黃灰	黃灰	褐色	口縁部外面自然釉
	479	東漢系須恵器	鉢	H-24-Va層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	暗灰～灰	灰	白色粒	
	480	東漢系須恵器	片口鋤	G-25-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰白	灰白	白色・黑色粒	
	481	東漢系須恵器	鉢	G-33-Vla層/H-33-Vla層	-	9.0	四輪ナデ	四輪ナデ	灰白	灰白	白色・黑色粒	底部余切
	482	東漢系須恵器	鉢	G-25-Vb	-	9.6	四輪ナデ	四輪ナデ	灰白	灰白	白色・黑色粒	底部余切
	483	東漢系須恵器	鉢	I-24-Va層	-	10.0	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色粒	
	484	東漢系須恵器	鉢	M-34-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰	灰	白色・茶褐色粒	
	485	東漢系須恵器	鉢	H-24-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	黃灰	黃灰	白色・黑色粒	
	486	東漢系須恵器	鉢	H-24-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	黃灰	黃灰	白色・黑色粒	底部余切
	487	東漢系須恵器	鉢	G-24-Vb層	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	灰白	灰白	黑色粒	底部余切
	488	染付	碗?	G-31-Vf層	-	-	施釉・兼竹 け	施釉	灰白	灰白	微細黑色粒	
	489	染付	碗?	G-31-Vf層	-	-	施釉・兼竹 け	施釉・露胎	灰白	灰白	微細黑色粒	
	490	染付	碗?	H-24-Vf層	-	-	施釉・兼竹 け	施釉	灰白	灰白	微細黑色粒	
	491	土師器	杯	G-24-Vb層/H-24-Vf層	11.2	8.6	2.5 四輪ナデ	四輪ナデ →ナデ	浅青緑	浅青緑	茶褐色粒	反転復元 底部余切 板状化 後 内面見込み倒伏有
	492	土師器	杯	H-24-Vb	13.9	9.6	3.0 四輪ナデ	四輪ナデ	灰白	灰白	白色・茶褐色粒	反転復元 成型余切
	493	土師器	杯	H-24-Vb層/T-24-Vf層	9.8	7.8	2.1 四輪ナデ	四輪ナデ →ナデ	灰白	灰白	黑色粒	反転復元
51	494	土師器	杯	H-24-W	12.2	-	四輪ナデ	四輪ナデ	にじい・白	にじい・白	茶褐色粒	反転復元
	495	土師器	杯	G-24-Vla層	10.0	-	四輪ナデ	四輪ナデ	にじい・白	にじい・白	稍糊	反転復元
	496	土師器	杯	H-24-Vla層	13.6	-	四輪ナデ	四輪ナデ	浅青緑	浅青緑	黑色粒	反転復元
	497	土師器	小瓶	H-24-Vla層	8.5	6.6	1.5 四輪ナデ	四輪ナデ	浅青緑	浅青緑	茶褐色粒	反転復元 底部余切
	498	土師器	小瓶	H-24-Vb層	10.2	7.6	1.3 四輪ナデ	四輪ナデ	にじい・白	にじい・白	茶褐色粒	反転復元 底部余切 板状化
	499	土師器	小瓶	H-24-Vla層/Tr-24-Vf層	9.2	7.4	1.1 滅乳	滅乳	浅青緑	浅青緑	茶褐色粒	反転復元 底部余切
	500	土師器	小瓶	G-25-Vb	8.0	6.4	1.1 四輪ナデ	四輪ナデ	灰白	灰白	茶褐色粒	反転復元 板状化 全体の 壊耗

第13表 早周遺跡出土遺物觀察表⑩

部類 番号	遺物 多号	種別	器種	出土遺跡 地点・層位	法量 (cm)		文様・調査		色調		胎土	備考		
					口径	底径	器高	外観	内面	外面	内面			
S1	501	土師器	小皿	I-24-II層	-	8.1	6.3	1.6	圓板ナメ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色・黑色粒	反転復元 底部系切	
	502	土師器	小皿	I-24-Nb層	-	7.8	6.6	1.5	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	茶褐色粒	底部系切 板状圧痕
	503	土師器	小皿	G-24-Nb層/M-24-N層	7.8	6.0	1.3	唐銘	磨耗	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 全体的に磨耗	
	504	土師器	小皿	H-24-Nb層	-	8.8	7.0	1.6	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	黑色粒	反転復元 板状圧痕
	505	土師器	小皿	H-24-Nb層	-	7.6	6.0	1.2	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 蓋部系切
	506	土師器	小皿	H-24-Na/Nb層	8.4	7.0	1.4	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	黑色粒	反転復元 板状圧痕	
	507	土師器	小皿	H-24-Nb層	-	7.5	6.2	1.2	磨耗	磨耗	灰白	灰白	茶褐色粒	反転復元 全体的に磨耗
	508	土師器	小皿	H-24-Nb層	-	6.5	5.2	1.6	磨耗	磨耗	灰白	灰白	茶褐色粒	反転復元 全体的に磨耗
	509	土師器	小皿	H-24-Nb層/I-24-Tr-N-V層	7.6	6.2	1.4	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	板状圧痕	
	510	土師器	杯	J-24-II	-	9.0	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 底部系切
S2	511	土師器	杯	G-24-Nb層/I-24-N層	-	8.0	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 底部磨耗
	512	土師器	杯	H-24-Nb層	-	9.4	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 底部系切 板状圧痕
	513	土師器	杯	G-24-Nb層/I-24-Va層	-	8.2	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 底部系切 板状圧痕
	514	土師器	小皿	H-24-Nb層/T-24-N-V層	-	5.2	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	黑色粒	底部系切 板状圧痕
	515	土師器	杯	H-24-Nb層/T-24-N-V層	-	7.8	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	黑色粒	反転復元
	516	土師器	杯	H-24-Nb層	-	8.0	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 底部系切
	517	土師器	杯	H-24-Nb/Va層	-	8.0	-	-	圓板ナメ	→ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	黑色粒	底部系切 傷状圧痕
	518	土師器	小皿	H-24-Nb/Va層	-	5.4	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	茶褐色粒	反転復元 板状圧痕
	519	土師器	小皿	C-24-Nb層	-	6.2	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	茶褐色粒	反転復元 底部系切 板状圧痕
	520	土師器	杯	H-24-Na/I-24-N層	-	8.0	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	にぶい	にぶい	茶褐色粒	反転復元 底部系切
	521	土師器	小皿	H-24-Nb層	-	4.5	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	にぶい	にぶい	黑色・透明粒	反転復元 底部系切
	522	土師器	杯	J-23-Va層	-	-	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	茶褐色粒	底部系切 板状圧痕
	523	土師器	杯?	H-24-Nb層	-	-	-	-	圓板ナメ	圓板ナメ	灰白	灰白	錯就	板状圧痕
	524	土師器	小皿	H-24-N層	-	-	-	-	磨耗	磨耗	灰白	灰白	黑色	板状圧痕
	525	土師器	杯?	H-24-Na層	-	-	-	-	磨耗	磨耗	灰白	灰白	錯就	内面黒色物質付着
	526	滑石製品	石器	I-24-Nb層	16.6	-	-	-	-	-	-	-	反転復元 外面黒色物質付着	

第14表 早馬遺跡出土遺物観察表④

回収 番号	遺物 番号	種別器種	出土遺構地点	法量				黏土	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
14	2	粘土塊	SB09 P1・1層	7.6	5.3	2.1	(500.0)	-	黏土に葉状の組織を多く含む
	21	磨石	SD07・床面	(9.6)	5.8	4.6	(500.0)	砂岩	
	22	磨石	SD07・床面	(13.3)	(3.8)	(6.2)	(280.0)	砂岩	
18	46	粘土塊	SD27・1層	8.0	7.4	3.1	110.1	-	黏土に葉状の組織を多く含む
	48	火打ち石	SC17・1層	3.9	1.3	2.0	15.8	砂岩質の強い石英	…揮放跡の付着あり
	73	石燃	C-12・Vb層	13.9	10.5	1.8	360.0	輝石安山岩	
24	74	石燃	B-11・Vb層	9.9	8.1	1.6	124.1	砂岩	
	75	剥片石器	H-13・Vb層	3.9	6.7	0.8	24.3	輝石安山岩	
	76	剥片石器	E-4・Vb層	6.8	6.6	1.2	71.7	砂岩	
	77	剥片石器	E-4・Vb層	7.0	4.8	1.1	35.6	砂岩	
	78	磨製石器	I-13・Vla層	5.0	7.7	0.6	38.7	頁岩	
	79	剥片	L-10・Vla層	1.5	1.6	0.4	1.0	黑曜石	
	80	台石	J-13・Vla層	13.9	11.2	4.2	760.0	砂岩	
	81	火打ち石	G-13・Vb層	4.2	2.0	1.7	23.0	(大川原系) チャート	川原石か輝原中より採取
30	280	滑石製品	H-13・Vb層	(3.5)	(7.1)	(0.5)	(27.5)	貫通孔あり	
	281	滑石製品	I-11・Vla層	2.6	2.2	1.3	12.0	滑石	
	282	滑石製品	G-13・Vb層	4.3	2.1	2.0	29.5	滑石	
	283	鉛石製品	J-13・Vb層	6.5	3.6	2.1	16.7	鉛石	
	284	鉄製品	I-12・Vla層	(3.6)	(1.8)	(0.4)	(5.1)	-	鉄錠
	285	鉄製品	J-12・IV層	(2.8)	(2.0)	(0.3)	(3.9)	-	用途不明
	286	鉄滓	I-12・Vla層	5.6	4.3	2.6	49.3	-	
	287	銅製品?	H-13・Vb層	3.2	1.9	1.2	14.7	-	貫通孔あり
36	304	鉛石製品	SD15 1'rr・一括	7.5	4.2	1.6	27.5	鉛石	
38	314	鉛石製品	SD20・一括	5.0	2.8	1.1	10.5	鉛石	
	315	鉛石	SD20・4層	10.3	8.6	4.3	630.0	砂岩	
43	381	鉄製品	SC38・最下層	(15.0)	2.0	(0.7)	(46.8)	-	鉄錠?
47	398	打制石斧	H-24・Vb層	20.7	7.2	2.0	280.0	ホルンフェルス	
	399	剥片石器	H-13・Vb層	4.5	5.9	0.6	22.0	輝石安山岩	
	400	磨石	H-24・Vb層	16.4	9.5	5.1	960.0	砂岩	
	401	研石	H-24・Vla層	(5.0)	3.6	2.7	56.4	天草陶石	
	402	研石	H-24・Vla層	(6.1)	3.7	1.9	58.5	天草陶石	
	403	台石	K-23・Vla層	13.2	11.1	5.1	1130.0	砂岩	
	527	滑石製品	E-18・Vb層	4.4	2.5	1.6	32.0	滑石	
	528	土器底	J/K-24・折	1.8	1.7	0.7	2.1	-	土師器軸用
52	529	鉄製品	G-30・IV層	(6.5)	(2.4)	(0.2)	(7.9)	-	用途不明
	530	鉄製品	I-24・IV・V層	(3.6)	(2.2)	(0.3)	(6.5)	-	用途不明
	531	鉄製品	D-18・Vb層	(1.9)	(3.9)	(0.4)	(4.8)	-	用途不明
	532	鉄滓	D-18・IV層	10.7	10.0	5.0	300.0	-	
	533	鉛石製品	I-34・II層	31.8	30.3	10.9	3020.0	鉛石	

第4章 自然科学分析

第1節 早馬遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山、2000）。

2. 試料

試料は、早馬遺跡の H-13 区、J-24 区、J-35 区の 3 地点から採取された計 12 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し 直径約 40 μm のガラスピーズを約 0.02 g 添加（電子分析天秤により 0.1 mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10 - 5 g）をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は 2.94（種実重は 1.03）、ヒエ属（ヒエ）は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、タケ亜科（ネザサ節）は 0.48 である。

4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な 6 分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 15 表および第 53 ~ 55 図に示した。図版 2 に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプランツ・オバールが試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) H-13区（第53図）

IVb層（試料1）からVII層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、IVb層（試料1～3）およびVIa層（試料4、5）からイネが検出された。このうち、桜島文明軽石直下のIVb層（試料1～3）では密度が11,400～14,000個/gとかなり高い値であり、VIa層（試料4）でも6,900個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) J-24区（第54図）

桜島文明軽石直下のVIa層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが6,700個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3) J-35区（第55図）

IVb層（試料1）からVIb層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、IVb層（試料1）とVIa層（試料2）からイネが検出された。このうち、桜島文明軽石直下のIVb層（試料1）では密度が3,900個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

VIa層（試料2）では密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、稻藁の大半が耕作地以外に持ち出されていたこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

プランツ・オバール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類やヒエ属型（ヒエが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、各層ともタケ亜科（おもにメダケ属ネザサ節）が多量に検出され、ススキ属も比較的多く検出された。また、下位層を中心にヨシ属も比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おむねヨシ属やタケ亜科が優勢であり、IV層ではイネも多くなっている。また、J-35地点ではススキ属型が他の地点よりも多くなっている。

以上のことから、稻作が開始される以前の堆積環境は、ヨシ属が生育するような湿地的な状況であったと

考えられ、周辺にはメダケ属（おもにネザサ節）やススキ属などが多く生育する草原的なところも分布していたと推定される。

その後、VIa層の時期にはヨシ属などが生育する湿地を利用して水田稲作が開始されたと考えられる。なお、稻作の開始以降もヨシ属などが多く見られることから、水田雜草などとしてヨシ属などが生育していたこと、休耕期間中にヨシ属などが繁茂していたこと、施肥などの目的でヨシ属などが水田内に持ち込まれたことなどが想定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、桜島文明軽石（Sz-3、1471年）直下のIVa層からIVb層にかけては、各地点ともイネが多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、H-13区のVIa層でも稻作が行われていた可能性が高いと判断された。

本遺跡周辺は、稻作が開始される以前はヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、VIa層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺にはメダケ属（おもにネザサ節）やススキ属などが多く生育する草原的なところも分布していたと推定される。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社。p.189-213。

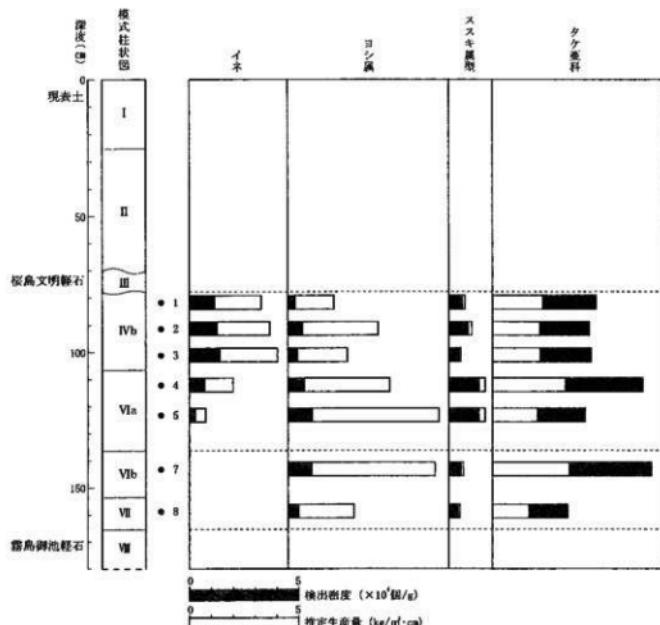
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学。9。p.15-29。

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学。17。p.73-85。

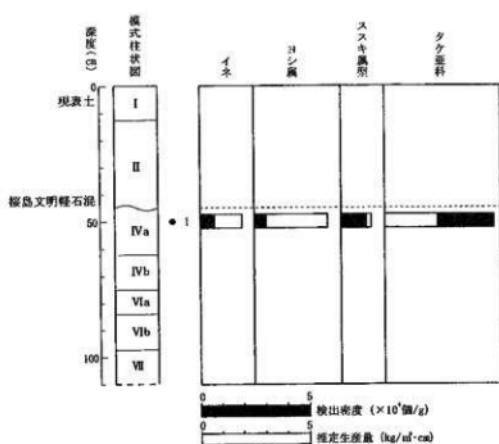
第15表 早馬遺跡におけるプラント・オバール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		H-13区								J-24区				J-36区			
分類群	学名	1	2	3	4	5	7	8	1	1	2	3	4	1	2	3	4
イネ	<i>Oryza sativa</i>	114	128	140	69	25			67	39	7						
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	34	67	44	76	113	110	49	54	66	61	35	104				
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	61	88	44	139	138	55	42	114	130	128	211	160				
タケ亜科	Bambusoideae	498	466	473	723	445	763	361	529	667	527	338	479				

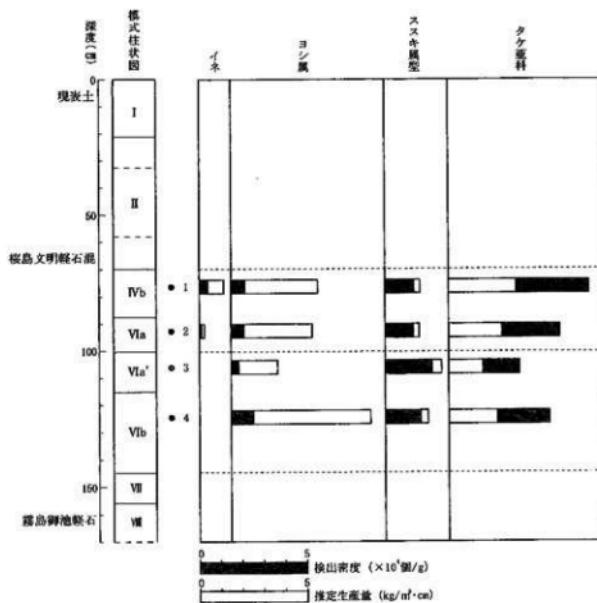
推定生産量 (単位: kg/m ² ·cm) : 試料の板比重を1.0と仮定して算出		H-13区								J-24区				J-36区			
分類群	学名	1	2	3	4	5	7	8	1	1	2	3	4	1	2	3	4
イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.36	3.77	4.13	2.04	0.74			1.97	1.14	0.20						
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.12	4.26	2.80	4.82	7.13	6.94	3.07	3.38	4.09	3.84	2.22	6.57				
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.75	1.09	0.55	1.72	1.71	0.68	0.52	1.41	1.61	1.59	2.62	1.98				
タケ亜科	Bambusoideae	2.39	2.23	2.27	3.47	2.14	3.66	1.73	2.54	3.20	2.53	1.62	2.30				



第53図 H-13区におけるプラント・オバール分析結果

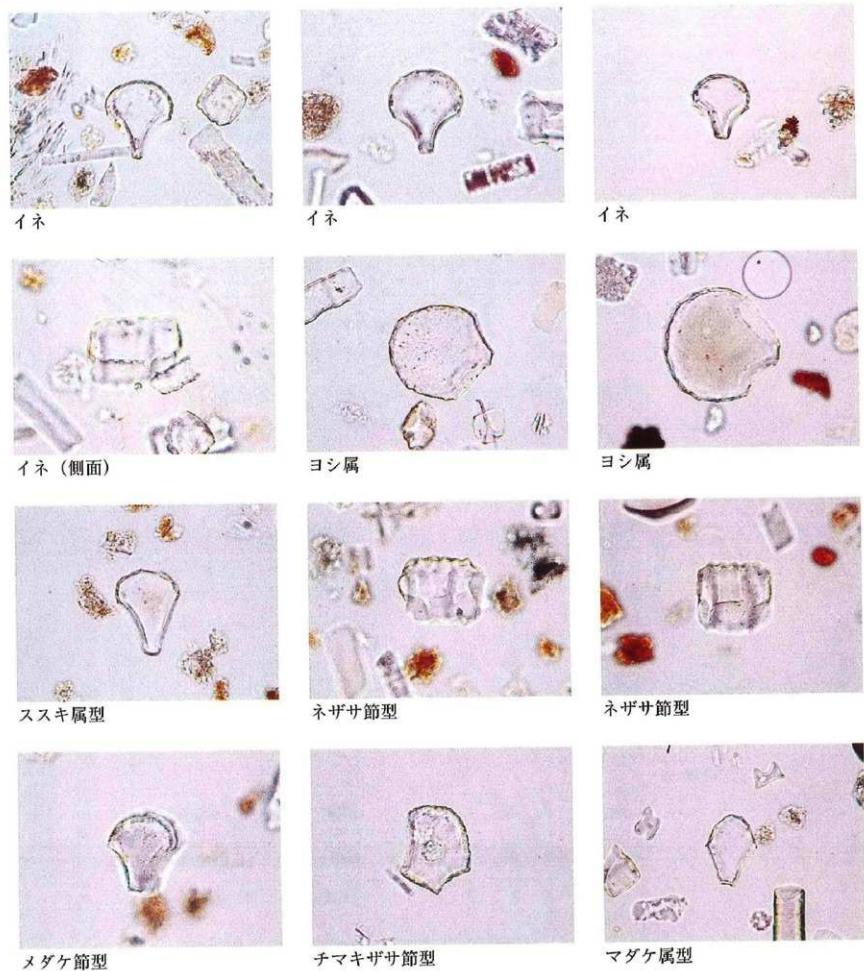


第54図 J-24区におけるプラント・オバール分析結果



第55図 J-35区におけるプラント・オバール分析結果

図版2 早馬遺跡の植物珪酸体（プラント・オバール）の顕微鏡写真



— 50 μ m

第5章まとめ

第1節 早馬遺跡における中世の遺構・遺物について

これまで早馬遺跡で検出された遺構・遺物について、西区と東区のそれぞれの成果を報告してきた。ここでは、早馬遺跡全体としての調査成果を俯瞰し、中世の遺跡としてどのように評価できるかを考えてみたい。

遺構については、早馬遺跡全体で掘立柱建物跡・ピット列14棟、溝状遺構27条、土坑69基、硬化面5条、不明遺構3基が検出されている。西区・東区ともに溝状遺構は調査区全体で検出される傾向にあるが、掘立柱建物跡や土坑は比較的集中して検出されている。掘立柱建物跡は、主軸方向からいくつかの群にグルーピングが可能であるが、全体像を把握できたものは東区のSB06のみで、出土遺物も僅少であることから詳細な評価を与えることは難しい。敢えて言及すれば、西区は棟の主軸方向を南北に取ると考えられるものが大部分で、東区では東西方向のものが多いという傾向がある。このことは、後述するように出土した貿易陶磁器からは西区と東区で若干の時期差が認められることと相俟って、西区と東区とで遺構の構築時期にいくらかの差がある可能性を示唆するものである。

都城市内における掘立柱建物跡の平面プランおよび建物面積についてはいくつかの先行研究がある。まず、佛山・郡元地区遺跡について検討した谷口武範氏は3間×1間が基本的な間取りであるとしている（谷口 1992）。また、並木添遺跡で検出された建物跡を検討した秦畑光博氏は、3間×2間ないしは3間×1間が間取りの基準であり、建物面積は5～7坪前後が最も多いと述べている（秦畑 1993）。さらに、外山隆之氏と原田亞紀子氏は市内の遺跡で検出された掘立柱建物跡について網羅的な検討を加えている（外山・原田 2004）。その中で、従来から指摘されているとおり、都城市内の遺跡では3間×2間の庇をもたないプランがもっとも普遍的なものだとしている。また、その面積は15～27m²が最も多くと結論付けている。早馬遺跡では全体像が分かるものはSB06の3間×2間の1棟のみであるが、部分的に検出した建物跡に関しても、館跡にみられるような突出して大型の建物跡は存在しないものといえる。後述するように、掘立柱建物跡が検出された範囲を囲むように検出された溝状遺構は、居住域を区画する溝である可能性が考えられる。また、ピット列を除く12棟の掘立柱建物跡のうち半数近い5棟が庇を有している。そのうちSB02は2面庇である。そのため、単純に一般的な農民層が居住した集落と断定するには躊躇するが、上でみたように検出した建物跡からは有力領主層の存在は窺えない。

土坑についても遺物が出土しているものが少なく、細かな時期を割り出すことは困難である。その中で、3基検出された土坑墓と考えられる遺構では土師器を中心として一括資料の抽出が可能である。他に貿易陶磁器などの船属時期が明確な共出遺物は認められないが、今後当該時期の土師器を編年する際に貴重な資料といえよう。土師器が複数埋納されていた土坑墓であるSC23とSC38は、東区で掘立柱建物跡と近接して検出されており、屋敷墓の可能性が考えられる。西区で検出されたSC01も完形の大宰府分類白磁碗IV類の出土状況から、土坑墓と考えられる。しかし、西区で掘立柱建物跡が検出された範囲からは70m程離れた沖積段丘の縁辺部で検出されており、東区で検出された土坑墓とは様相が異なる。

溝状遺構に関しては、道跡と考えられる硬化面を有すものがいくつか検出されている他、深さが1～2m前後で埋土に砂粒や軽石粒が多く含み、底面付近がオーバーハングする明らかに水の流れが存在していたと考えられるものが多数検出された。それらの多くは底面近くになると夥しい湧水が認められることから、住居域を区切る溝としての機能と同時に水田に水を送るための用排水路の機能も持ち合わせていたと想定され

る。冷たい河川の水や湧水を一旦溝に流することで水を温める効果があったのであろう。水田跡については平面的に把握することは断念したが、土層断面の観察およびプラント・オパール分析からはいずれも水田跡が存在した可能性が高いという結論に至っている。

次に出土遺物についてみてみたい。既に報告したように、早馬遺跡における出土遺物は青磁・白磁など貿易陶磁器を中心に、土師器も多くみられ、東播系須恵器・常滑焼など国産陶器も出土している。これらの多くは破片資料であり、完形資料は土坑内から出土した土師器以外は数点を数えるのみである。土師器杯・小皿や東播系須恵器は全体的な法量や器形が時期比定の際に大きなウェイトを占めており、小破片では帰属時期の誤認の可能性が極めて高くなる。各地区的報告の項では限られた資料から改めて出土遺物の帰属時期の推定を行ったが、実際には分類・編年研究の進んだ青磁・白磁を中心とする貿易陶磁器から遺構の帰属時期ないしは遺跡の盛行期を割り出す必要がある。以下、出土遺物を再度遺跡全体からの視点で俯瞰すると共に、青磁・白磁を時期比定の基準の中心に据き、遺跡の動態について若干の考察を加えることとする。

そもそも西区・東区という2地区に分けて調査を行ったのはあくまで調査の段取り上の便宜的なものである。しかし結果的には出土遺物の検討からは、両区の間には遺物の種類により出土量の多寡およびいくらかの時期差が確認できた。まず、西区の包含層出土遺物をみると、白磁・青磁の出土量が東区に比べ多いことが分かる。白磁では大宰府分類の椀IV類（11世紀後半から12世紀前半）がわずかに認められるが、多くが12世紀中頃から後半に比定される白磁椀V類ないしは皿類に相当するものである。青磁をみてみると、やはり12世紀中頃から後半の所産であるとされる龍泉窯系椀I類と同安窯系椀I・皿類が圧倒的に多い。中国陶器に関しては破片資料が多く、分類および時期比定に苦慮するものが多数を占めるが、先述のように青磁・白磁の年代観からは12世紀中頃から後半が西区の遺構群の構築時期である可能性が高い。ただし、西区出土の土師器や東播系須恵器は13世紀前半の所産である可能性が高く、12世紀後半から13世紀前半の幅の中で遺構が構築されたものと考えられる。出土遺物からは、その中でも12世紀後半段階が最盛期と推定される。

一方、東区では西区に比べ青磁・白磁の出土量は少ない。白磁に関しては、西区同様に大宰府分類の椀IV類がわずかにみられ、V類ないしは皿類が多数を占めており、西区と大きな時期差は認められない。しかし、青磁をみると、大宰府分類の龍泉窯系椀I類もみられるものの、多くが13世紀前後から前半に比定される龍泉窯系椀II類である。遺構内出土資料でも同様の傾向を看取できる。西区の遺構内からはII類がほとんど出土していないが、東区検出の遺構ではII類がI類と同量あるいはそれ以上に多く出土している。また、東区では土師器杯および小皿が西区に比べ多量に出土している。しかも掘立柱建物跡をはじめとする遺構群が集中して検出されたH-24区周辺を中心に出土していることから、包含層出土遺物の年代と遺構構築時期とは整合性があると考へてよいだろう。東区の土師器と東播系須恵器も12世紀後半から13世紀前半の所産であると考へられ、青磁椀の出土傾向を考慮しても最盛期は13世紀前半頃と推測される。以上のことから、出土遺物、特に貿易陶磁器に基づいた遺跡の消長について考えてみると、遺跡の出現期の上限は11世紀後半から12世紀前半にかけてと考へられる。しかし、遺跡内での土地利用は限定的であり、わずかに生活の痕跡が垣間見られる程度である。その後、12世紀中頃から後半にかけては遺跡の西側（西区）を中心に遺構が構築され、13世紀代に入ると遺跡の東側に中心が移るが遺跡全体が集落として機能していたものと考えられる。13世紀中頃から14世紀初頭の遺物としては、大宰府分類白磁椀および皿のII類がわずかに出土しているのみである。この頃早馬遺跡は集落としての機能を終え、水田稲作の場としてその意味合いを大きく転換したのだろう。これまでみてきた遺物の大部分がIV層からVIa層上部にかけての出土であるが、桜鳥文明軒石（III層）直下のIV層に加え、西区ではVIa層からも多量のプラント・オパールが検出されており、この頃水田稲

作が開始された可能性が指摘されている（第4章参照）。遺物の出土層位と帰属年代が必ずしも整合性をもつものではないが、出土遺物が激減する13世紀中頃以降には部分的に水田耕作が導入されていた可能性が指摘できよう。早馬遺跡で検出した溝状遺構の中にはこの水田耕作に付随する用排水路が存在した可能性も考えられる。その後、途中で絶続のあった可能性も否定できないが、桜島文明軽石が降下した15世紀後半まで連綿と水田が営まれていたものと考えられる。

第2節 横市遺跡群における早馬遺跡の位置づけ

前節では早馬遺跡において検出された遺構・遺物に検討を加え、早馬遺跡の中世集落としての動態を検討してきた。ここでは、横市遺跡群のうち早馬遺跡と同様に中世の遺構・遺物が確認された遺跡を概観し、それらの遺跡と早馬遺跡を比較検討することで横市地区というより広い範囲での早馬遺跡の位置づけを考察してみたい。

横市遺跡群の中で、中世の遺跡としては、鎌倉時代の在地領主館跡が確認された加治屋B遺跡や市内でも最大規模の掘立柱建物跡が検出された鶴喰遺跡をはじめ枚挙に遑がない。これらの中世遺跡のうち、加治屋B遺跡と舷穴遺跡は本年度報告書が刊行されるため、詳細な検討は今後に俟たねばならないが、既に報告書が刊行された遺跡を中心にみていくことにしよう。

まず、早馬遺跡から200m程東には正坂原遺跡が位置する。ここでは12世紀中頃から後半を中心とし、桜島文明軽石が降下した15世紀後半までの遺構・遺物が出土している。中でも掘立柱建物跡40棟が検出されているのに加え、屋敷墓と考えられる大型の木棺墓も確認されていることが特筆されよう。鳥津莊の拡大期における開発領主層の屋敷跡の可能性が考えられている（柴畑 2006）。出土遺物をみると、大宰府分類白磁碗IV類およびV類ないしはⅥ類に相当する資料が多く出土しているのをはじめ、同安窯系青磁碗および皿、東播系須恵器などが出土しており、早馬遺跡の出土遺物と酷似する。地理的な近さも考慮すると、両遺跡の密接な関係性が想定される。

さらに、開析谷を挟んで早馬遺跡のわずか100m北西には平田遺跡C地点が位置する。先に触れたように、土壠の堆積状況も極めてよく似ており、概ね同時期の遺跡としてよいだろう。平田遺跡C地点では出土遺物および検出遺構とともに少なく、細かな遺構の変遷過程などは全く不明である。しかし、文明軽石降下後の水田跡とそれ以前の水田跡という中世の枠の中でも複数時期の水田跡が確認されており、早馬遺跡のプラント・オーバル分析の結果とも整合的である。やはり14世紀代から15世紀後半前後にはこの一帯で水田面が広がっていたものと推定される。

この他、各遺跡の帰属時期のみを横市川の下流から列挙すると、まず今房遺跡は出土した貿易陶磁器からは12世紀中頃から14世紀初頭と時間幅が認められる。加治屋B遺跡の中世の遺構・遺物は、13世紀から14世紀にかけての所産であるとされる。坂元A遺跡・坂元B遺跡も加治屋B遺跡とほぼ同様の年代が付与されよう。鶴喰遺跡の最盛期は13世紀後半から14世紀初頭と考えられている。馬渡遺跡では13世紀後半から14世紀前半の集落跡が確認されている。粟原遺跡でも13世紀代と考えられる掘立柱建物跡が検出されている。

このようにみてくると、大まかな傾向として横市川の下流右岸では12世紀中頃から13世紀前半頃までの集落が、上流の両岸では主に13世紀から14世紀代に盛行期をもつ遺跡が確認されていることが分かる。このような集落遺跡の中には、在地の有力領主層の館跡と考えられる遺跡も存在する。横市川下流の正坂原遺跡は12世紀後半期の開発領主館跡の可能性が指摘されている。さらに、上流に位置する溝状遺構に囲まれた96棟もの掘立柱建物跡が検出された加治屋B遺跡は在地領主館跡と考えられている。また、その対岸に位置する

鶴喰遺跡でも大型の据立柱建物跡をはじめ多くの建物跡が検出され、ここでも有力な在地領主の館跡の存在が想定されている。このように、横市地区では集落跡と開発領主層の邸宅と考えられる館跡がみつかっており、両者の関係性や当時の集落景観を復元するには貴重な情報を提供してくれる。また、居館と水田がセットとなる中世の莊園の様相を把握するためにも最適の地域といえよう（都城市 2005）。

最後に横市遺跡群における早馬遺跡の位置づけについて旨としておきたい。上でみてきたように、横市地区では館跡と集落跡の両者がみつかっている。早馬遺跡では遺跡の全体像を把握することはできなかつたが、貿易陶磁器を中心とする遺物が比較的まとまって出土していること、その中には青白磁の合子や天目茶碗といった高級品も含まれていること、遺跡内を走行する溝状遺構の存在などから調査区外に大型の建物跡が存在し、有力領主が居住していたことを完全には否定できない。しかし、今回の調査からはそのような建物跡は検出されておらず、建物跡からみれば規模・数的に一般的な集落遺跡と考えざるを得ない。ここでは12世紀後半から13世紀前半に盛行期をもつ集落遺跡として位置づけておきたい。その後、少なくとも桜島文明軽石が降下する15世紀後半頃までは水田跡として利用された生産遺跡として評価できよう。

県営は場整備事業に伴う横市地区遺跡群の発掘調査は既に終了し、その調査成果を盛り込んだ報告書も今年度をもって全て刊行の運びとなる。各遺跡の調査成果と検出遺構・遺物の評価はそれぞれの報告書で提示されているが、今後はこれらの遺跡を横市地区全体ひいては都城盆地というより巨視的な視点で評価・検討する必要があろう。

【参考文献】

- 森畠光博 1993 『並木添遺跡』都城市文化財調査報告書 第24集 都城市教育委員会
2004 『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書 第62集 都城市教育委員会
2006 『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書 第71集 都城市教育委員会
森畠光博編 2002 『横市地区遺跡 群江内遺跡・坂元遺跡・加治屋B遺跡』都城市文化財調査報告書 第58集 都城市教育委員会
鈴木健二 2001 「貴原遺跡」「梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 萩原遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集 宮崎県埋蔵文化財センター
谷口武範 1992 『柳山・郡元地区遺跡』宮崎県教育委員会
外山隆之・原田亜紀子 2004 「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」「宮崎考古」第19号 宮崎考古学会
近沢恒典・下田代清海・米澤英昭 2006 『鶴喰遺跡（中世編）』都城市文化財調査報告書 第79集 都城市教育委員会
矢部喜多夫 1993 「正坂原遺跡」「久玉遺跡第5次発掘調査 油田遺跡 正坂原遺跡」都城市文化財調査報告書 第25集 都城市教育委員会
矢部喜多夫・中村友昭 2007 『今房遺跡』都城市文化財調査報告書 第80集 都城市教育委員会
都城市 2005 『都城市史 通史編 中世・近世』
都城市 2006 『都城市史 資料編 考古』

図版3 早馬遺跡空中写真



早馬遺跡遠景（南東上空より霧島を望む）



早馬遺跡調査区全景

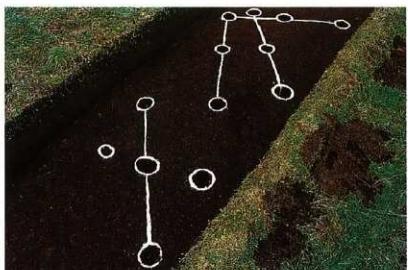
図版4 西区の調査①



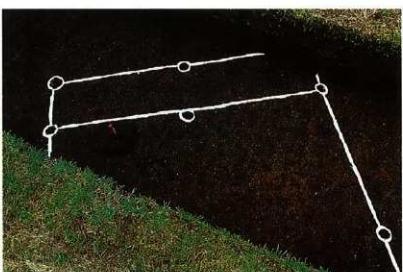
西区土層堆積状況（K-13杭付近）



西区土層堆積状況（Ⅲ層攪拌状況）



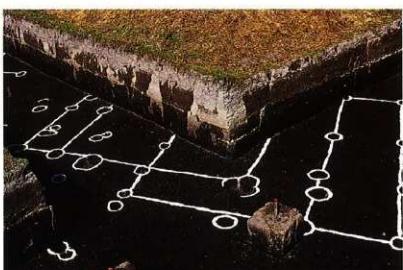
SB03・04・05完掘状況（東から）



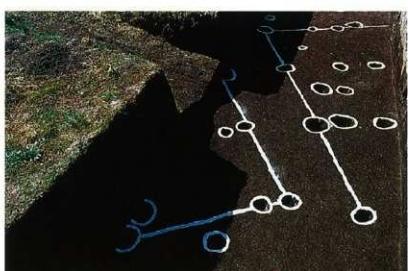
SB07完掘状況（北から）



SB09・10・11・12完掘状況（東から）



SB09・11完掘状況（南東から）



SB10・11完掘状況（東から）



SB13完掘状況（南東から）

図版5 西区の調査②



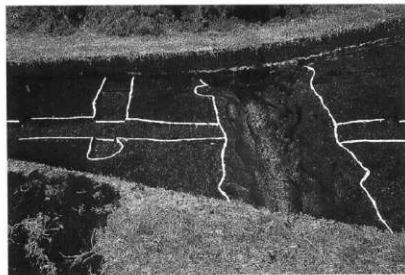
SD01完掘状況（南東から）



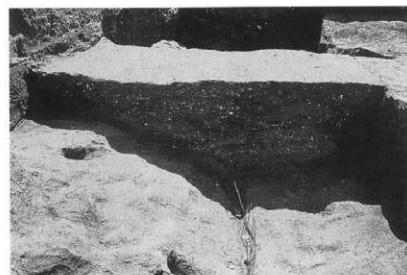
SD01・02・03遠景（南西から）



SD04土層断面



SD04・05・06完掘状況（南から）



SD07土層断面



SD07・08完掘状況（東から）



SD12土層断面

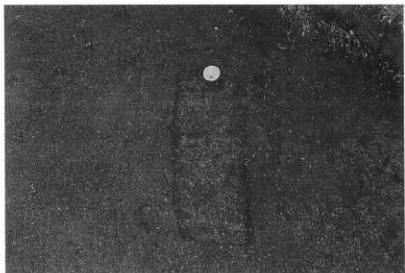


SD12（北側）完掘状況（東から）

図版6 西区の調査③



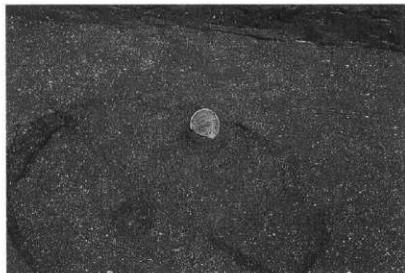
SC01白磁塊 (47) 検出状況 (南西から)



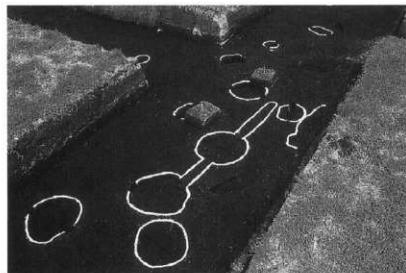
SC01完掘状況 (南西から)



SC48土師器杯 (51) 出土状況 (東から)



SC58土師器小皿 (57) 出土状況 (南から)



J-13杭付近土坑群完掘状況 (南東から)



SX03・SD24・SC70・71完掘状況 (南西から)



IVb層遺物出土状況



青白磁合子身 (119) 出土状況